

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第195集

東上秋間遺跡群

北陸新幹線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1995

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第195集

東上秋間遺跡群正誤表

頁	位置	誤	正
P70	表18 57-3	PL15	PL無

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-311
	調査事業団保管	2
No. 96-95	平成8年4月4日	(5)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第195集

東 上 秋 間 遺 跡 群

北陸新幹線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1995

群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 鉄 道 建 設 公 団

序

北陸新幹線は、平成10年度に開催される冬期オリンピックに供用開始すべく、現在、群馬、長野両県で工事が進められています。群馬県側では、この工事に先だち、新幹線の路線上と、それに関連する施設上に所在する埋蔵文化財の発掘調査が平成3年2月より始まり本年10月にそれが、すべて終了しました。

本書で報告する中秋間甲木ノ巣谷津Ⅰ、中秋間中島、東上秋間稲貝戸、東上秋間笹田、東上秋間神水の5遺跡は、平成3年度に発掘調査した遺跡で、いずれも仮称新安中駅に近接した遺跡です。いずれの遺跡も、山間地に立地していたため調査が難行しましたが、予想外に遺構が少なく比較的早めに調査が終了しました。これらの遺跡は、平成6年度より報告書刊行のための整理作業を行い、本年にいたってそれが完了しましたので、ここに、5遺跡を一冊にして「東上秋間遺跡群」として調査報告書を上梓することになりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局、群馬県教育委員会文化財保護課、安中市教育委員会、地元関係者等より各種のご指導、ご協力を賜りました。これらの関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が多くの方に活用されることを願い序とします。

平成7年10月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は、北陸新幹線建設に伴う事前調査として、平成3年度に実施した「中秋間甲木ノ巢谷津I遺跡」「中秋間中島遺跡」「東上秋間稲貝戸遺跡」「東上秋間笹田遺跡」「東上秋間神水遺跡」の発掘調査報告書である。本書名は上記5遺跡のうち、多い字名をとって「東上秋間遺跡群」とした。

2. 各遺跡の所在地は、下記の通りである。

中秋間甲木ノ巢谷津I遺跡…安中市大字中秋間字甲木ノ巢谷津2491-1・2492

中秋間中島遺跡…安中市大字中秋間字中島2637-1・2638-1・2639-1ほか

東上秋間稲貝戸遺跡…安中市大字東上秋間字稲貝戸3213-1・3213-4・3215-3・3215-8

東上秋間笹田遺跡…安中市大字東上秋間字笹田3276・3277・3278-1

東上秋間神水遺跡…安中市大字東上秋間字神水2548・2552-1・2552-2・2554-2

3. 発掘調査は北陸新幹線建設に伴う事前調査として、群馬県教育委員会が日本鉄道建設公団から委託を受け、さらに、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が再委託を受け、調査を実施した。

4. 発掘調査期間は、下記の通りである。

中秋間甲木ノ巢谷津I遺跡…平成3年4月1日～平成3年5月31日

中秋間中島遺跡…平成3年11月12日～平成3年12月11日

東上秋間稲貝戸遺跡…平成3年7月1日～平成3年7月31日

東上秋間笹田遺跡…平成3年6月1日～平成3年6月30日

平成3年12月1日～平成4年3月31日

東上秋間神水遺跡…平成3年8月1日～平成3年12月31日

5. 発掘調査組織は下記の通りである。

事務担当職員 常務理事 邊見長雄 事務局長 松本浩一 管理部長 佐藤勉 調査研究部長 神保侑史 庶務課長 岩丸大作 調査研究第1課長 真下高幸 庶務課主任 国定均 笠原秀樹 主事 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津茂

発掘担当職員 主任調査研究員 綿貫鋭次郎 関根慎二 調査研究員 小林裕二 (中秋間甲木ノ巢谷津I遺跡・東上秋間稲貝戸遺跡・東上秋間笹田遺跡・東上秋間神水遺跡)
主任調査研究員 井川達雄 菊池実 (中秋間中島遺跡)

6. 整理事業は、平成6年度に群馬県教育委員会から委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施し、平成7年度に報告書を刊行した。

7. 整理期間は、平成6年10月1日～平成7年3月31日である。

8. 整理事業組織は下記の通りである。

事務担当職員 常務理事 中村英一 事務局長 近藤功 管理部長 蜂巢実 調査研究部長 神保侑史 総務課長 斉藤俊一 調査研究第3課長 巾隆之 総務課係長代理 国定均 笠原秀樹 主任 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 主事 高橋定義

整理担当職員 調査研究員 深澤敦仁

嘱託員 鈴木幹子

補助員 手塚ふみ江 新平美津子 小淵トモ子 新井雅子 金子弘子 高野明美

9. 写真撮影は、遺構は各調査担当者、遺物は佐藤元彦（主任技師）が行った。
10. 金属の保存処理は関邦一（主任技師） 土橋まり子（非常勤嘱託） 小材浩一 小沼恵子（補助員）が行った。
11. 調査・整理にあたっては、次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。（敬称略）
大江正行 関根慎二 岩崎泰一 津島秀章 綿貫鋭次郎 菊池実 大西雅弘 矢口裕之 小野和之 黒沢照弘 安中市教育委員会 安中市役所 鹿沼敏子 阿部幸恵 松岡陽子 嶋崎しづ子 綿貫邦男
12. 本遺跡の出土遺物・図面・写真等の全資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
13. 本書の執筆は下記の執筆者によって分担した。
関根慎二（主任調査研究員：縄文土器観察表） 黒沢照弘（調査研究員：陶磁器観察表） 古環境研究所（自然科学分析） 深澤敦仁（調査研究員：本文・その他）
14. 本書の編集は深澤敦仁・山本光明（調査研究員）がおこなった。

凡 例

1. 遺構番号は発掘時と報告時と同一である。遺物番号は発掘時と報告時では異なる。
2. 遺構図中の方位は各図ごとに異なるため、それぞれに磁北を示した。
3. 遺構・遺物実測図の縮尺率は、各図にスケールを入れた。
また、同一実測図版中に縮尺率の異なる図を併載した場合は、図右下に各々縮尺率を記載した。
4. 写真図版の縮尺率は、原則として下記の通りである。
【遺構】不統一 【遺物】縄文土器 集合写真…不統一 その他…1：3
5. 本書で使用した地図は下記の通りである。
図2・6・12・21・31・42…国土地理院発行 1/50,000「榛名山」
図5・55…国土地理院発行 1/25,000「三ノ倉」「下室田」
6. 表3～6については、「安中市の遺跡―市内遺跡詳細分布調査報告書―」（安中市教育委員会 1992）より引用し、再編集した。

目 次

序

例言・凡例

抄録

I 発掘調査に至る経過…………… 1	V 東上秋間稲貝戸遺跡……………27
1 安中市秋間地区埋蔵文化財発掘 調査について	1 立地と環境 2 調査経過
2 遺跡名称及びその略号について	3 基本層序 4 調査概要
3 調査区画の設置	5 検出遺構 6 出土遺物
II 東上秋間遺跡群をとりまく環境…………… 5	VI 東上秋間笹田遺跡……………37
1 立地と環境	1 立地と環境 2 調査経過
2 周辺遺跡	3 基本層序 4 調査概要
III 中秋間甲木ノ巣谷津 I 遺跡……………11	5 検出遺構
1 立地と環境 2 調査経過	VII 東上秋間神水遺跡……………49
3 基本層序 4 調査概要	1 立地と環境 2 調査経過
5 検出遺構	3 基本層序 4 調査概要
IV 中秋間中島遺跡……………17	5 検出遺構 6 自然科学分析
1 立地と環境 2 調査経過	VIII まとめ……………65
3 基本層序 4 調査概要	付編……………67
5 自然科学分析	

写真図版

挿 図 目 次

<p>図1 北陸新幹線（高崎・長野間）路線概要図（上） 及び線路縦断概要図（下）……………1</p> <p>図2 北陸新幹線（安中・秋間地区）調査対象遺跡位置図……………3</p> <p>図3 調査区画設置図……………4</p> <p>図4 秋間丘陵略図……………5</p> <p>図5 秋間地区遺跡分布図……………7</p> <p>図6 中秋間甲木ノ巣谷津Ⅰ遺跡位置図……………11</p> <p>図7 基本層序図……………12</p> <p>図8 調査区位置図……………13</p> <p>図9 調査区全体図……………14</p> <p>図10 炭焼窯計測ポイント図……………15</p> <p>図11 炭焼窯平・断面図……………15</p> <p>図12 中秋間中島遺跡位置図……………17</p> <p>図13 基本層序図……………18</p> <p>図14 調査区位置図……………19</p> <p>図15 調査区全体図……………19</p> <p>図16 調査区断面図……………20</p> <p>図17 中秋間中島遺跡南壁の地質柱状図……………23</p> <p>図18 中秋間中島遺跡北壁の地質柱状図……………23</p> <p>図19 中秋間中島遺跡南壁におけるプラント・オパール 分析結果……………26</p> <p>図20 中秋間中島遺跡北壁におけるプラント・オパール 分析結果……………26</p> <p>図21 東上秋間稲貝戸遺跡位置図……………27</p> <p>図22 基本層序図……………28</p> <p>図23 調査区位置図……………28</p> <p>図24 調査区東半トレンチ平・断面図……………29</p> <p>図25 調査区西半平・断面図……………30</p> <p>図26 1号土坑平・断面図……………31</p> <p>図27 2～6号土坑平・断面図……………32</p> <p>図28 出土遺物実測図（1）……………34</p> <p>図29 出土遺物実測図（2）……………35</p>	<p>図30 遺物出土位置分布図……………35</p> <p>図31 東上秋間笹田遺跡位置図……………37</p> <p>図32 基本層序図……………38</p> <p>図33 調査区位置図……………39</p> <p>図34 トレンチ平・断面図（1）……………40</p> <p>図35 トレンチ平・断面図（2）……………41</p> <p>図36 炭焼窯計測ポイント図……………42</p> <p>図37 調査区全体図……………折込</p> <p>図38 炭焼窯平・断面図……………45</p> <p>図39 As—A下畠平・断面図……………46</p> <p>図40 As—A下水田平・断面図……………47</p> <p>図41 沢平面図……………48</p> <p>図42 東上秋間神水遺跡位置図……………49</p> <p>図43 基本層序図……………50</p> <p>図44 調査区位置図……………51</p> <p>図45 調査区全体図……………52</p> <p>図46 溝平・断面図……………53</p> <p>図47 登窯計測ポイント図……………54</p> <p>図48 As—A下水田範囲図……………55</p> <p>図49 登窯平・断面図……………56</p> <p>図50 出土遺物実測図……………58</p> <p>図51 東上秋間神水遺跡第1地点の地質柱状図……………61</p> <p>図52 東上秋間神水遺跡第2地点の地質柱状図……………61</p> <p>図53 東上秋間神水遺跡第3地点の地質柱状図……………61</p> <p>図54 東上秋間神水遺跡におけるプラント・オパール 分析結果……………64</p> <p>図55 東上秋間遺跡群周辺遺物表面採集地点……………67</p> <p>図56 蛇喰地区表面採集遺物実測図……………69</p> <p>図57 日向地区表面採集遺物実測図……………71</p> <p>図58 三角谷津地区表面採集遺物実測図（1）……………73</p> <p>図59 三角谷津地区表面採集遺物実測図（2）……………74</p>
---	---

表 目 次

<p>表1 北陸新幹線（安中市秋間地区）地域埋蔵文化財 一覧表……………2</p> <p>表2 北陸新幹線（安中市秋間地区）地域埋蔵文化財 発掘調査遺跡一覧表……………2</p> <p>表3 周辺遺跡・遺物散布地一覧表……………8</p> <p>表4 周辺古墳一覧表（1）……………9</p> <p>表5 周辺古墳一覧表（2）……………10</p> <p>表6 周辺城館址……………10</p> <p>表7 中秋間中島遺跡北壁のテフラ検出分析結果……………22</p> <p>表8 中秋間中島遺跡におけるプラント・オパール分析結果……………25</p> <p>表9 中秋間中島遺跡におけるおもな植物の推定生産量……………26</p>	<p>表10 ビットデータ一覧表……………30</p> <p>表11 出土遺物観察表（1）……………32</p> <p>表12 出土遺物観察表（2）……………33</p> <p>表13 東上秋間神水遺跡遺物観察表……………57</p> <p>表14 東上秋間神水遺跡のテフラ検出分析結果……………60</p> <p>表15 東上秋間神水遺跡におけるプラント・オパール分析結果……………63</p> <p>表16 東上秋間神水遺跡におけるおもな植物の推定生産量……………64</p> <p>表17 蛇喰地区表面採集遺物観察表……………68</p> <p>表18 日向地区表面採集遺物観察表……………70</p> <p>表19 三角谷津地区表面採集遺物観察表……………72</p>
--	--

写真図版目次

PL 1 中秋間甲木ノ巢谷津遺跡

1. 調査区風景（南から）
2. 炭焼窯（東から）
3. 炭焼窯（東から）
4. 炭焼窯（東から）
5. 炭焼窯（南から）

PL 2 中秋間中島遺跡

1. As—B下水田全景（空撮）
2. 調査風景（西から）
3. 北トレンチ全景（西から）
4. 調査風景（西から）
5. 下段トレンチ全景（西から）

PL 3 東上秋間稲貝戸遺跡

1. 調査区遠景（北から）
2. 調査区全景（空撮）

PL 4 東上秋間稲貝戸遺跡

1. 調査前風景（北から）
2. 試掘トレンチ全景（西から）
3. 西側調査区全景（西から）
4. 1号土坑（東から）
5. 2号土坑（西から）
6. 3・4号土坑（東から）
7. 5号土坑（西から）
8. 6号土坑（東から）

PL 5 東上秋間稲貝戸遺跡出土遺物

PL 6 東上秋間笹田遺跡

1. 調査区遠景（北から）
2. 調査区全景（空撮）

PL 7 東上秋間笹田遺跡

1. 東斜面試掘（西から）
2. As—A下水田セクション（東から）
3. 西斜面試掘（西から）
4. 東斜面試掘（南から）
5. 西斜面試掘（西から）

PL 8 東上秋間笹田遺跡

1. As—A下水田足跡群（南西から）
2. As—A下水田足跡（西から）
3. As—A下水田足跡（西から）
4. As—A下畠（北東から）
5. As—A下水田足跡（西から）

PL 9 東上秋間笹田遺跡

1. 炭焼窯（南から）
2. 炭焼窯（南から）
3. 炭焼窯（南から）
4. 炭焼窯（南から）
5. 炭焼窯（南西から）

PL 10 東上秋間神水遺跡

1. 調査区全景（空撮）
2. 水田？（南西から）
3. 水田？内礫出土状況（西から）
4. 水田？（西から）
5. 沢内流木出土状況（南東から）

PL 11 東上秋間神水遺跡

1. 1号溝（西から）
2. 2号溝（東から）
3. 3号溝（北から）
4. 4号溝（北から）
5. 5号溝（南から）
6. 6号溝（北から）
7. 7号溝（南から）

PL 12 東上秋間神水遺跡

1. 登窯（西から）
2. 登窯セクション（西から）
3. 登窯（北西から）
4. 灰原付近近接（西から）
5. 登窯奥部焼石炭化材出土状況（西から）

PL 13 東上秋間神水遺跡出土遺物

PL 14 蛇喰地区表面採集遺物

PL 15 日向地区表面採集遺物

PL 16 三角谷津地区表面採集遺物

発掘調査報告書抄録

書名	ヒガシカミアキマイセキグン							
	東上秋間遺跡群							
副書名	北陸新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第195集							
編著者名	深澤敦仁・山本光明・関根慎二・黒沢照弘							
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279(52)2511							
発行年月日	西暦1995年10月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中秋間甲木ノ巢 谷津Ⅰ	安中市大字中秋間字甲 木ノ巢谷津	10211	10005 00341	36度 21分 46秒	138度 52分 07秒	19910401) 19910531	700	鉄道(北陸新 幹線)建設に 伴う事前調査
中秋間中島	安中市大字中秋間字中 島	10211	10005 00342	36度 21分 43秒	138度 51分 58秒	19911112) 19911211	300	同上
東上秋間稲貝戸	安中市大字東上秋間字 稲貝戸	10211	10005 00343	36度 21分 31秒	138度 51分 29秒	19910701) 19910731	1,100	同上
東上秋間笹田	安中市大字東上秋間字 笹田	10211	10005 00344	36度 21分 28秒	138度 51分 23秒	19910601) 19910630 19911201) 19920331	3,000	同上
東上秋間神水	安中市大字東上秋間字 神水	10211	10005 00345	36度 21分 22秒	138度 51分 15秒	19910801) 19911231	3,000	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中秋間甲木ノ巢 谷津Ⅰ	窯	近世	炭窯	1基	—		—	
中秋間中島	生産遺跡	平安時代	水田	1面	—		明確な畦畔は未検出だが、 プラント・オパール分析結 果から判断	
東上秋間稲貝戸	その他	縄文時代 近世	土坑 溝	6基 1条	縄文土器、石器、瓦、須恵 器、近世陶磁器、古銭			
東上秋間笹田	生産遺跡	近世	水田 炭窯 道	1面 1基 1条	近世陶磁器、鉄・銅製品、 土師器、須恵器		水田は斜面地を利用しての 棚田	
東上秋間神水	生産遺跡	近世	水田 登窯 溝	1面 1基 7条	須恵器、近世陶磁器		明確な畦畔は未検出だが、 プラント・オパール分析結 果から判断	

I 発掘調査に至る経過

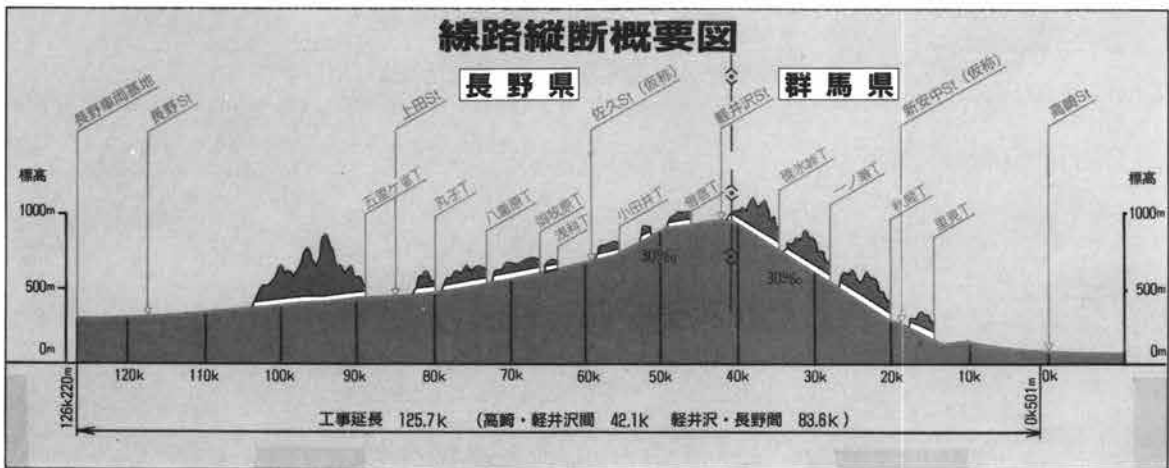
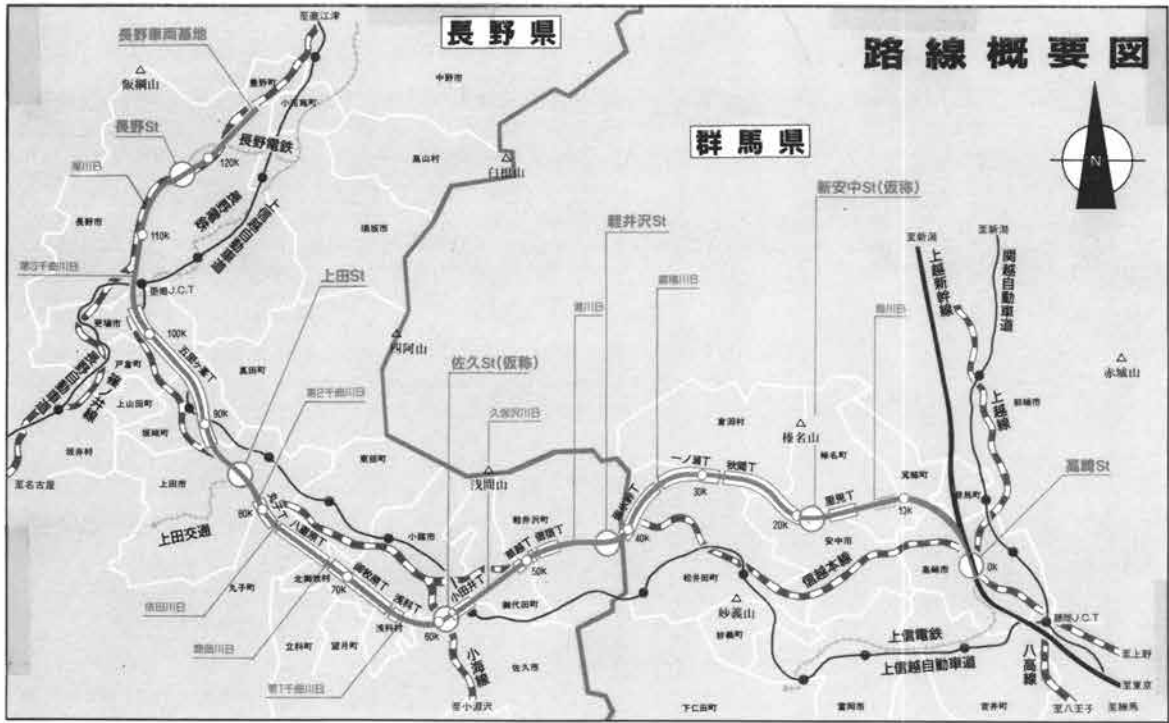


図1 北陸新幹線（高崎・長野間）路線概要図（上）
及び線路縦断概要図（下）

「北陸新幹線（高崎・長野間）パンフレット」（日本鉄道建設公団高崎建設局）より転載

1 安中市秋間地区埋蔵文化財発掘調査について

平成3年2月、高崎市行力春名社遺跡を皮切りに(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が開始され、ひきつづき平成3年4月から安中市秋間地区の調査が着手されることになった。

着手に際しては、平成2年4月に群馬県教育委員会が作成した、「北陸新幹線(群馬県内)地域埋蔵文化財一覧表(付地図)」により、安中市秋間地区及び東上秋間地区に該当する8カ所を対象とした(表1)。

当地域は、その環境を生かしての窯業生産が古代より盛んに行われた事で名高い地域であり、調査対象の8カ所周辺についても表面採集において多くの窯業関連遺物を得た。しかしながら、発掘調査の結果、遺物が皆無の調査対象箇所が2カ所(「25. 安中市秋間三角谷津」および「27. 安中市甲木ノ巢谷津II」)存在した。この2カ所については、遺跡としての扱いを取り下げた。(表2)。

番号	遺跡名称(仮称)所在地	ST No	文化財の時代 文化財の種類	遺跡の概要	備考
25	安中市秋間三角谷津	16km+520m ～16km+550m	古墳～平安 包蔵地・窯跡 か	◇窯の存在する可能性が強い。周辺で8C後半の須恵器窯2基を確認している(7C～8C後半)。	
26	安中市秋間甲木ノ巢谷津I	16km+800m ～16km+880m の南側	古墳～平安 包蔵地・窯跡 か	◇窯の存在する可能性が強い(8C～9C)。沢の北側で、窯を3基確認した。	
27	安中市秋間甲木ノ巢谷津II	16km+980m ～17km+20m	古墳～平安 包蔵地	◇土師器(9C)の遺物散布。◇上流には鉄滓が多量に散布。このほか、美濃皿(17C)を採集している。	
28	安中市秋間中島	17km+130m ～17km+170m	古墳～平安 包蔵地	◇8C～9Cの須恵器・土師器の散布がある。	
29	安中市東上秋間神水	18km+480m ～18km+520m	古墳～平安 包蔵地	◇土師器散布地。	
30	安中市東上秋間稲貝戸	18km+80m ～18km+120m	中世～近世 寺院跡	◇須恵器の散布がある。	
31	安中市東上秋間笹田	18km+240m ～18km+340m	縄文～平安 包蔵地	◇土師器散布地。	
32	安中市東上秋間神水	18km+480m ～18km+520m	古墳～平安 古墳・包蔵地	◇古墳。◇付近に土師器の散布がある。	

表1 北陸新幹線(安中市秋間地区)地域埋蔵文化財一覧表

(「北陸新幹線(群馬県内)地域埋蔵文化財一覧表」 県教育委員会作成 より抜粋および一部加筆・修正)

遺跡略号	遺跡名称	遺跡所在地	起点距離程	遺跡の主な内容
H S 310	秋間三角谷津(×)	安中市大字秋間字三角谷津	16,700m	なし
H S 320	秋間甲木ノ巢谷津I遺跡	安中市大字秋間字甲木ノ巢谷津	16,800m～16,880m	近世炭窯
H S 330	秋間甲木ノ巢谷津II(×)	安中市大字秋間字甲木ノ巢谷津	17,000m	なし
H S 340	秋間中島遺跡	安中市大字秋間字中島	17,130m～17,170m	平安時代水田
H S 350	東上秋間稲貝戸遺跡	安中市大字東上秋間字稲貝戸	18,080m～18,120m	時期不明土坑・ピット
H S 360	東上秋間笹田遺跡	安中市大字東上秋間字笹田	18,240m～18,340m	近世炭窯・道・水田・畠
H S 370	東上秋間神水遺跡	安中市大字東上秋間字神水	18,480m～18,520m	平安時代須恵窯

表2 北陸新幹線(安中市秋間地区)地域埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

2 遺跡名称及びその略号について

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘事業では調査に際し、遺跡名称及びその略号の付け方の統一を図った。

【遺跡名称の付け方】 遺跡名称については、原則では「市の場合は遺跡所在の町名と字名、町村の場合は遺跡所在の大字名と小字名をとって、遺跡名称とする」とした。なお、遺跡地内に字名が複数ある時は、任意に選び出し、遺跡名とした。例えば、行力春名社遺跡の場合、遺跡は高崎市行力町字春名社・春名社西・石田に所在が跨るため、字名の一つをとり、「行力春名社」とした。但し、これはあくまでも原則で、例外として、①既調査の遺跡が接近する場合（高崎市・融通寺遺跡など）、②字名が異なっても明らかに面的に同一性が認められる場合（箕郷町・下芝五反田Ⅰ～Ⅳ遺跡など）、③調査以前からその遺跡地の性格が判明している場合（高崎市・大八木屋敷遺跡など）についてはこれに従わず、その遺跡地に適切な名称をつけた。

【遺跡略号の付け方】 遺跡略号は、その採用の目的として、名称簡略化によって調査の能率化を図るとともに、同一事業における各遺跡の位置関係の理解を容易にする事があげられる。

遺跡略号については、原則では、「HS（HOKURIKU-SINKANSENの頭文字）と3桁の数字による表記」を採用した。3桁の数字についてはそれぞれ次のような意味をもたせた。

- 3桁目の数字…「遺跡」の所在市町村（0…高崎市 1…箕郷町 2…榛名町 3…安中市）
 2桁目の数字…「遺跡」の同一市町村内における建設工事高崎起点の距離程の短い順に1、2、3～とした。
 1桁目の数字…「遺跡」の調査範囲が調査着手以前と調査時において同一の場合は0、調査着手以前は1つの「遺跡」のものが、調査時において分割された場合は着手順に0、1、2～とした。

※なお、調査の都合上、上記の原則通りにならない例外もある。

例えば、東上秋間神水遺跡の遺跡略号は「HS370」となる。

内訳は HS→（北陸新幹線）

3→（安中市所在）

7→（「遺跡」として安中市では建設工事高崎起点で近い順で7番目）

0→（「遺跡」の調査範囲が調査着手以前と調査時において同一）である。



図2 北陸新幹線（安中・秋間地区）調査対象遺跡位置図

3 調査区画の設置

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘事業ではこれに関連する遺跡調査について調査区画を統一している。

区画設置においては「国土座標」を基本として「地区」（大区画）、「区」（中区画）、「グリッド」（小区画）に分け、最小5mの区画まで設置し、遺構・遺物の検出位置を明らかにしている。

なお、区画起点については、北陸新幹線建設工事の起点が高崎駅であることから、それに準拠する形で、高崎駅南東、「国土座標」での(X = +35,000.0M、Y = -73,000.0M)を起点とした。

「地区」は一辺1km四方の区画であり北陸新幹線路線部の調査対象地域に沿って25地区の設定をした(図3(上))。

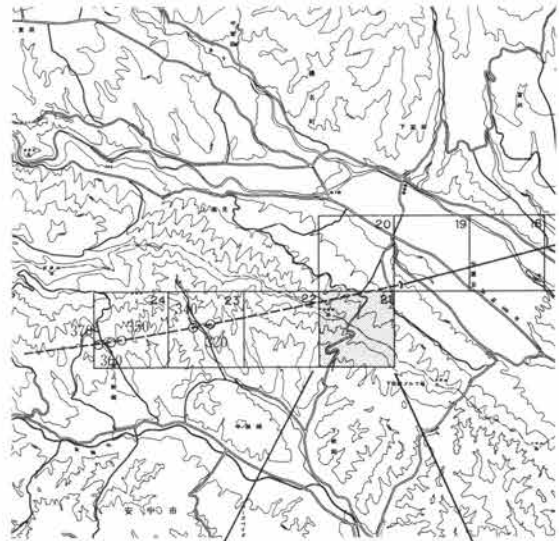
「区」は一辺100m四方の区画であり、「地区」内を100等分している(図3(中))。

「グリッド」は一辺5m四方の区画であり、「区」内を400等分している(図3(下))。

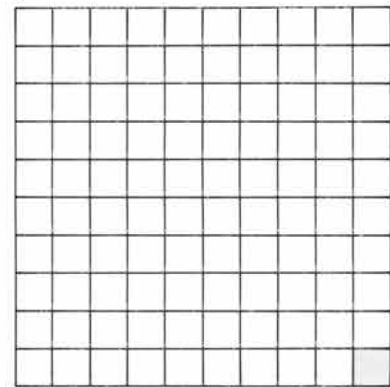
呼称については、「地区」「区」「グリッド」をそのまま用いて表し、南東隅区画名をもって、その区画の名称とした。

各区画の番号順は、「地区」では本事業全域の高崎から安中方面に向けて順次1～24(ただし、13地区南は13-1地区)まで(図3(上))、「区」では南東隅を起点に、東→西を優先し、南→北の順に1～100区まで(図3(中))、「グリッド」では南東隅を起点に、東→西の順にA～T、南→北の順に1～20とし、その交点によってA-1～T-20まで(図3(下))とした。

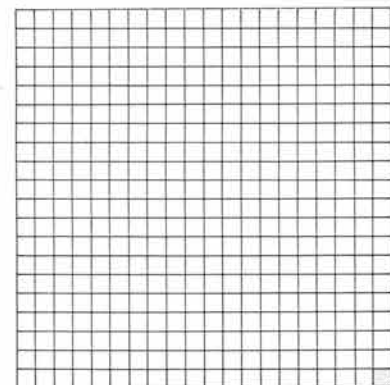
なお東上秋間遺跡群については、発掘調査時にはこの方法を用い、整理時にはこの方法を採用していない。これは、検出遺構及び出土遺物の量が少ないため、調査区画の呼称を用いずとも遺構・遺物の関係の把握に混乱をきたす恐れがないと判断したからである。



(上) 大区図：地区



(中) 中区図：区



(下) 小区図：グリッド

図3 調査区画設置図

II 東上秋間遺跡群をとりまく環境



南東の空から見た秋間丘陵



図4 秋間丘陵略図

1 立地と環境

安中市は、群馬県の南西部に位置している。東上秋間遺跡群はその安中市の北部に広がる、秋間丘陵内にある。この秋間丘陵は茶臼山や石尊山など、標高約500～600mの山々によって形成されている。

また、この丘陵は碓氷川の支流、九十九川に流れ注ぐ秋間川の左岸に展開しているが、この秋間川に流れ注ぐ沢の周辺には豊富な粘土層が堆積しており、古代から窯業地域としての性格を帯びていた。

2 周辺遺跡

当該地域には縄文時代から歴史時代に至るまでの遺跡の分布がある。以下、時代順に概略を記す。なお、以下に示す「秋間地域」とは便宜上、図5の範囲をさすものとする。また、図5A～Eはそれぞれ、中秋間甲木ノ巣谷津I遺跡(A)、中秋間中島遺跡(B)、東上秋間稲貝戸遺跡(C)、東上秋間笹田遺跡(D)、東上秋間神水遺跡(E)を示している。

《縄文時代》 秋間地域では、前期の遺跡は下受地・十二遺跡(図5-2)があり、その他、遺物分布は下秋間覚院坊(図5-13)と下秋間七曲り・台(図5-15)でみられる。中期の遺跡は下受地・十二遺跡と北滝ノ入遺跡(図5-1)と竹下遺跡(図5-9)があり、その他、遺物分布は下秋間覚院坊でみられる。安中市域では、草創期は未確認である。早期は押型文・捺糸文系土器が僅かに出土している。前期・中期は市域全体で遺跡数・遺物量が多い。後期・晩期は遺跡数・遺物量は、それ以前に比して減少している。

《弥生時代》 秋間地域では、弥生時代の遺跡・遺物の確認は現在のところない。安中市域では、前期から中期の遺跡が僅かに確認されている。後期の樽式の遺跡・遺物は市域のほぼ全域で分布している。

《古墳時代》 秋間地域では、古墳分布は昭和11年の「上毛古墳総覧」によって「秋間古墳群」として、20基ほどの後期古墳が確認されている。一部群馬大学によって調査がなされている。特徴的な古墳としては、径15mの円墳で自然石・削石の互目積、両袖型横穴式石室をもつ磯貝塚古墳(図5-28)、径8mの円墳で凝灰岩載石切組積、両袖型横穴式石室をもつ二軒茶屋古墳(図5-27)、径12mの円墳で安山岩及び凝灰岩載石切組積、両袖型横穴式石室をもつ万福原古墳(図5-60)が挙げられる。集落遺跡は北滝ノ入遺跡、下受地・十二遺跡、竹下遺跡、二反田遺跡(図5-24)がある。遺物分布は中秋間三角谷津(図5-8)、下秋間覚院坊、八重巻窯跡(図5-18・20)がある。

安中市域では、未調査を含めて200基以上の古墳が存在しており、そのほとんどは6世紀から7世紀にかけての後期古墳である。集落遺跡は確認されているが、一部前期があるが、ほとんどは後期である。

《奈良・平安時代》 秋間地域では、この時代の遺跡が集中している。特に前述した通り、地形的、地質的な好条件から8世紀を最盛期とした群馬県内屈指の窯業地帯として発達した。苧稻遺跡(図5-5)、八重巻窯跡、二反田遺跡では窯跡の調査がなされている。その他、窯跡及び窯状凹地が確認された箇所は数多い。安中市域では8世紀から10世紀にかけての集落遺跡が数多い。

《中世以降》 秋間地域では城館址は9カ所確認されている。室町時代のものは8カ所、江戸時代が1カ所である。いずれも発掘調査はされていない。安中市域での調査遺跡は古城遺跡、野殿西屋敷などがある。

参考文献 安中市教育委員会 1992 「安中市の遺跡－市内遺跡詳細分布調査報告書－」
田島桂男 1984 「日本の古代遺跡 1 群馬県西部」 保育社

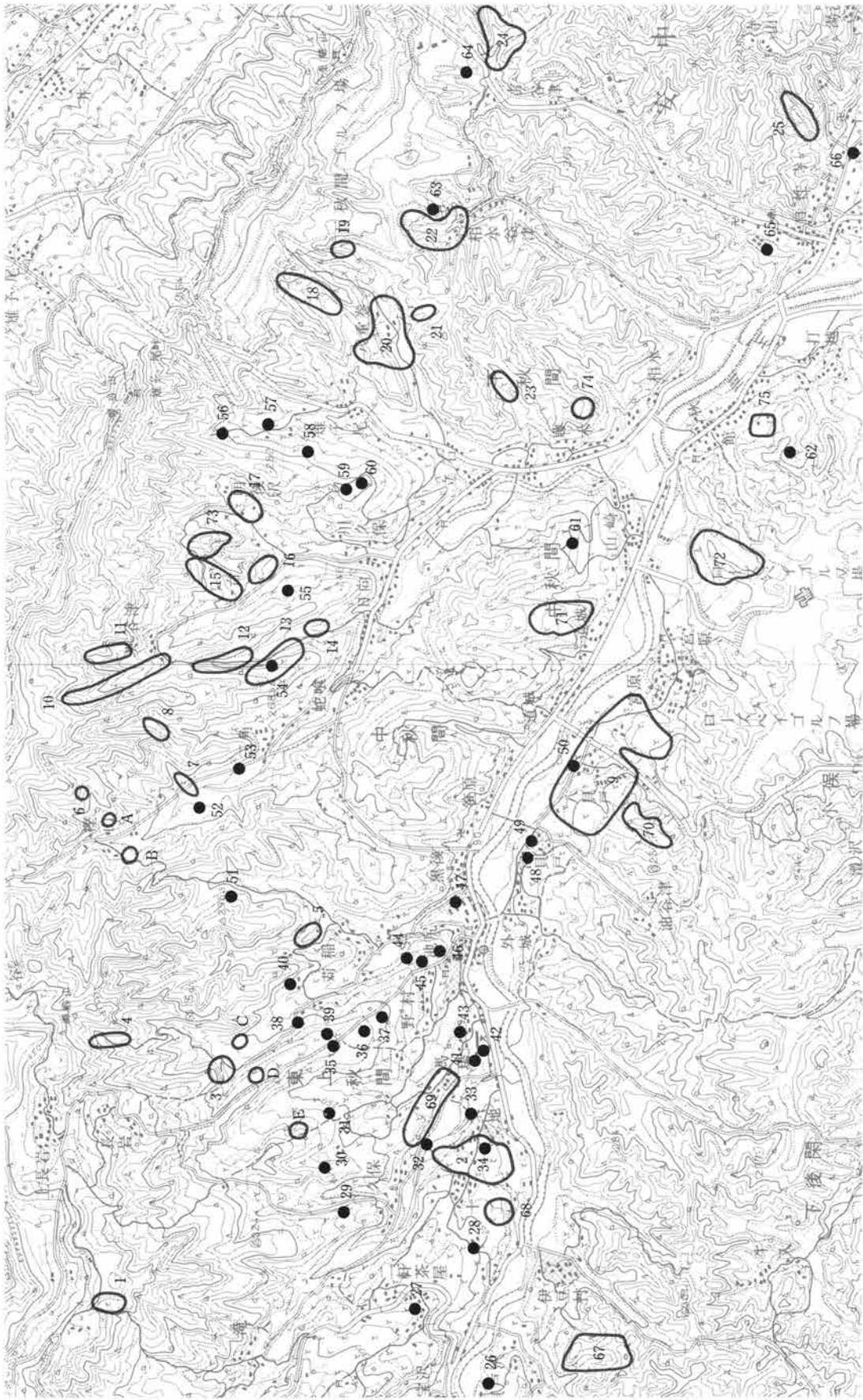


图 5 秋間地区遺跡分布图

No	遺跡名	大字名	小字名	時代	備考	市台帳No.
1	北滝ノ入遺跡	東上秋間	長岩	縄文中期、古墳、平安、江戸	市台帳No.27	1 4 0
2	下受地・十二遺跡	東上秋間	鍛冶屋、下受地、十二	縄文前期・中期、古墳、奈良、平安、室町、江戸	鉄滓、陶器、灰釉 (昭和61年度調査)	8 9
3		東上秋間	稲貝戸	江戸	寺院	5 5 0
4		東上秋間	岩戸	奈良、平安	窯跡 2 基	1 3 5
5	苧稲遺跡	東上秋間	宗徳山		瓦、窯凹 6 基 市台帳No.29	1 2 9
6		中秋間	乙木ノ巢谷津	奈良	窯 1 基	1 9 6
7		中秋間	戸上	奈良、江戸	窯 3 基	1 8 3
8		中秋間	三角谷津	古墳、奈良、平安	窯 2 基	1 8 6
9	竹下遺跡	中秋間	反原、竹下、中里原、八貝戸、中里、塚本	縄文中期、古墳、奈良、平安、室町、江戸	瓦、鉄滓、灰釉、埴輪 市台帳No.28	1 5 0
10		下秋間	茨ヶ谷津	奈良	窯 4 基	2 4 3
11		下秋間	茨ヶ谷津	奈良、平安	窯 2 基	2 4 4
12		下秋間	熊野谷津	奈良、平安	窯 3 基	2 3 1
13		下秋間	覚院坊	縄文前期・中期、古墳、奈良、平安、室町、江戸	窯体 4 基	2 3 4
14		下秋間	覚院坊	奈良、平安	窯 1 基	2 3 2
15		下秋間	七曲り、台	縄文前期、奈良、平安	窯 4 基	2 4 1
16		下秋間	覚院坊	奈良、平安	窯 3 基	2 3 5
17		下秋間	明後沢	奈良、平安	瓦、窯 4 基	2 4 0
18	八重巻窯跡	下秋間	八重巻	古墳、奈良、平安	瓦、窯 2 基	2 5 2
19		下秋間	東谷津		窯 1 基	2 5 5
20	八重巻窯跡	下秋間	八重巻	奈良、平安	瓦、窯 6 基	2 5 3
21		下秋間	道ノ入	奈良	窯 4 基、瓦	2 5 7
22		下秋間	一台堂、広田	奈良、平安	瓦、窯 1 基	2 6 4
23		下秋間	道ノ入	奈良	窯 1 基	2 5 8
24	二反田遺跡	下秋間	二反田	古墳、奈良、平安	瓦、窯 8 基 (平成 2 年度調査)	2 6 6
25		下秋間	薬師入	奈良、平安	窯 1 基	2 6 9

表 3 周辺遺跡・遺物散布地一覧表

No.	古墳名	大字名	小字名	墳形	備 考	市台帳No.
26	総覧秋間1号墳 (ほうり塚)	西上秋間	田入道	前方後 円墳		1020
27	総覧秋間3号墳 (二軒茶屋古墳)	西上秋間	上原	円墳	市台帳No.25、稲荷祠あり、直刀、壺、 『安中市誌』	1024
28	総覧秋間2号墳 (磯貝塚古墳)	東上秋間	日向	円墳	市台帳No.24、石郭開口	1025
29		東上秋間	上久保	円墳	市台帳No.23	1038
30		東上秋間	北原			1039
31		東上秋間	北川			1040
32		東上秋間	上馬場			1037
33		東上秋間	鍛冶屋			1026
34		東上秋間	下受地			1027
35		東上秋間	野村			1033
36	総覧秋間8号墳	東上秋間	野村	円墳	石郭開口	1031
37	総覧秋間9号墳	東上秋間	野村	円墳	市台帳No.30、馬舟さま、『安中市誌』、 石かん露出	1032
38		東上秋間	上苧稲		上苧稲遺跡、市台帳No.32、『安中市誌』	1041
39		東上秋間	上苧稲			1042
40		東上秋間	東上苧稲		市台帳No.21	1044
41		東上秋間	下馬場			1034
42	総覧秋間6号墳	東上秋間	下馬場	円墳	石室半壊	1035
43	総覧秋間15号墳	東上秋間	下馬場	円墳	市台帳No.22、石郭開口、石室半壊、 『安中市誌』	1036
44		東上秋間	池尻			1030
45		東上秋間	池尻			1029
46	総覧秋間10号墳	東上秋間	池尻	円墳	半分削り	1028
47	総覧秋間16号墳	中秋間	上黒後	円墳		1048
48		中秋間	宮貝戸			1045
49		中秋間	宮貝戸			1046
50	総覧秋間11号墳	中秋間	塚本	円墳		1047
51	総覧秋間7号墳	東上秋間	崇徳山	円墳	市台帳No.26、石郭開口、『安中市誌』	1043
52		中秋間	中島			1050

表4 周辺古墳一覧表 (1)

No.	古墳名	大字名	小字名	墳形	備 考	市台帳No.
53		中秋間	戸上			
54	総覧秋間14号墳 (原の塚穴)	下秋間	熊野谷津	円墳	石郭開口、石祠あり	
55		下秋間	覚院防			
56		下秋間	戸谷			
57		下秋間	戸谷			
58		下秋間	万福			
59		下秋間	万福		市台帳No20	
60	総覧秋間12号墳 (万福原古墳)	下秋間	万福	円墳	市台帳No20、石郭開口、『安中市誌』	
61		下秋間	山崎東			
62		下秋間	二本松			
63		下秋間	一台堂		市台帳No33、安中市文化財整理事務所所蔵、『安中市誌』	
64		下秋間	広町			
65		下秋間	吉ヶ谷津			
66	総覧秋間13号墳	下秋間	東平	円墳	直刀、土器	

表5 周辺古墳一覧表 (2)

No.	城館名	大字名	小字名	時代	備 考	市台帳No.
67	小屋城	東上秋間	伊豆村谷津、高木	室町	『群馬県古城墓址の研究』	
68		東上秋間	上受地、日向	江戸	陣屋	
69	内出城	東上秋間	上馬場、下馬場	室町	市台帳No36、『安中市誌』 『群馬県古城墓址の研究』	
70	八貝戸砦	中秋間	乙八貝戸谷津、中里原	室町	市台帳No38、『安中市誌』 『群馬県古城墓址の研究』	
71	礼応寺 (二城)	中秋間	二城	室町	市台帳No37、『安中市誌』 『群馬県古城墓址の研究』	
72	蔵人城	中秋間	薬師谷津、鍛冶谷津	室町	『安中市誌』 『群馬県古城墓址の研究』	
73	茗荷沢の砦	下秋間	明後沢	室町	『安中市誌』 『群馬県古城墓址の研究』	
74	秋間館	下秋間	館			
75	辻城 (雁又城)	下秋間	道ノ入	室町	市台帳No40、『安中市誌』 『群馬県古城墓址の研究』	

表6 周辺城館址

III 中秋間甲木ノ巢谷津 I 遺跡

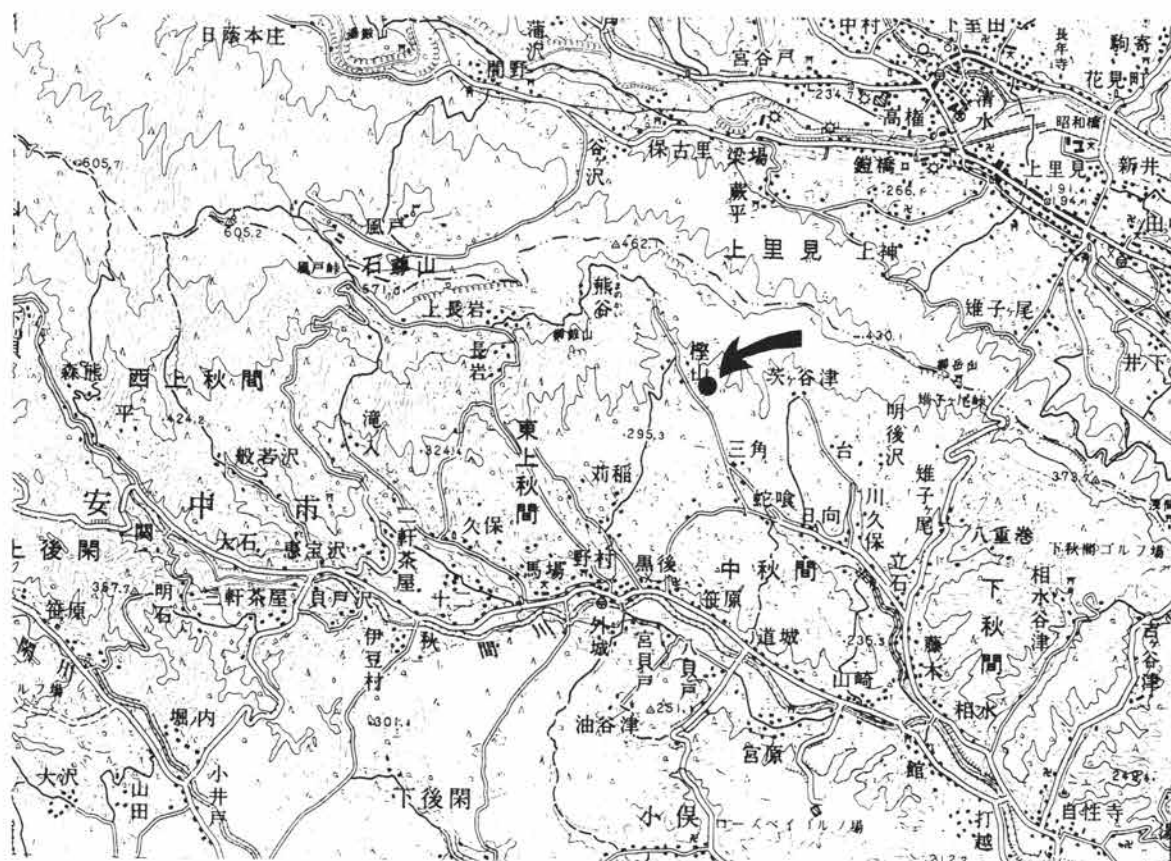


図6 中秋間甲木ノ巢谷津 I 遺跡位置図

1 立地と環境

本遺跡は、安中市街地の北方、安中市と榛名町との分水嶺である石尊山（標高571.6m）の南東方向にあり、この分水嶺をなす山稜から南東方向に発達する小支谷のひとつに所在する。石尊山の東に連なる榎山（標高462.1m）に源を発する日向川（秋間川の支流）の上流部左岸の木ノ巢谷津と呼ばれる谷に所在する。

この石尊山南東麓一帯の小規模な開析谷の発達した秋間川流域の丘陵地帯は、秋間古窯跡群として、奈良・平安時代の須恵器及び瓦生産を中心とする窯業生産遺跡の存在が知られている。本遺跡の所在地及び隣接する谷津でも、窯業生産遺跡の存在は分布調査により知られており、本遺跡では、谷津（甲木ノ巢谷津 I）の入り口付近に須恵器の小片が分布し、窯跡と思われる痕跡も数箇所確認した。

2 調査経過

平成3年

- 4月上旬 発掘調査準備
- 中旬 調査区内安全対策整備
- 下旬 表土掘削
- 5月上旬 表土掘削・遺構精査・地形測量
- 中旬 窯跡調査・遺構精査
- 下旬 窯跡調査・トレンチ調査・調査区空撮・埋め戻し



発掘調査風景（北から）

3 基本層序

I 暗褐色土

（As-A・小礫を含む）

II As-A層（浅間A軽石）

III 茶褐色土

（砂礫を含む・粘質土）

IV 黄褐色土

（黄色シルトが主体・小礫を含む）

V 青灰色土

（砂礫を含む・粘質土）

VI 暗青灰色砂礫

（径0.5～5.0cmの礫が主体）

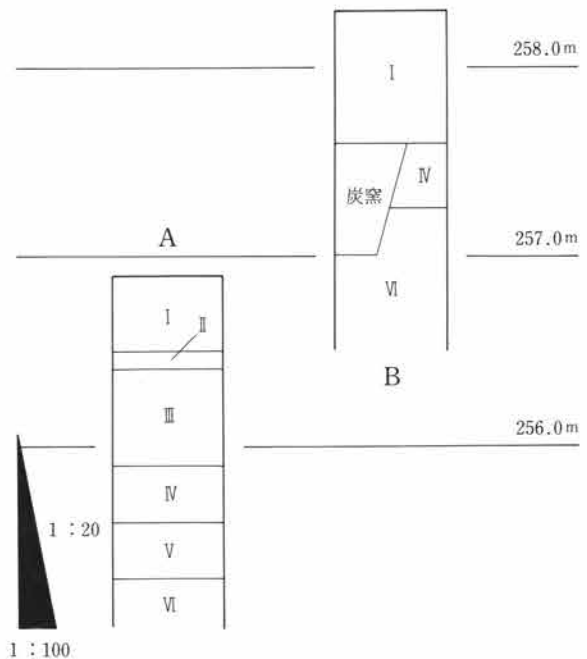


図7 基本層序図

4 調査概要

調査区域は細長く入り込んだ谷地形の最奥部分付近であり、ほぼ南に開口する谷津の西斜面に窯が1基確認された。また、谷津地形に対してはトレンチ調査を実施した。その結果、土石流によると見られる埋没が2～3mの深さで確認され、その最上層にAs-A層の堆積が確認された。

遺物は調査区域において出土していない。

なお、調査区外ではあるが、本調査区に隣接する東斜面裾部で2基の炭焼窯（石窯）が確認されている。また、谷津の東周辺において須恵器片数点（未図化）を表採した。

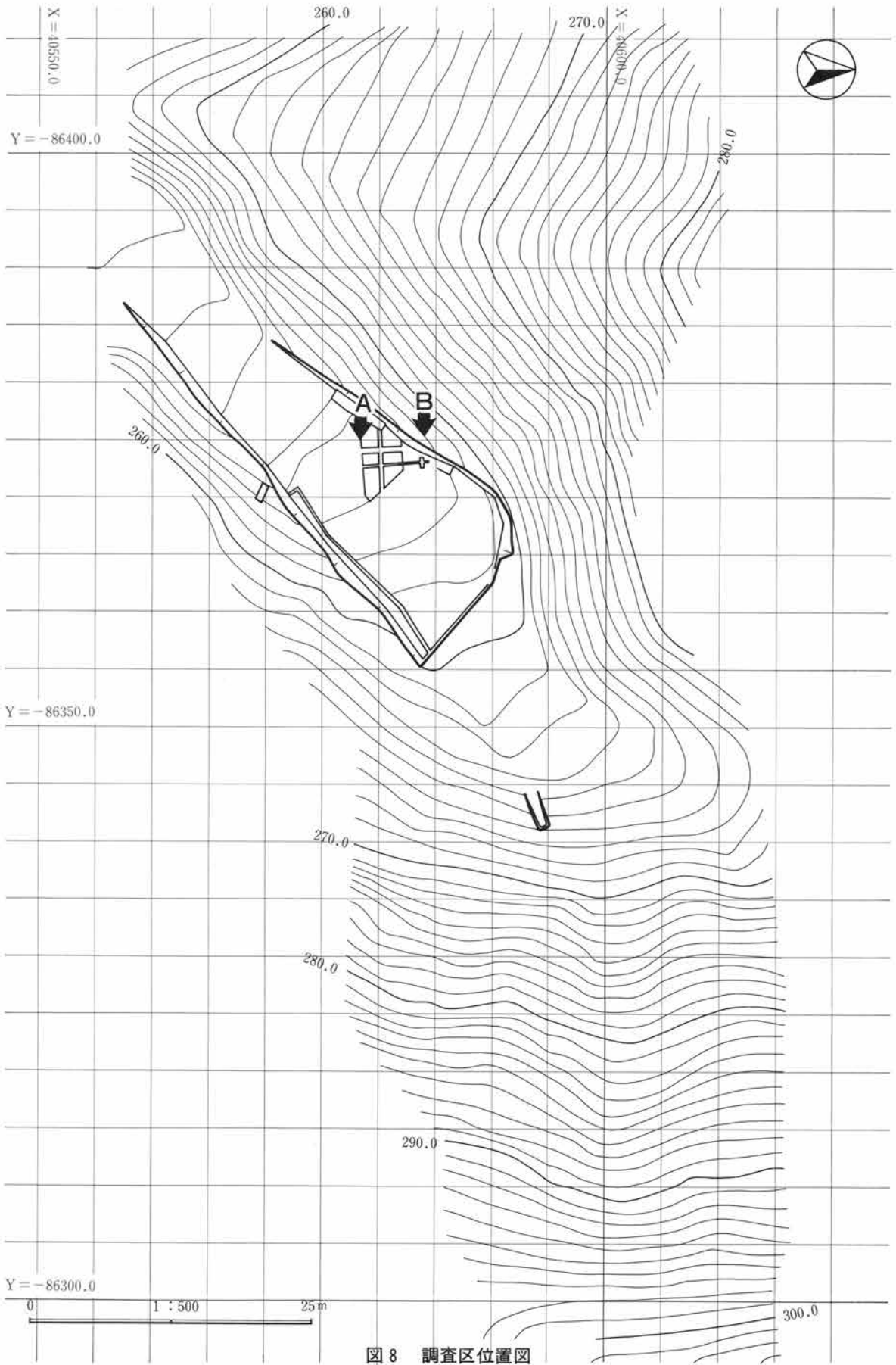


図 8 調査区位置図

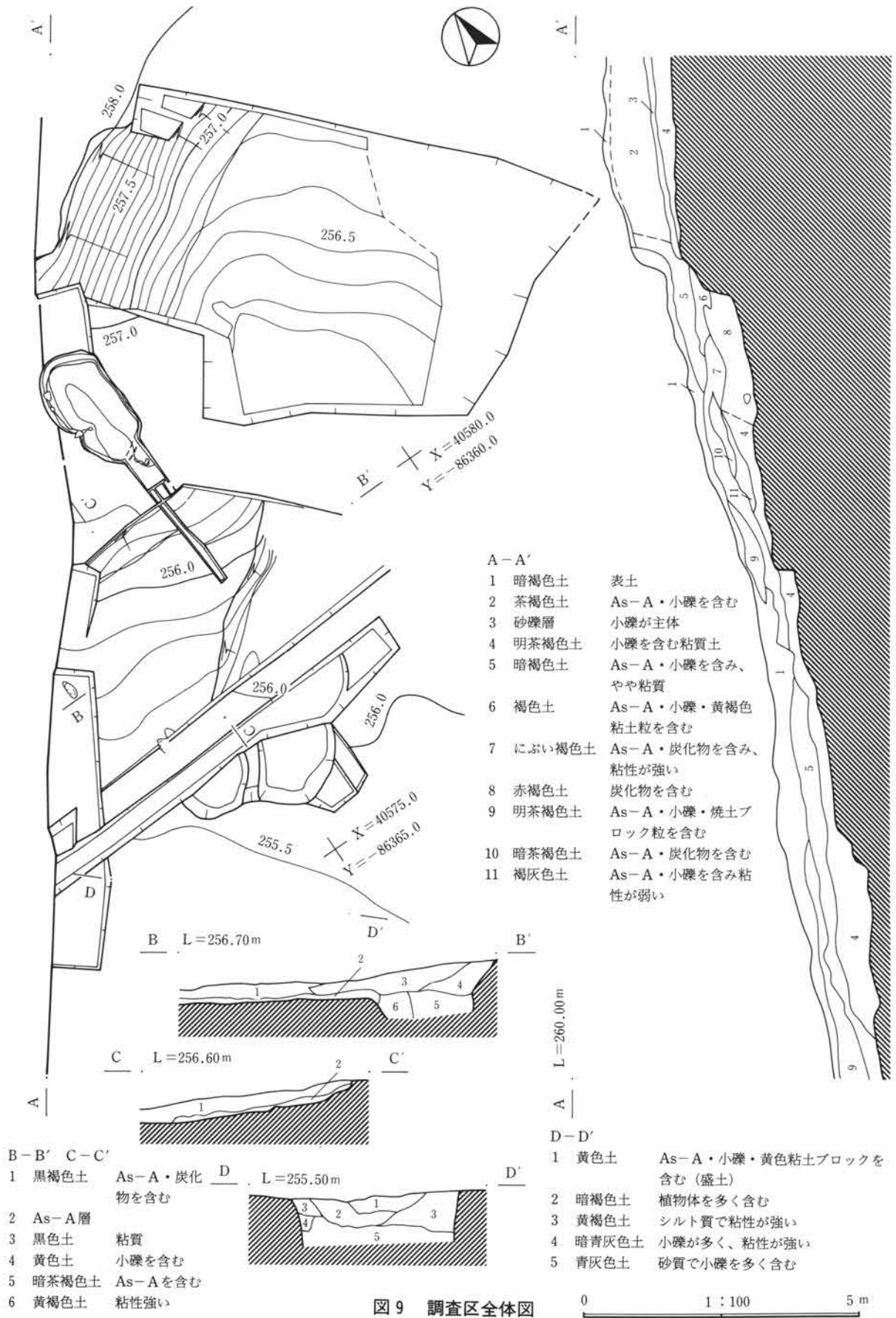


図9 調査区全体図

5 検出遺構

(1) 炭焼窯 (図11)

調査区の西斜面で検出された。

土窯であり、炭化室の平面形状は南北方向に長軸をとる楕円の平面形を呈している。窯体の上部半分は削平されている。

確認面での規模は全長 2.28m、最大幅 1.28m、焚口幅 0.40m(推定)、窯体傾斜 前斜1°、煙道角度 残存不良により不明、である。炭化室内の煙道は未検出である。焚口前庭は遺構としては未検出である(計測箇所は名称は図10参照)。

遺物は、炭化室内では出土していない。焚口部のすぐ南(焚口前庭部に相当)では径2.0mの範囲で炭化物の分布が見られた。

遺構の帰属時期は出土遺物が皆無であり、遺物からの判断はできないものの、As-A降下以前である事が層位的に確認できることから、近世前半～中頃と考えられる。

なお、谷津地形に対してのトレンチ調査によって、土石流によると見られる埋没が2.0～3.0mの深さで見られ、その最上層にAs-Aが確認できたことから、炭焼窯が構築されたころは、構築面と谷津の中央部の沢との比高差は1.0m程度であったと考えられる。

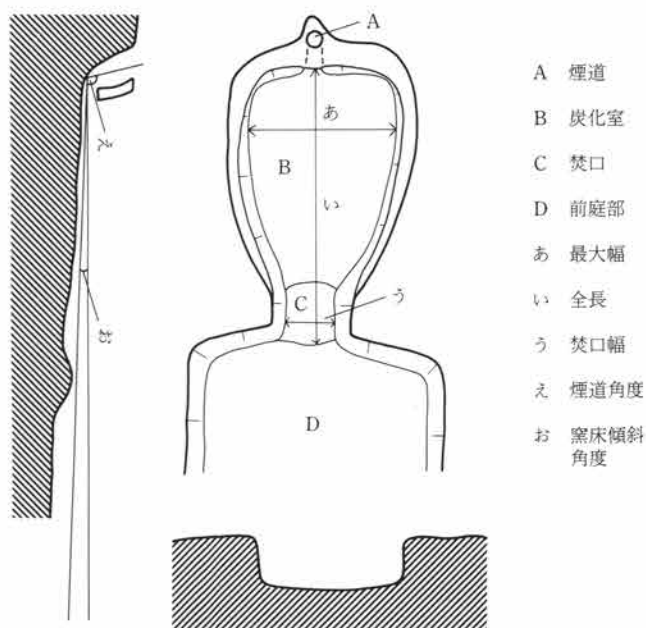


図10 炭焼窯計測ポイント図

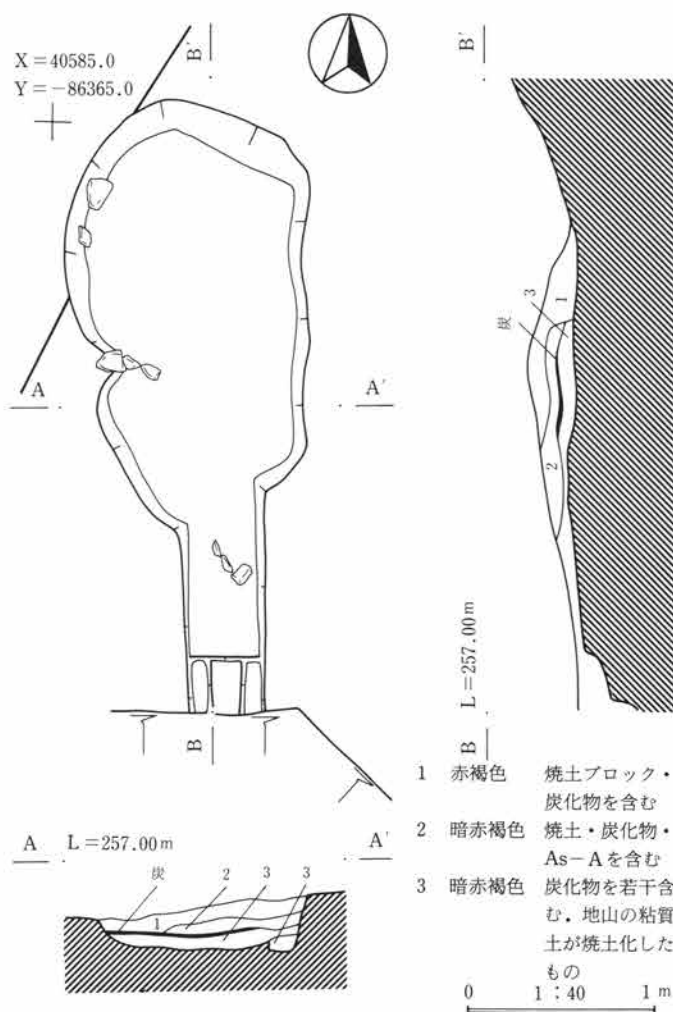


図11 炭焼窯平・断面図

IV 中秋間中島遺跡

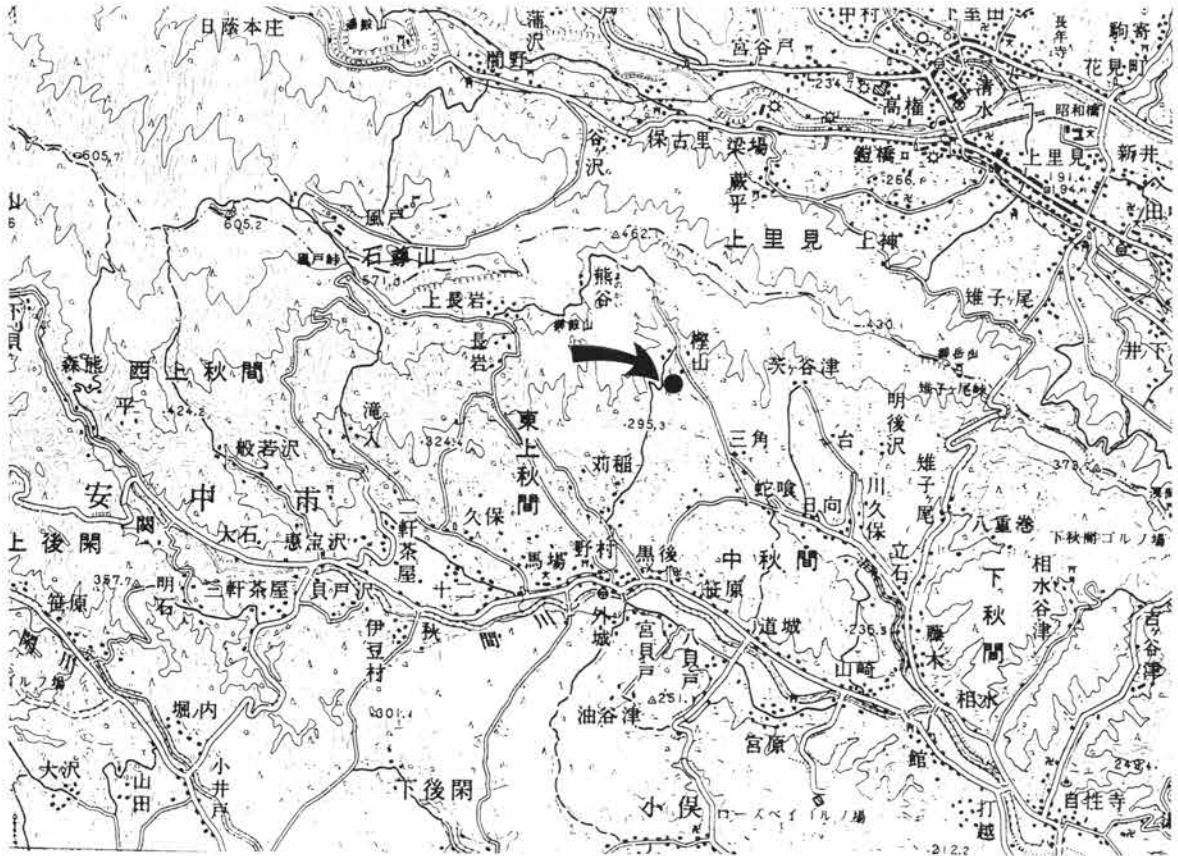


図12 中秋間中島遺跡位置図

1 立地と環境

本遺跡は、安中市街地の北方、安中市と榛名町との分水嶺である石尊山（標高571.6m）の南東方向にあり、この分水嶺をなす山稜から南東方向に発達する小支谷のひとつに所在する。一級河川日向川と市道468号線に挟まれた区間であり、現状は桑畑と水田である。

2 調査経過

平成3年

11月中旬 調査準備・表土掘削

下旬 As-B下遺構面（水田面？）検出

12月上旬 As-B下遺構面実測・写真撮影

中旬 埋め戻し



発掘調査風景（西から）

3 基本層序

I 暗褐色土（現耕作土）

II 酸化鉄分凝集層

III 暗褐色土及び黒褐色土の互層

（ともにAs-Bを含む・盛土層）

IV As-Kk層（浅間-粕川テフラ）

V As-B層（浅間Bテフラ）

VI 黒色土（粘性強い）

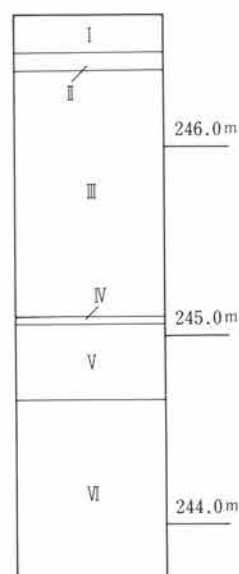


図13 基本層序図

4 調査概要

調査区域内は現状では水田と桑畑となっており、まず遺構確認のために、幅 2.5m、長さ 20.0mのトレンチを2カ所設定して、遺構確認を行った。その結果、現表土面下、0.5~1.4mにAs-B層を検出した。この層は厚さ20~40cmの堆積があり、最上層にはAs-Kk層の堆積も確認できた。

このAs-B層直下からは、黒色粘質土が検出された。調査範囲内においては、この黒色粘質土面には畦畔やそれらしき痕跡は検出されなかった。しかし、この土壌のプラント・オパール分析結果から、水田土壌の可能性が高いとの指摘を受けている。

遺跡の立地環境や現在の土地利用の状況、さらにプラント・オパール分析結果から、As-B直下黒色土を水田土壌と考える。

なお、出土遺物は、盛土層（基本土層 III層）中より須恵器（坏・甕）片15点（未図化）が出土している。As-B直下黒色土面上からは皆無である。

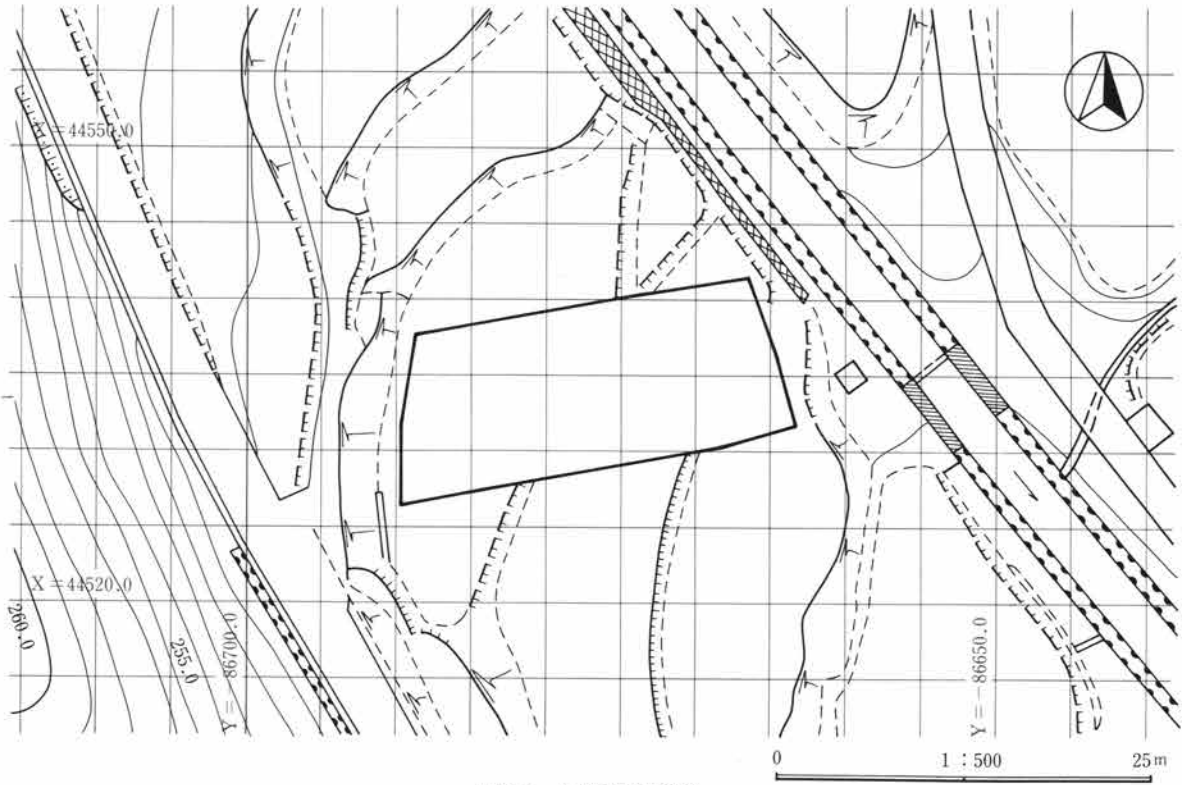


图14 調査区位置図

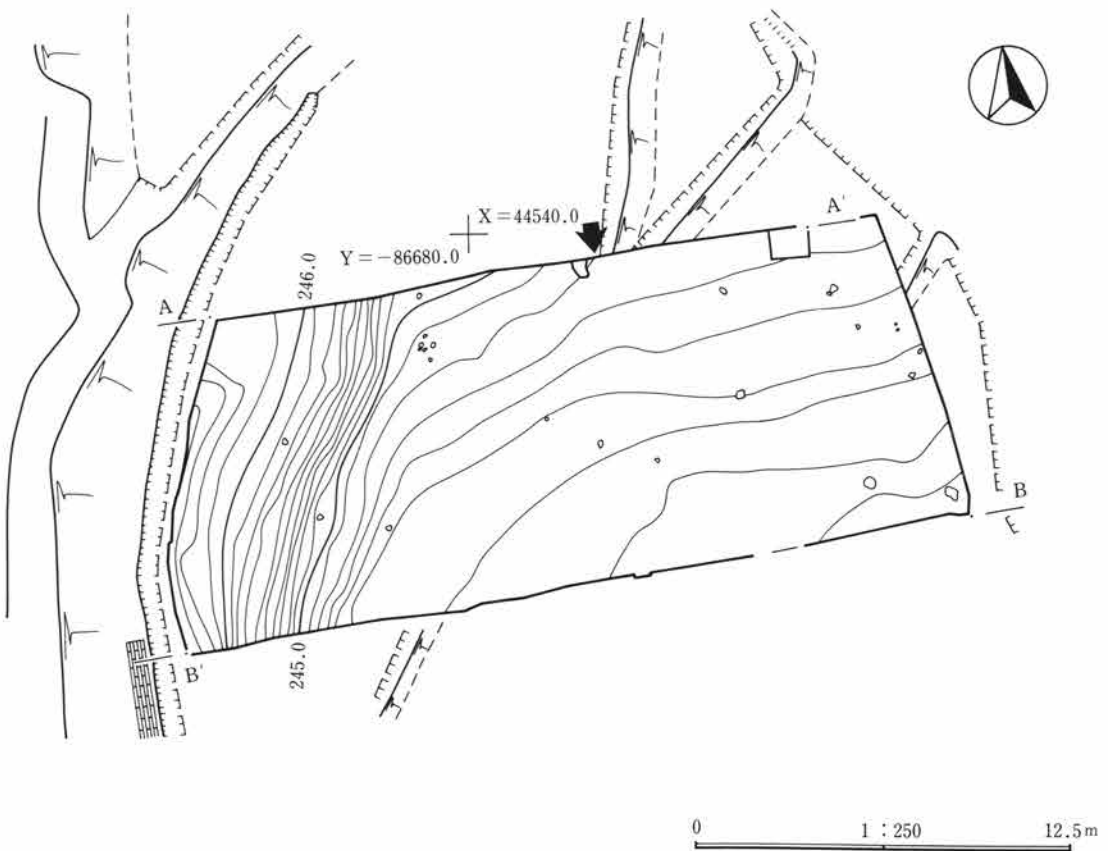
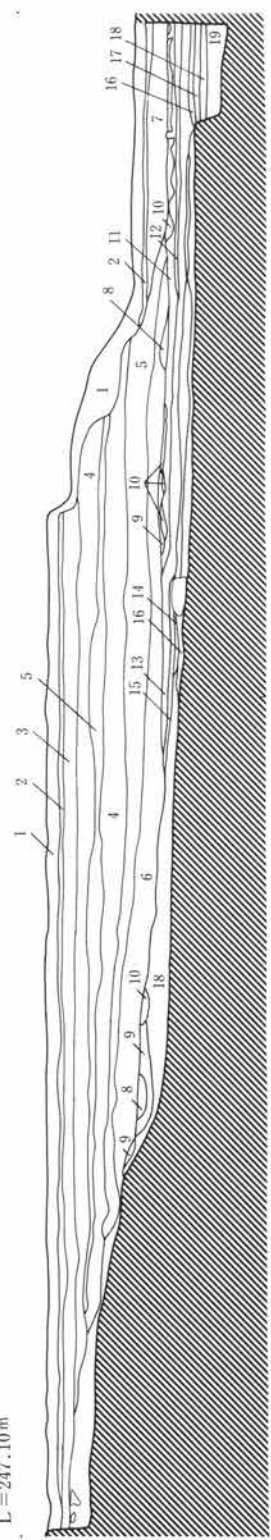


图15 調査区全体図

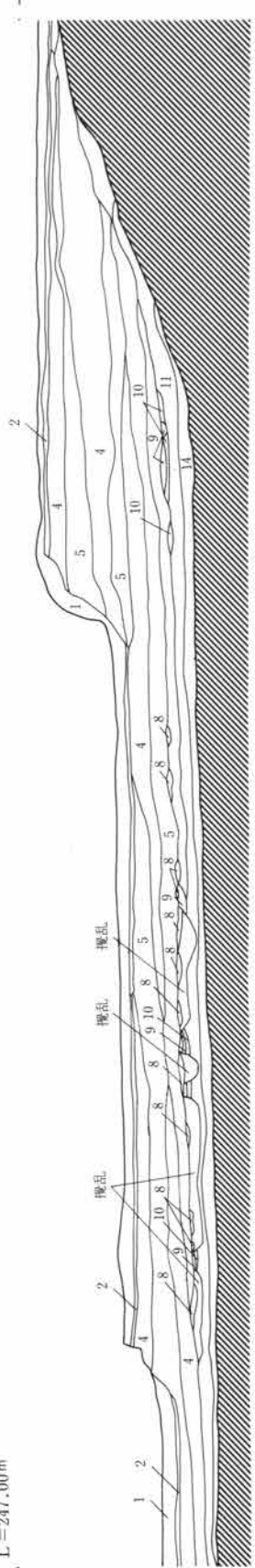
A'

A L = 247.10 m



B'

B L = 247.00 m



- | | |
|---------|----------|
| 1 暗褐色土 | 11 暗灰色軽石 |
| 2 茶褐色土 | 12 灰白色軽石 |
| 3 茶褐色土 | 13 明褐色軽石 |
| 4 黒褐色土 | 14 黄褐色軽石 |
| 5 暗褐色土 | 15 暗灰色軽石 |
| 6 黒色土 | 16 赤褐色軽石 |
| 7 黒褐色土 | 17 灰色軽石 |
| 8 黒色土 | 18 暗灰色粘土 |
| 9 灰色土 | 19 茶褐色土 |
| 10 暗褐色灰 | |
-
- | | |
|-------------------------|------------------|
| 現水田耕土 | しまりあり |
| 酸化鉄分層 | しまり強い |
| As-Bを含み、しまりが強く、粘性がある | 非常に薄い層で部分的に認められる |
| As-Bを含み、しまりが強く、粘性がある | しまり強い |
| As-Bを含み、しまり・粘性が強い | しまり強い |
| As-Bを多量に含み、しまりが強く、粘性が弱い | しまり強い |
| As-Bを多量に含み、しまりが強く、粘性がある | しまりあり |
| As-Bを含み、しまりが強く、粘性がある | しまり・粘性が強い |
| As-Bと灰色土の混合土、しまりあり | しまり・粘性が強く、小礫を含む |
| 灰層 | |

図16 調査区断面図

5 自然科学分析

古環境研究所

(I) 地質調査およびテフラ検出分析

1. 分析の目的

中秋間中島遺跡の発掘調査では、土壌の間にテフラの堆積が認められた。そこで、野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行い、示標テフラとの同定を行って、遺跡の土層断面中に時間軸を設定することを試みる。調査の対象としては、南壁と北壁の2地点を設定した。

2. テフラ層序

(1) 南壁

地質層序を、柱状図にして図17に示す。本地点では、合わせて3層準にテフラが認められた。最下位のテフラは、多くのユニットから成る降下テフラ層である。

このテフラは、下位より、青灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、粗粒スコリア、褐色スコリア層（層厚10cm）、白色降下軽石層（層厚11cm）、灰色成層粗粒火山灰層（層厚7cm）、橙色細粒火山灰層（層厚0.6cm）、桃色細粒火山灰層（層厚5cm）から構成されている。スコリアの最大径は、28mmに達する。このテフラは、その層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に同定される。

中位のテフラは、層厚2cmの青灰色細粒火山灰層である。下位のAs-Bとの間に土壌は認められないものの、最近のテフラ層序学的成果から、本テフラはAs-Bとは異なる別の浅間火山の噴火に由来するテフラであることがわかる。このテフラは、層相から浅間-粕川テフラ（As-Kk、早田、1991）に同定される。As-Kkの噴出年代についてはまだ明らかにされていないものの、As-Bにごく近い層位にあることから、その噴出年代は1108（天仁元）年にごく近い年代と思われる。

上位のテフラは、層厚15cmの白色軽石層である。含まれる軽石の最大径は23mm、石質岩片の最大径は3mmである。この軽石層は、その層相から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、新井、1979）に同定される。

(2) 北壁

本地点の地質層序を、柱状図にして図18に示す。ここでは、As-Bの下位に白色軽石の包含層が認められた。この軽石の起源を明らかにするために、テフラ検出分析を行った。

3. テフラ検出分析

(1) 分析方法

分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により、泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

分析結果を、表7に示す。試料には、最大径12.1mmの白色の軽石が認められる。軽石の発泡はよい。これらの特徴などから、この軽石は4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、新井、1979、石川ほか、1979)に由来すると考えられる。

4. 小結

中秋間中島遺跡において、野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、4層のテフラが検出された。検出されたテフラは、下位より浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)、浅間-粕川テフラ(As-Kk、噴出年代不明)、浅間A軽石(As-A、1783年)である。

文献

新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、No157、p.41-52.

石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一(1979) 火山堆積物と遺跡I。考古学ジャーナル、No157、p.3-40.

早田 勉(1991) 浅間火山の生い立ち。佐久考古通信、No53、p.2-7.

試料番号	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径(mm)
3	++	白	12.1

++++：とくに多い、+++：多い、++：中程度

+：少ない、-：認められない。

表7 中秋間中島遺跡北壁のテフラ検出分析結果

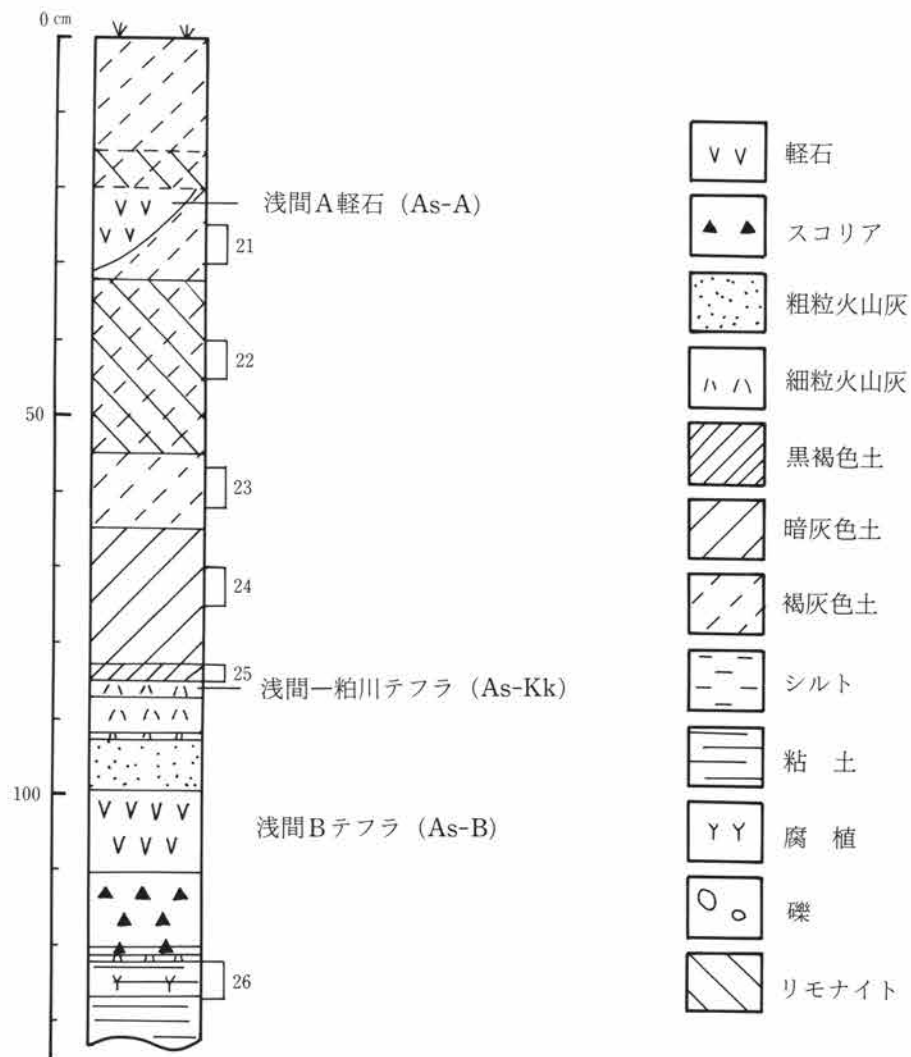


図17 中秋間中島遺跡南壁の地質柱状図

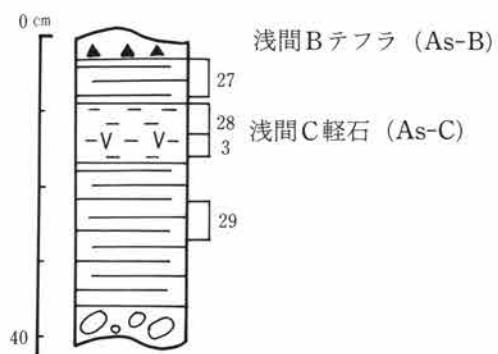


図18 中秋間中島遺跡北壁の地質柱状図

(II) プラント・オパール分析

1. 試料および方法

本遺跡では、南壁地点と北壁地点から、No21～No29の9試料が採取された。採取層準の詳細についてはテフラ分析の項を参照されたい。

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析方法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μ m、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

2. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表8、表9および図19、図20に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ属（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

3. 考察

(1) 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

南壁地点では、試料No21～26について分析を行った。その結果、No25以外の各試料からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は、No21（As-A層直下）とNo23で10,000個/g以上と非常に高い値であり、No22、No24、No26（As-B層直下）でもおよそ5,000個/g以上と高い値である。したがって、

これらの層準で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

No21 (As-A層直下) ではキビ族が検出された。同族にはヒエやアワ、キビなどが含まれるが、現地点ではプラント・オパールの形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っていない(杉山ほか、1988)。また、密度も2,000個/gと低い値であることから、ここでヒエやアワなどが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

北壁地点では、試料No27~29について分析を行った。その結果、No27とNo28からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、No28 (As-C混層) では密度が4,700個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。また、No27では密度が3,400個/gとやや低い値であるが、直上をAs-B層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、これらの層準で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

(2) 古環境の推定

タケ亜科(ネザサ節)やウシクサ族(ススキ属など)は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシ属は比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

As-B直下層 (No26) およびAs-Kk直下層 (No25) では、おおむねヨシ属が卓越しており、タケ亜科やウシクサ族は比較的少量である(表9)。このことから、これらの層準の堆積当時はヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったものと推定される。

4. まとめ

以上のことから、本遺跡ではAs-B直下層の時期には稲作が行われていたものと考えられる。その後、テフラ層の堆積などによって稲作は一時中断されるが、比較的早い時期に再開され、As-A直下層の時期まで継続的に行われたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志、1987、川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山-古環境編一 川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298。
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志、1988、機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追究のための基礎資料として-、考古学と自然科学、20:81-92。
 藤原宏志、1976、プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9:15-29。
 藤原宏志、1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O.sativa L.)生産総量の推定-、考古学と自然科学、12:29-41。
 藤原宏志・杉山真二、1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-、考古学と自然科学、17:73-85。

分類群	(単位:×100個/g)								
	21	22	23	24	25	26	27	28	29
イネ	160	86	112	48		49	34	47	
ヨシ属				9	98	219	17	15	
ウシクサ族(ススキ属など)	90	143	43	48	118	159	120	31	7
キビ族(ヒエ属など)	20								
タケ亜科	120	67	26	38	9	49	51	47	31

表8 中秋間中島遺跡におけるプラント・オパール分析結果

(単位: kg/m²・cm)

分類群	21	22	23	24	25	26	27	28	29
イネ	5.17	3.20	4.47	1.73		0.94	1.09	1.56	
ヨシ属				0.76	8.04	9.98	1.25	1.11	
ウシクサ族 (ススキ属など)	1.23	2.24	0.72	0.73	1.74	1.29	1.64	0.43	0.09
キビ族 (ヒエ属など)	2.68								
タケ亜科	0.63	0.41	0.17	0.23	0.05	0.15	0.27	0.25	0.16

表9 中秋間中島遺跡におけるおもな植物の推定生産量

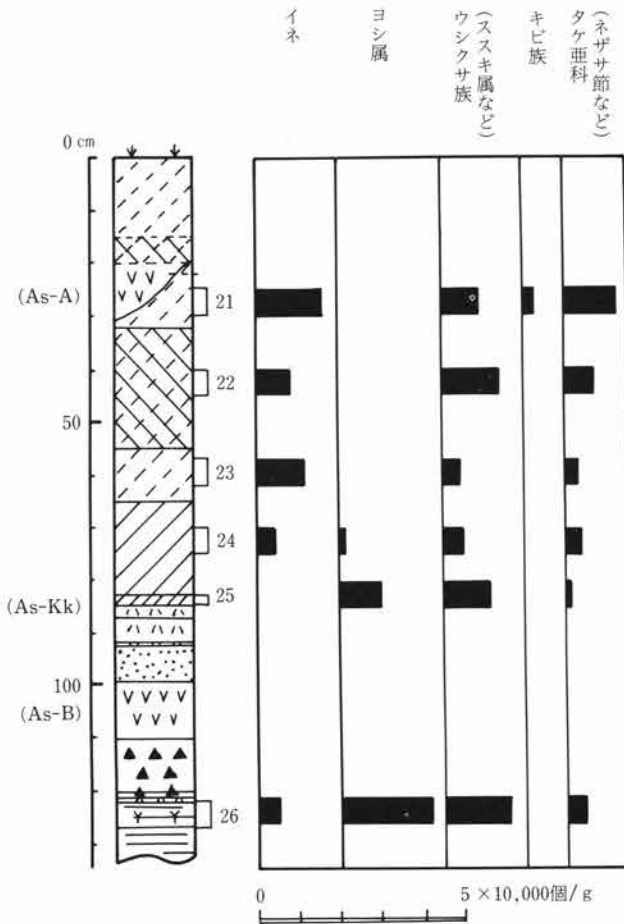


図19 中秋間中島遺跡南壁における
プラント・オパール分析結果

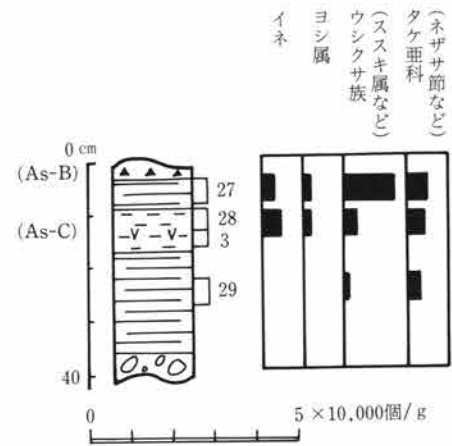


図20 中秋間中島遺跡北壁における
プラント・オパール分析結果

V 東上秋間稻貝戸遺跡

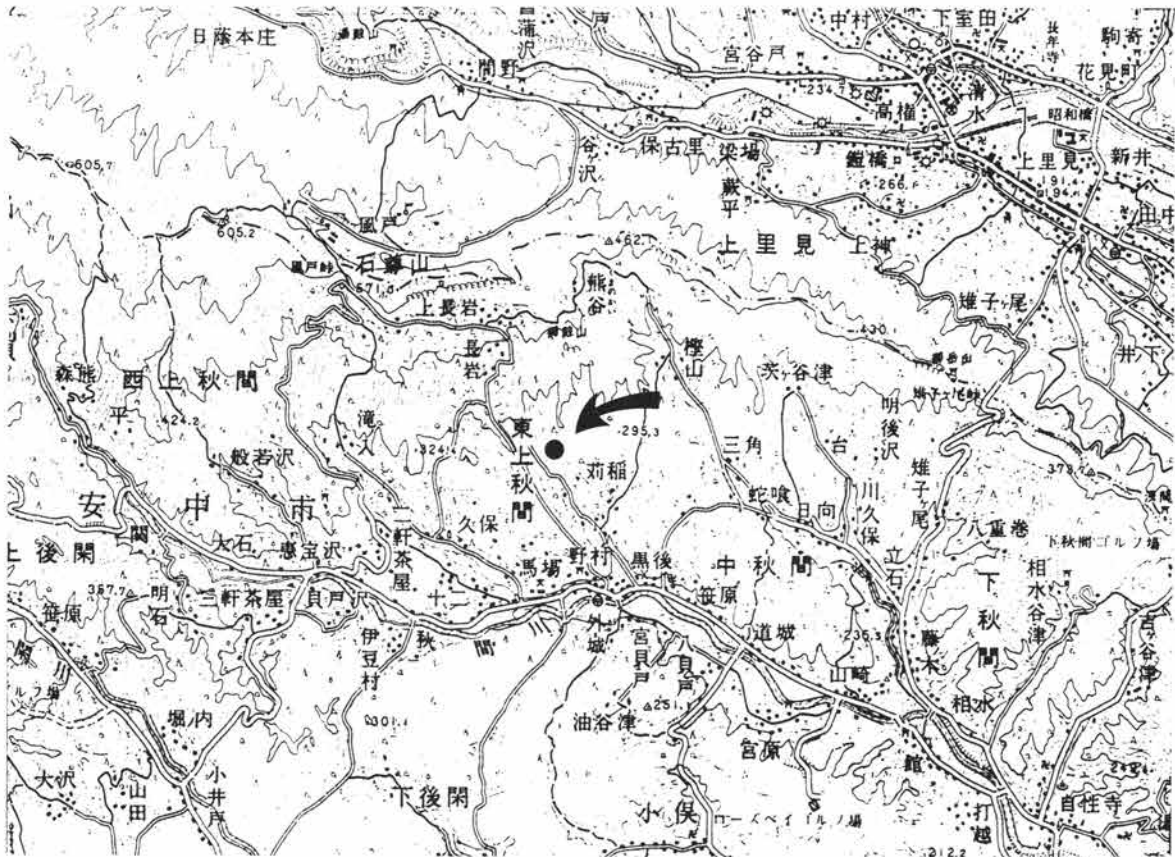


図21 東上秋間稲貝戸遺跡位置図

1 立地と環境

本遺跡は、安中市街地の北方、安中市と榛名町との分水嶺である石尊山（標高571.6m）の南東方向に張り出した御殿山の南方にあり、長岩集落との中間の荻根川（秋間川の支流）の上流部右岸に位置し、標高は270m前後である。地形的には荻根川に注ぐ小支谷により侵食された尾根部の先端で、傾斜はあるものの、小規模な舌状台地となっている。

調査区域はこの舌状台地の先端を横切る形であり、遺構確認面は調査区東半がやや高く、西側にやや低く傾斜し、東西両端は沢によって切られ、東半ではローム面が確認されている。

2 調査経過

平成3年

- 7月上旬 発掘調査準備・表土掘削・遺構精査
- 中旬 トレンチ調査・As-B下遺構調査・
遺跡地形測量・土坑調査
- 下旬 空撮・遺構測量・埋め戻し



発掘調査風景（西から）

3 基本層序

I 褐色土

（攪乱土）

II 暗褐色土

（As-Aを含む）

III As-B層

IV 黒褐色土

（粘性強い）

V 黄茶褐色土

（ソフトローム状・縄文時代前期遺物包含層）

VI 黄茶褐色土

（硬化ブロック及び黄色軽石がやや多い）

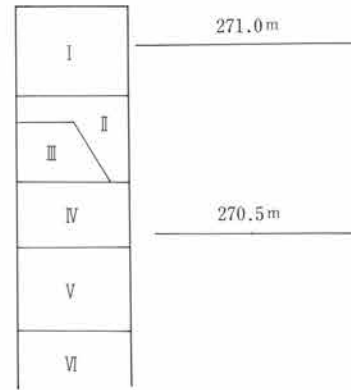


図22 基本層序図

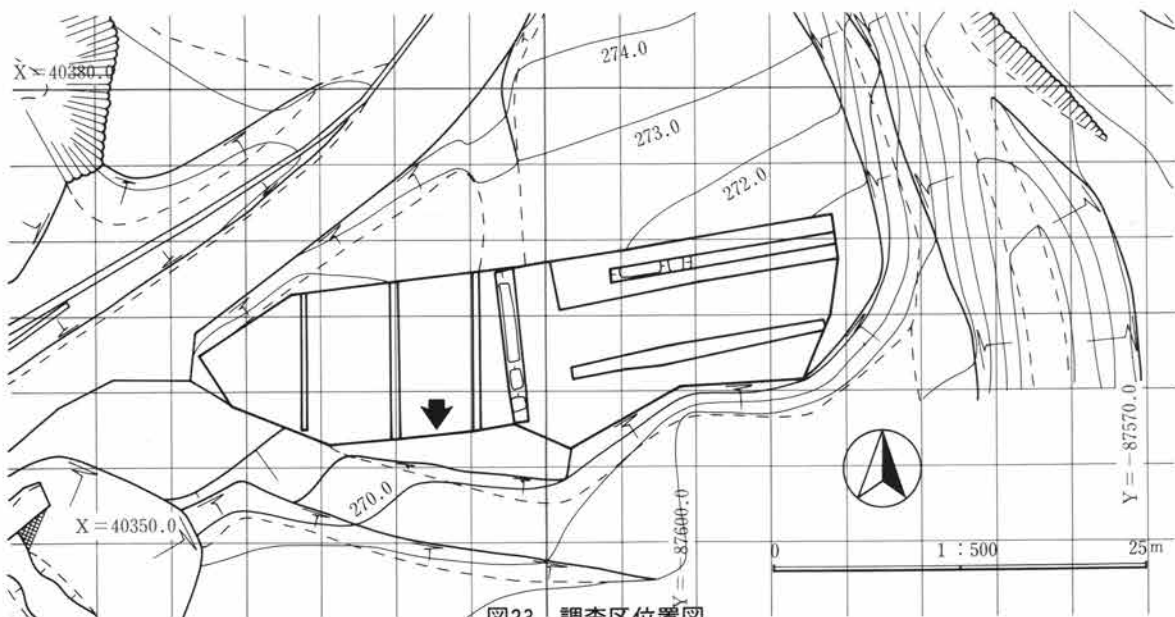


図23 調査区位置図

4 調査概要

調査区域は、舌状台地の先端を横切る形であり、遺構確認面は東半側がやや高く、西半側にやや低く傾斜し、東西両端は沢によって切られている。東半ではローム面が確認されたが、西半ではローム部分が検出されず、基盤土層上に縄文時代から近世までの包含層が確認された。

東半については、3カ所のトレンチを設定し、ローム層までの調査を行った。調査の結果、第1トレンチより溝を1条（南北方向走行：上幅20cm）検出した。出土遺物はないが、層位から、帰属時期は中世～近世と考えられる。

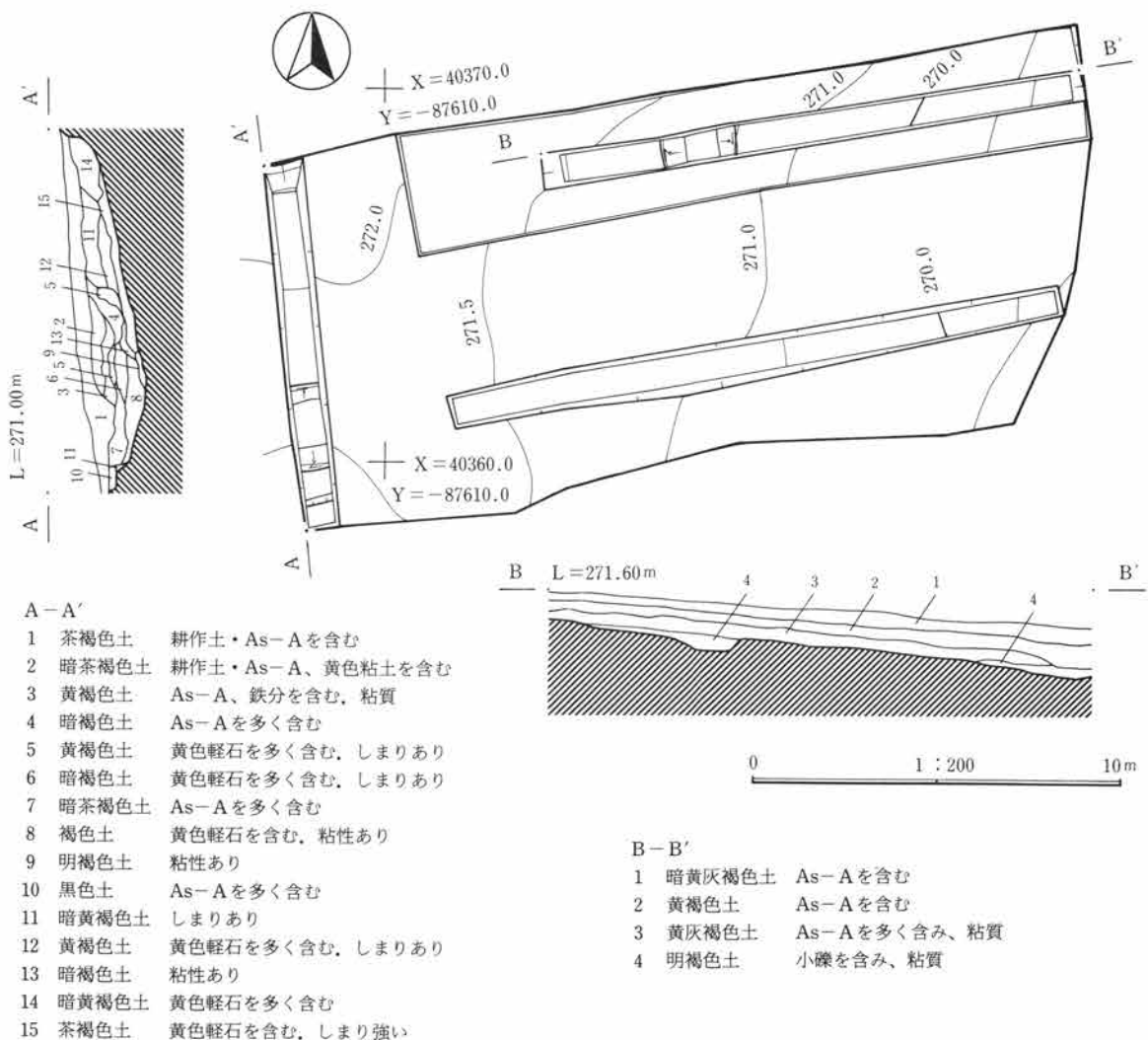


図24 調査区東半トレンチ平・断面図

西半については全面調査を行った。ピット8カ所・土坑6基を検出した。

出土遺物には、包含層より縄文時代前期土器片、古墳時代～平安時代土師器・須恵器、瓦、軟質陶器、砥石、古銭がある。

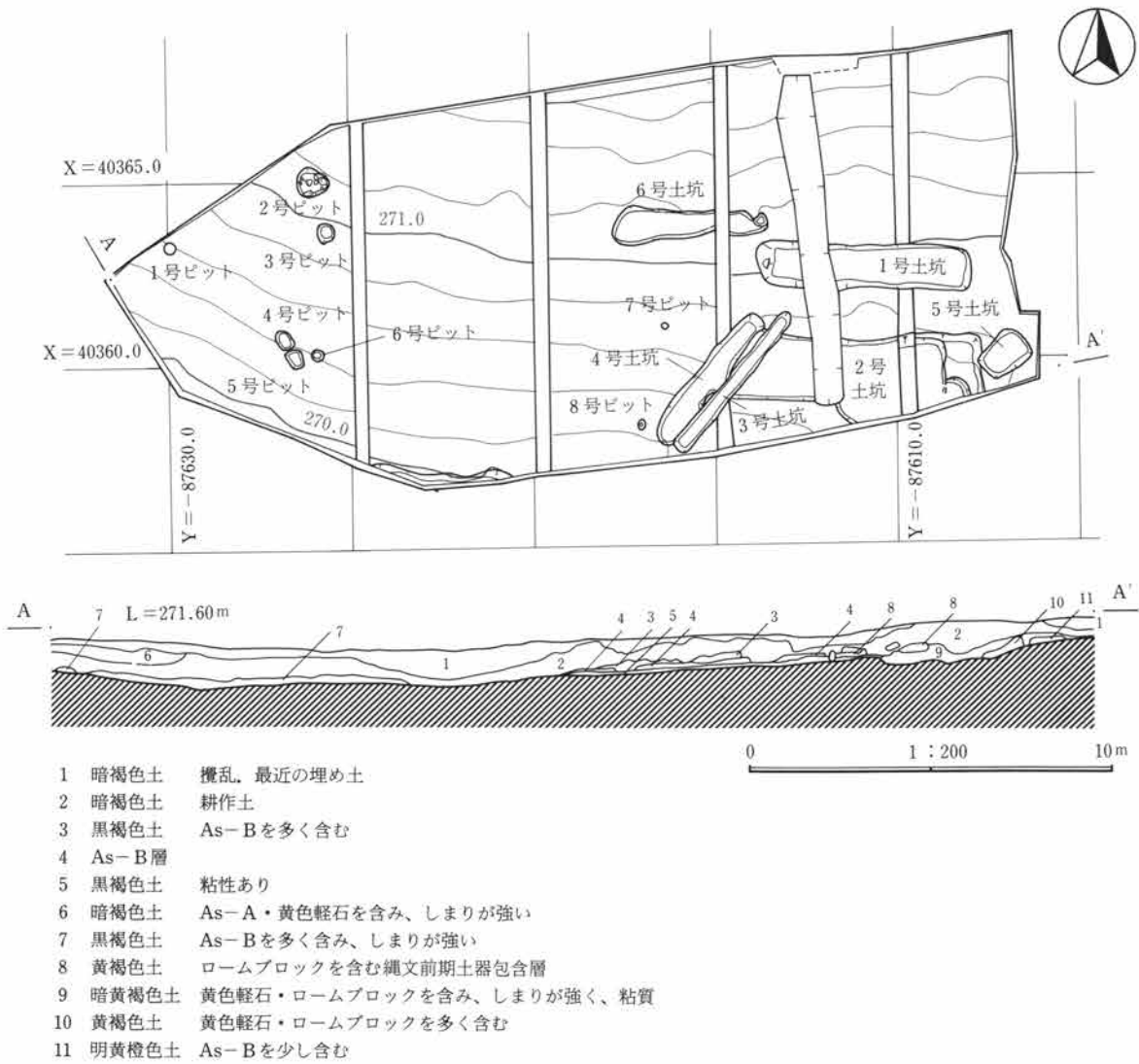


図25 調査区西半平・断面図

5 検出遺構

(1) ピット

調査区域の西半で8カ所検出された。各ピットデータについては表10の通りである。ピット相互に有機的関係が見いだせず、性格は不明である。

No	(径×深さ)	覆土	遺物	No	(径×深さ)	覆土	遺物
1	20cm×30cm	As-Bを含む黒色土	なし	5	40cm×13cm	As-Bを含む黒色土	なし
2	58cm×5cm	As-Bを含まない暗褐色土	礫多い	6	30cm×25cm	As-Bを含む黒色土	なし
3	40cm×20cm	黄色軽石を含む暗褐色土	なし	7	20cm×23cm	As-Bを含む黒色土	なし
4	37cm×17cm	As-Bを含む黒色土	なし	8	24cm×10cm	As-Bを含む黒色土	なし

表10 ピットデータ一覧表

(2) 土坑

1号土坑 (図26・P L 4)

【平面規模・形状】5.90m×1.25m：長方形 【深さ・形状】0.55m：箱形 【覆土】ソフトロームブロックを含む暗茶褐色土 【出土遺物】覆土中より縄文土器(茅山上層)小片1・須恵器小片2(未実測)出土 【帰属年代】不明 【備考】他遺構との切り合いはなし

2号土坑 (図27・P L 4)

【平面規模・形状】3.20m×2.34(?)m：長方形(?) 【深さ・形状】0.58m：箱形 【覆土】ソフトロームブロックを含む暗茶褐色土 【出土遺物】覆土中より須恵器片1(未実測)出土 【帰属年代】不明 【備考】一部、調査区外に広がる

3号土坑 (図27・P L 4)

【平面規模・形状】4.80m×0.46m：長方形 【深さ・形状】0.26m：椀形 【覆土】ソフトロームブロックを含む暗茶褐色土 【出土遺物】なし 【帰属年代】不明 【備考】切り合い関係から、4号土坑(旧)→3号土坑(新)

4号土坑 (図27・P L 4)

【平面規模・形状】4.30m×1.25m～：長方形 【深さ・形状】0.24m：箱形 【覆土】As-B・ソフトロームブロックを含む暗茶褐色土 【出土遺物】なし 【帰属年代】不明(As-B降下以降) 【備考】切り合い関係から、4号土坑(旧)→3号土坑(新)

5号土坑 (図27・P L 4)

【平面規模・形状】1.38m×0.95m：方形 【深さ・形状】0.58m：箱形 【覆土】ソフトロームブロックを含む暗黄褐色土が主体 【出土遺物】なし 【帰属年代】不明 【備考】なし

6号土坑 (図27・P L 4)

【平面規模・形状】4.25m×0.74m：不整長円形 【深さ・形状】0.14m：椀形 【覆土】As-B・ソフトロームブロックを含む暗茶褐色土 【出土遺物】覆土中より須恵器片2(未実測)出土 【帰属年代】不明(As-B降下以降) 【備考】なし

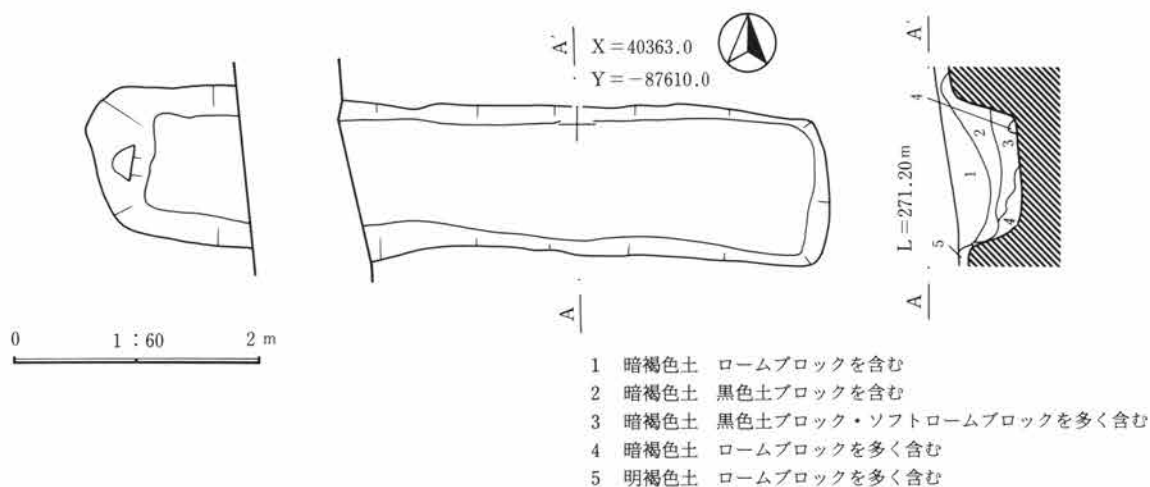


図26 1号土坑平・断面図

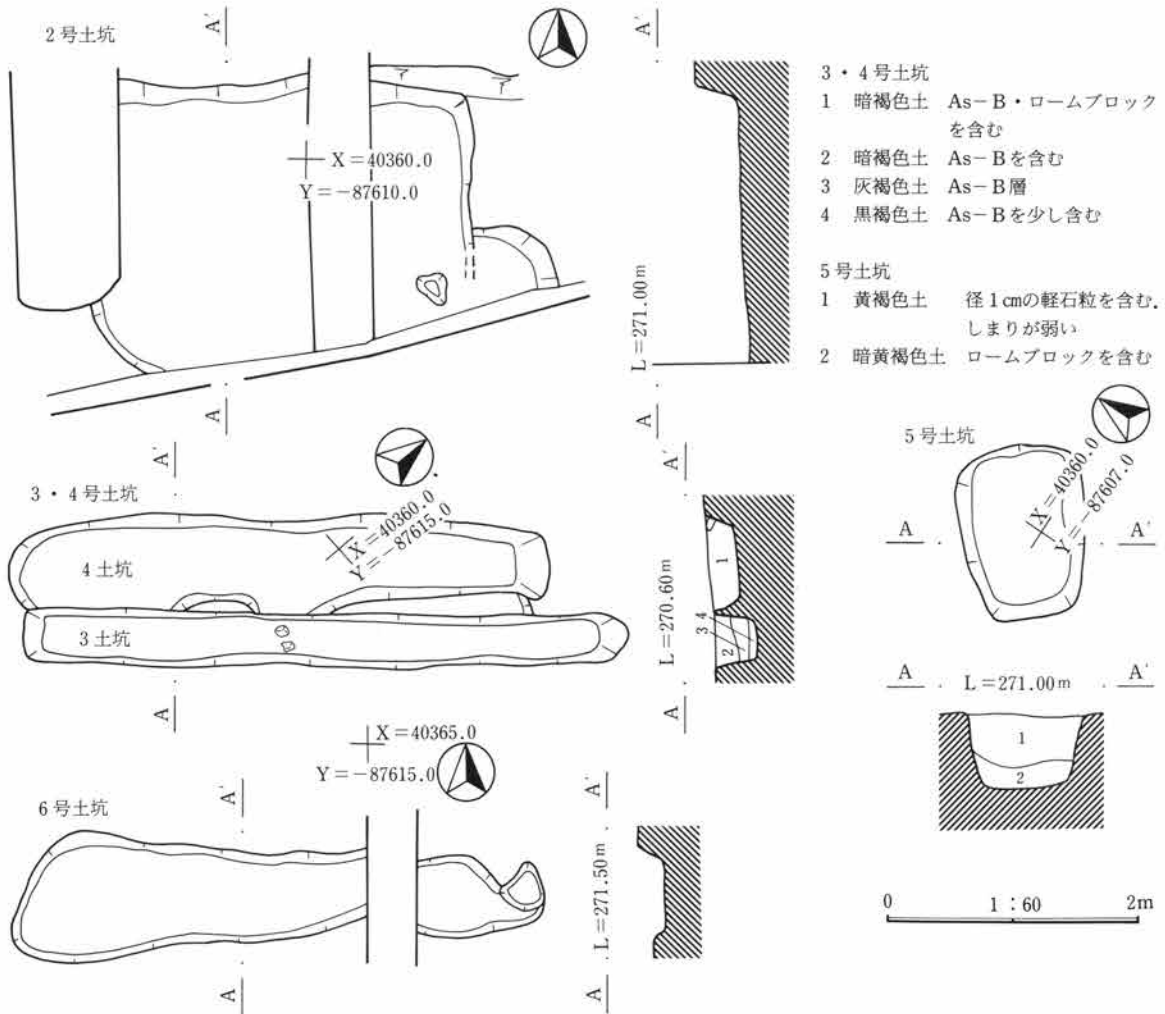


図27 2～6号土坑平・断面図

6 出土遺物

調査区内では縄文土器片・須恵器・軟質陶器・瓦等が出土した。

縄文土器は早期～前期のものである。いずれも小片である。帰属時期の内容は山形の押型文系土器、茅山上層式、関山式、諸磯式である。出土位置は1点が1号土坑覆土である以外は、全て包含層である。本書では内4点について掲載した。

須恵器・軟質陶器・瓦等に関しても全点が包含層より出土した遺物であり、遺構には帰属しない。

図版No P L No	出土位置	色 調	遺 物 の 特 徴
28-3 P L 5	1号土坑 覆土	暗褐色	胎土に径1～3mm程の小石を多く含む繊維土器。口唇部には、細かい刻みを持ち、内外面に幅1cmの貝殻条痕が施文されている。早期後半条痕文系土器の茅山上層に比定される。
28-2 P L 5	包含層	暗褐色	胎土に径1mm前後の細かい砂粒を含む繊維土器。単節R LとL Rの原体を結束して施文し、菱形になるように文様効果を出している。関山II式になる。
28-4 P L 5	包含層	茶褐色	胎土に径1mm以下の細かい砂粒を含む繊維土器。幅5mm程の平行沈線を鋸歯状に施文している。縄文は組み紐を用いて施文している。関山II式になる。
28-1 P L 5	包含層	暗褐色	胎土に径1mm以下のごく細かい砂粒を含む。裏面に繊維痕と思われる筋が認められる。表面は山形の押型文が施文されている。押型文系土器の後半段階のものと思われる。

表11 出土遺物観察表 (1)

図版No P L No	器 種 種 別	出 土 位 置	①残存 ②法量 ③形態の特徴 ④手法の特徴 ⑤胎土 ⑥色調 ⑦備考
28-5 P L 5	坏 須恵器	包含層	①口縁～体部：10% 底部：80% ②口縁部径：13.8cm(推定) 底部径：7.1cm 器高：3.8cm ③口縁～体部：やや内彎気味に外斜 底部：平底 ④口縁～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤緻密 ⑥灰白色
28-6 P L 5	坏 須恵器	包含層	①口縁～体部：0% 底部：20% ②底部径：9.0cm(推定) ③底部：平底 ④底部：回転糸切り ⑤密 ⑥灰白色
28-7 P L 5	高台坏 須恵器	包含層	①口縁～体部：5% 底部：40% ②底部径：8.0cm(推定) ③底部：高台付 ④体部：轆轤成形 底部：回転篋切り後、周辺回転篋削り 上部：貼り付け ⑤径1～3mmの砂粒を含む ⑥灰白色
28-8 P L 5	坏 須恵器	包含層	①口縁～体部：30% 底部：5% ②口縁部径：12.2cm(推定) 底部径：8.1cm(推定) 器高：3.1cm ③口縁～体部：内彎気味に外斜 底部：平底(推定) ④口縁～体部：轆轤成形 底部：不明 ⑤密 ⑥におい黄褐色 ⑦体部外面に僅かに自然釉がかかる
28-9 P L 5	高台坏 須恵器	包含層	①口縁～体部：5% 底部：20% ②底部径：7.0cm(推定) 上部径：7.3cm(推定) ③底部：高台付 高台：短く外斜 ④口縁～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り 上部：貼り付け ⑤径1～3mmの砂粒を含む ⑥暗灰色
28-10 P L 5	坏 陶器	包含層	①口縁～体部：5% 底部：5% ②底部径：7.7cm(推定) ③体部：大きく外斜 底部：高台付 高台：短く外斜 ⑤緻密 ⑥灰白色 ⑦灰釉陶器
28-11 P L 5	坏 蓋 須恵器	包含層	①つまみ：50% ②つまみ径：5.0cm ③つまみ：大きく、偏平形 ④つまみ：貼り付け ⑤径1mm以下の砂粒を含む ⑥暗灰色・断面セピア色
28-12 P L 5	坏 蓋 須恵器	包含層	①つまみ：100% 体部：5% ②つまみ径：3.0cm ③つまみ：やや偏平な宝珠形 ④つまみ：貼り付け ⑤密 ⑥灰白色
28-13 P L 5	壺 須恵器	包含層	①体(肩)部：20% ②体(肩)部：20.0cm(推定) ④体(肩)部：轆轤成形後、刻みを巡らす ⑤径1mmの砂粒を含む ⑥灰白色
28-14 P L 5	盤 須恵器	包含層	①口縁～体部：20% 底部：50% 上部：40% ②口縁部径：23.0cm(推定) 底部径：14.6cm 上部径：15.5cm ③口縁～体部：短く外斜 底部：平底 上部：短く外斜 ④口縁～体部：轆轤成形 底部：回転篋削り 高台：貼り付け ⑤やや密 ⑥暗灰色 ⑦底部内面摩滅
28-15 P L 5	甗 須恵器	包含層	①体部：5% 底部：10% ②底部径：14.0cm(推定) ③体部：外斜 底部：広口単孔(推定) ④体部：轆轤成形 底部：轆轤成形後、ユビナデ ⑤密 ⑥灰白色
28-16 P L 5	鉢 須恵器	包含層	①口縁部：5% ②口縁部径：21.2cm(推定) ③口縁部：直線的な外斜 ④口縁部：ヨコナデ後、端部外面に太い沈線を巡らす ⑤径1～2mmの砂粒を含む ⑥暗灰色
28-17 P L 5	高 坏 須恵器	包含層	①脚部：30% ③脚部：短脚・やや裾広がり ④脚部：轆轤成形 ⑤密 ⑥暗灰色
28-18 P L 5	甗 須恵器	包含層	①体部：5%未満 ④体部：外面は、タタキ後、ナデ・内面はナデ ⑤やや密 ⑥灰白色
28-19 P L 5	内耳埴 軟質陶器	包含層	①口縁部：10% ②口縁部径：23.7cm(推定) ③口縁部：短く、外斜 ④口縁部：ヨコナデ ⑤径1mmの砂粒を含む ⑥におい橙色 ⑦内耳の取付は、ほぞ穴差し込み
28-20 P L 5	砥 石	包含層	石質…砥沢石 特徴…4面とも摩滅
29-1 P L 5	瓦 女 瓦	包含層	④桶巻造り 内面に布痕あり ⑤密・乳白色夾雑物含む ⑥暗灰色
29-2 P L 5	瓦 女 瓦	包含層	④桶巻造り 内面に布痕あり ⑤密・乳白色夾雑物含む ⑥暗灰色
29-3 P L 5	瓦 女 瓦	包含層	④桶巻造り 内面に布痕あり ⑤密・乳白色夾雑物含む ⑥暗灰色
29-4 P L 5	古 銭	包含層	寛永通宝

表12 出土遺物観察表 (2)

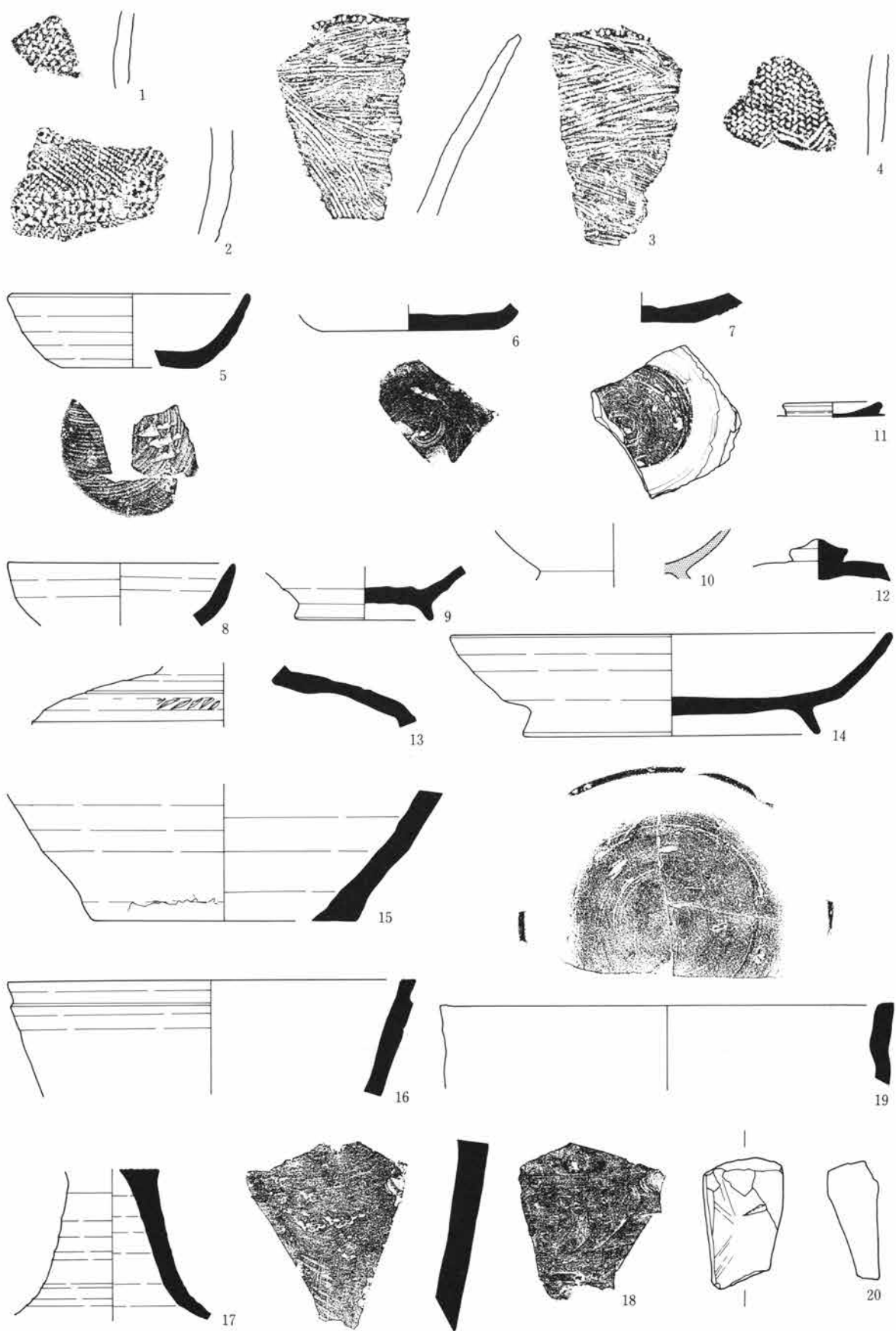


图28 出土遺物実測図(1)

0 1 : 3 10cm

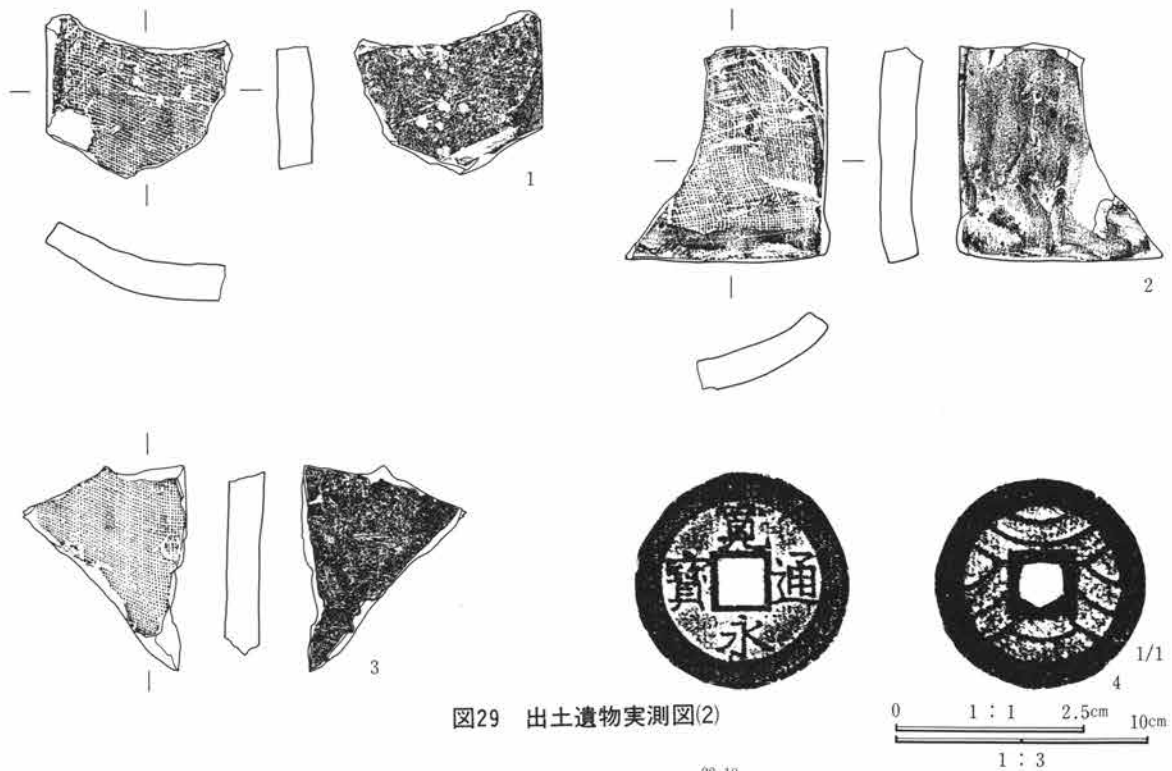


图29 出土遺物実測図(2)

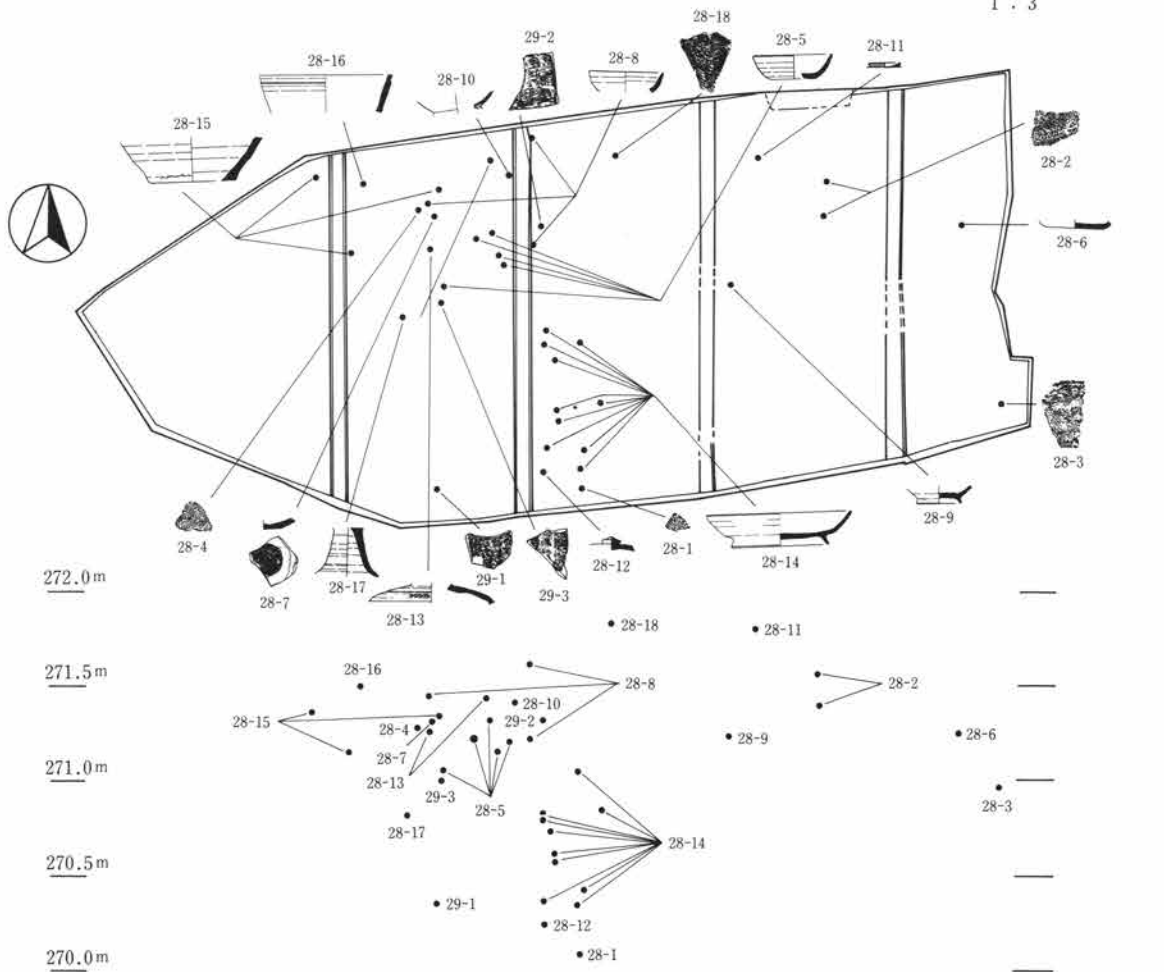


图30 遺物出土位置分布図

VI 東上秋間笹田遺跡

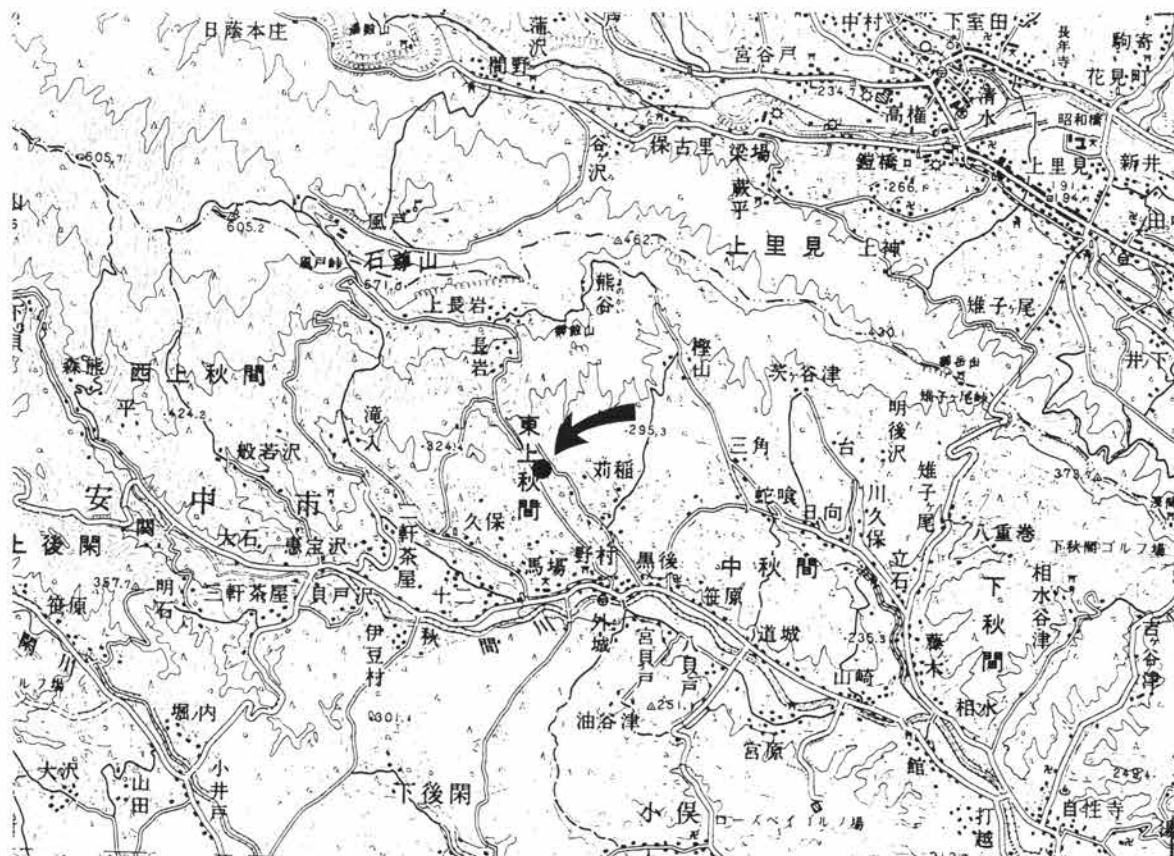


図31 東上秋間笹田遺跡位置図

1 立地と環境

本遺跡は、安中市と榛名町との分水嶺である石尊山（標高571.6m）の南東方向に張り出した御殿山の南方にある。長岩集落と、苺稲集落との中間の苺根川（秋間川の支流）の上流部右岸の小支谷に位置する。標高270～290mの谷津地形に所在する。

遺跡の所在する谷津の入り口には、明治初年に廃棄されたと伝えられる“千福寺”跡があり、山門があったと思われる辺りに六地藏が、寺院址があった部分では石垣が、またその裏手には無縫塔の墓石が残っている。遺跡は、この寺院址の西側を通る古道を50m程入った所にあり、長岩集落付近から南南東に延びる尾根の先端部の南面にあり、遺跡東半は南面する斜面地形に、また、西半は東面する斜面を棚田状に改変した地

形となっている。長岩集落と本遺跡との間は地滑りにより沢が埋められていることが地質調査で確認されており、調査区西半部はその先端に当たる。

2 調査経過

平成3年

- 6月上旬 発掘調査準備・遺構確認調査（西区）
- 中旬 遺構確認調査（西区）・炭窯調査・トレンチ調査
- 下旬 トレンチ調査・埋め戻し
- 12月上旬 炭窯調査・遺構確認調査（東区）
- 中旬 炭窯調査・遺構確認調査（東区）
- 下旬 トレンチ調査・埋め戻し

平成4年

- 1月上旬 トレンチ調査
- 中旬 炭窯調査・トレンチ調査
- 下旬 炭窯調査・As-A下水田調査・トレンチ調査・調査区空撮



発掘調査風景（北西から）

- 2月上旬 炭窯調査・As-A下水田調査・測量
- 中旬 炭窯調査・As-A下水田調査・水田下トレンチ調査・測量
- 下旬 As-B下遺構面調査・埋め戻し
- 3月上旬 As-B下遺構面調査・埋め戻し
- 中旬 遺構測量・埋め戻し
- 下旬 埋め戻し

3 基本層序

- | | | |
|------|---------|-----------------|
| I | 黒褐色土 | 表土 |
| II | にぶい茶褐色土 | As-Aを含む |
| III | As-A層 | |
| IV | 灰褐色土 | 粘質（As-A下水田耕土） |
| V | にぶい赤褐色土 | As-Bを含む |
| VI | にぶい赤褐色土 | 黄褐色粒子を含む |
| VII | 暗褐色土 | 礫、As-B、黄褐色粒子を含む |
| VIII | 暗褐色土 | 礫を多く含む（地山） |
| IX | 黒褐色土 | As-Cを含む |

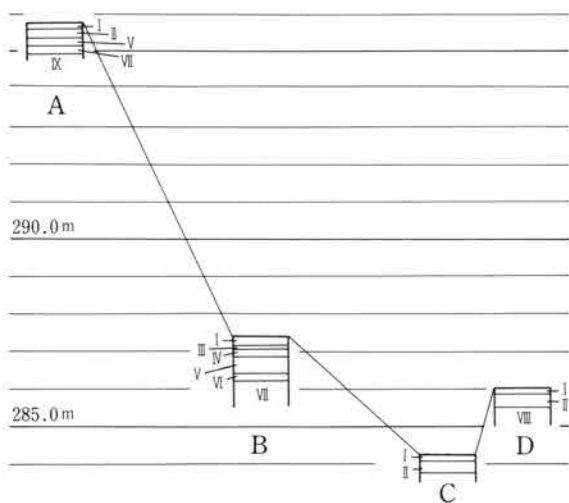


図32 基本層序図

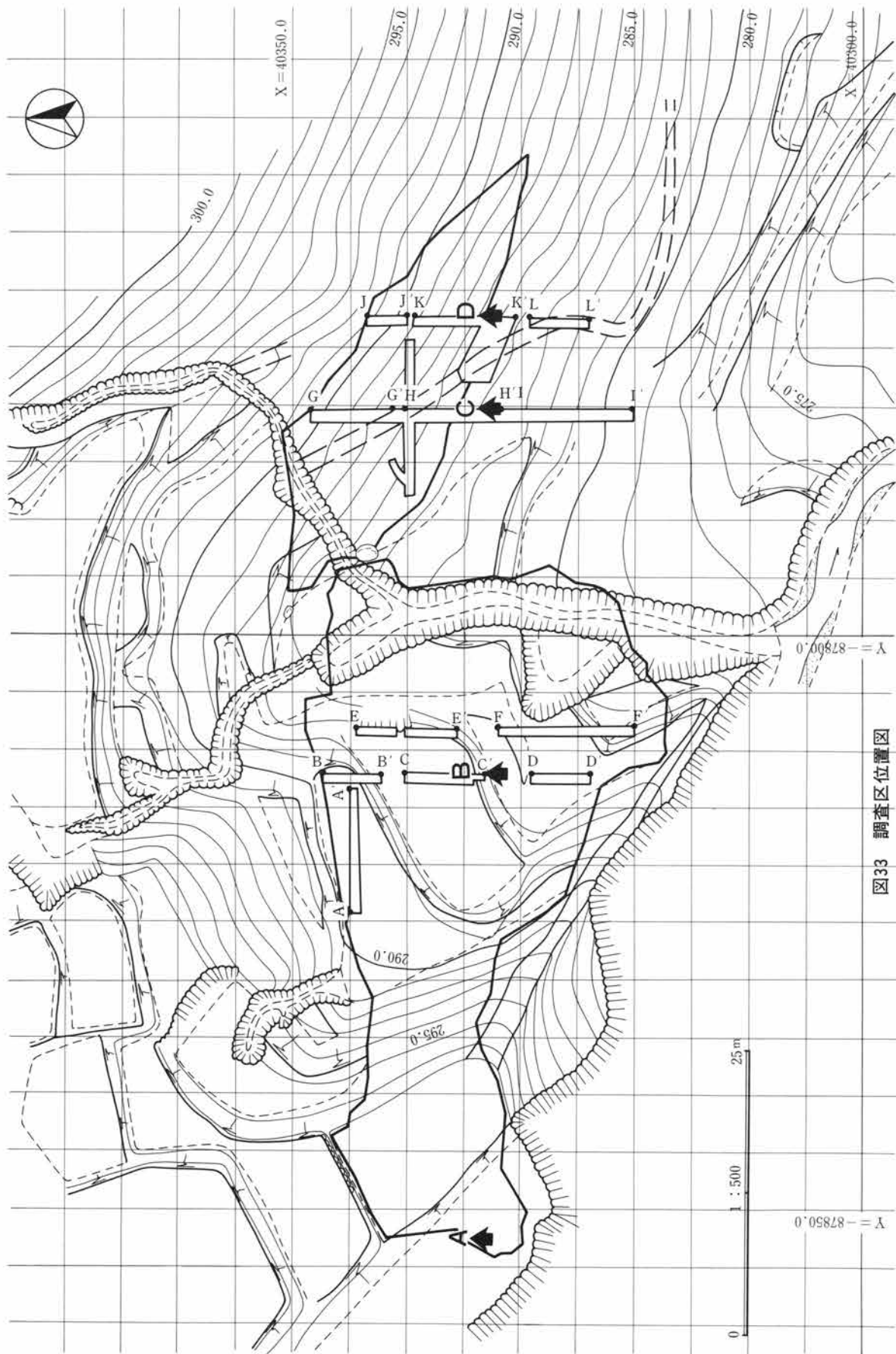


图33 调查区位置图

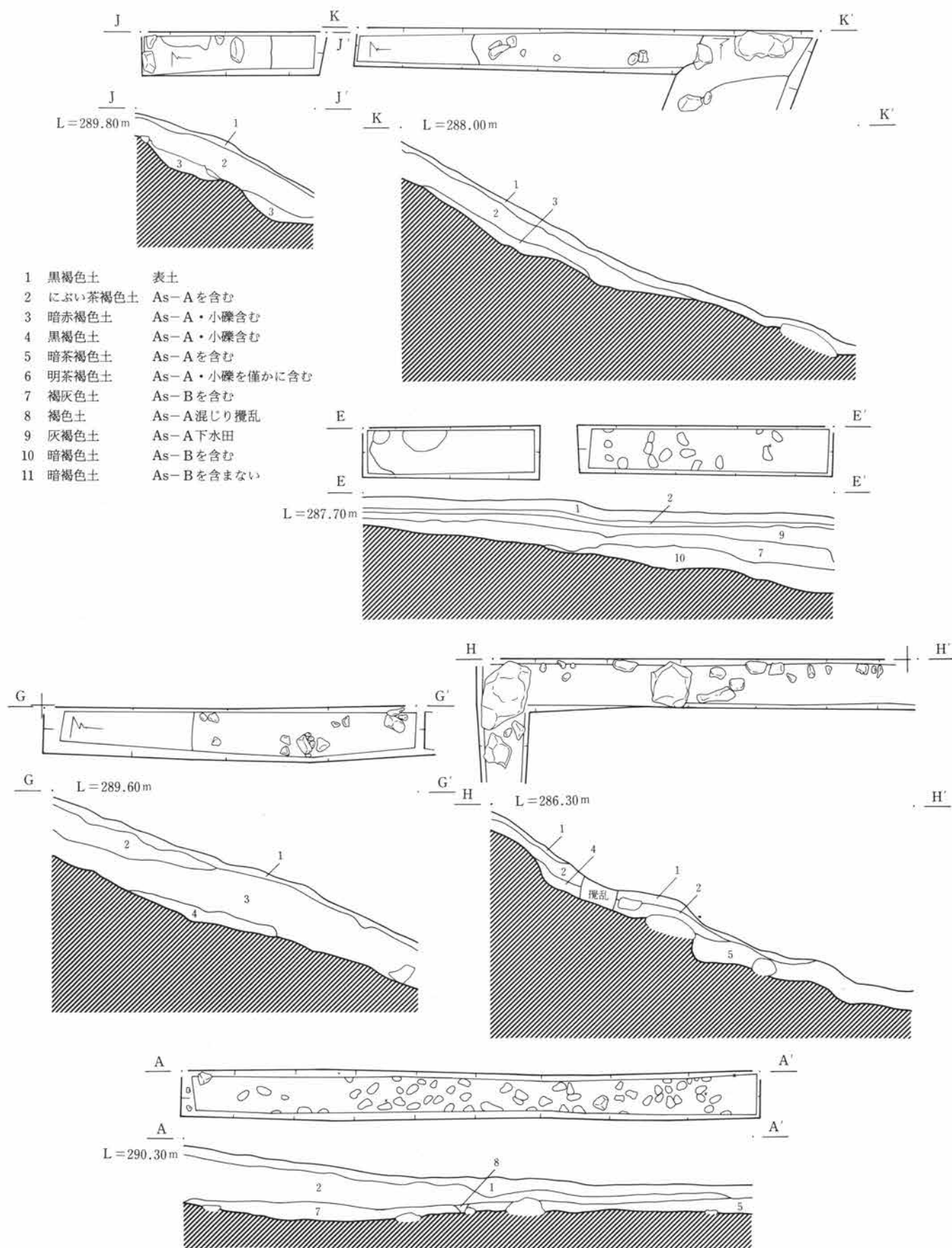


図34 トレンチ平・断面図(1)

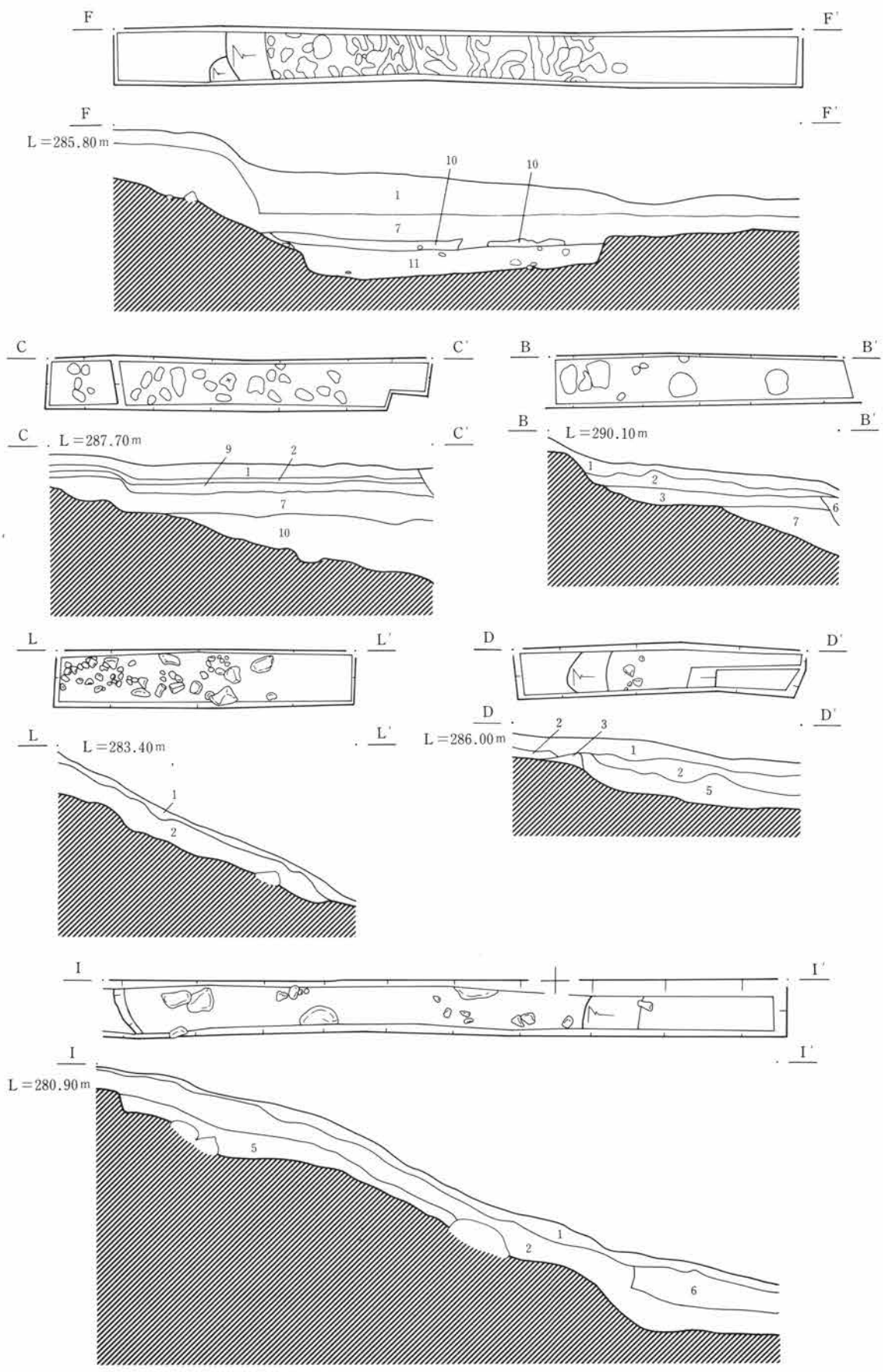


図35 トレンチ平・断面図(2)



4 調査概要

調査区はその中にある沢によって、東半（南面する斜面地形）と西半（東面する斜面地形）とに分けられた。

調査着手時は調査区内14カ所にトレンチを設定し、遺構確認を実施した（図33・34・35・PL7）。その結果、西半では道1条と炭焼窯1基を確認した。また、東半ではAs-Aの良好な堆積層が確認でき、その直下の棚田状遺構を確認した。遺構確認後、東西ともに斜面全域の調査を実施した。その結果、東半ではトレンチ調査時確認の道1条と炭焼窯1基の調査を実施した。また、西半ではトレンチ調査時確認のAs-A層直下より棚田状の小規模な水田が5面検出され、その水田面からは人の足跡が数多く検出された。さらに西半の標高の最も高い尾根筋にあたる平坦面からは、As-A直下の畠が確認された。また、棚田状水田の下からは自然地形と見られる沢が確認された。

出土遺物は、覆土中より、近世陶磁器、金属製品、土師器片、須恵器片（未図化）などがある。

5 検出遺構

(1) 道（図37）

調査区東半（南面する急斜面）で検出された。道幅は60cm前後であり、断面では椀形の僅かな凹地を呈し、底面の硬度は他に比して高い。走行は斜面半ばを東から西へほぼ斜めに上がっている（標高284.6~287.8mの範囲）。凹地は直接As-Aに覆われ、またAs-A層も道状（凹地化）を呈していることから、江戸時代以前から存在し、その後近世前半から中頃にかけて利用され、その後埋没したものと考えられる。道の走行と周辺環境から苅稻集落から長岩集落への古道と推定される。

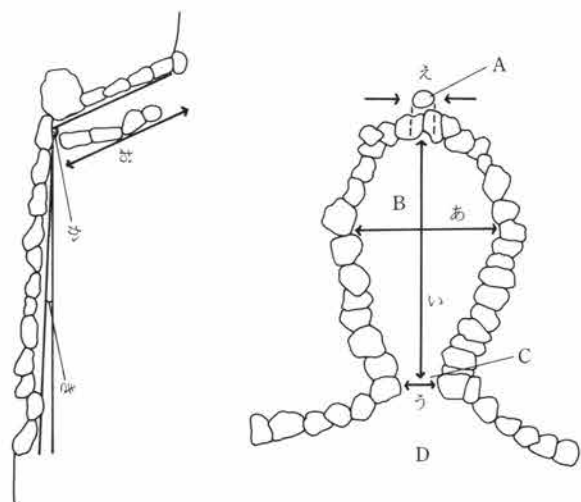
(2) 炭焼窯（図38・PL9）

調査区東半（南面する急斜面）の西寄りの沢に近いやや下位の位置で検出された。

石窯であり、窯体は径20cm程度の石を組み合わせている。炭化室の平面形状は南北方向に長軸をとる無花果形を呈している。規模は全長 2.38m、最大幅 1.36m、焚口幅 0.33m、窯体傾斜 前斜 2°、煙道個数 奥壁 1個、煙道角度 114°、煙道最大長 1.10m、煙道直径 13cm、である。焚口前庭部には角礫が散在している（計測地点は図36参照）。

遺物は、焚口前庭部覆土中より「かぎの手」状鉄製品と陶器片が出土している。

遺構の帰属時期は、掘り方側壁にAs-Aの堆積層が確認できた事と形態から、As-A降下以降の構築であり、近世後半~近代、と推定される。



A.煙道 B.炭化室 C.焚口 D.前庭部
あ,最大幅 い,全長 う,焚口幅 え,煙道直径
お,煙道長 か,煙道角度 き,窯体傾斜

図36 炭焼窯計測ポイント図



A地点から



B地点から



C地点から



D地点から

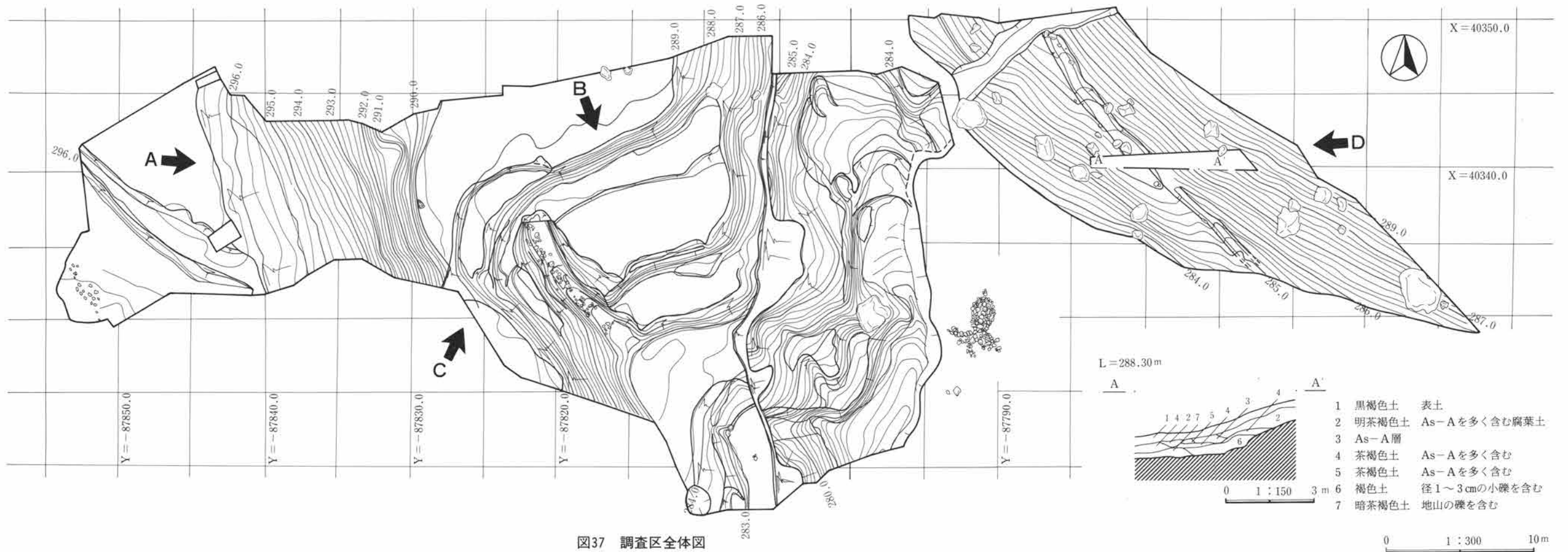


図37 調査区全体図

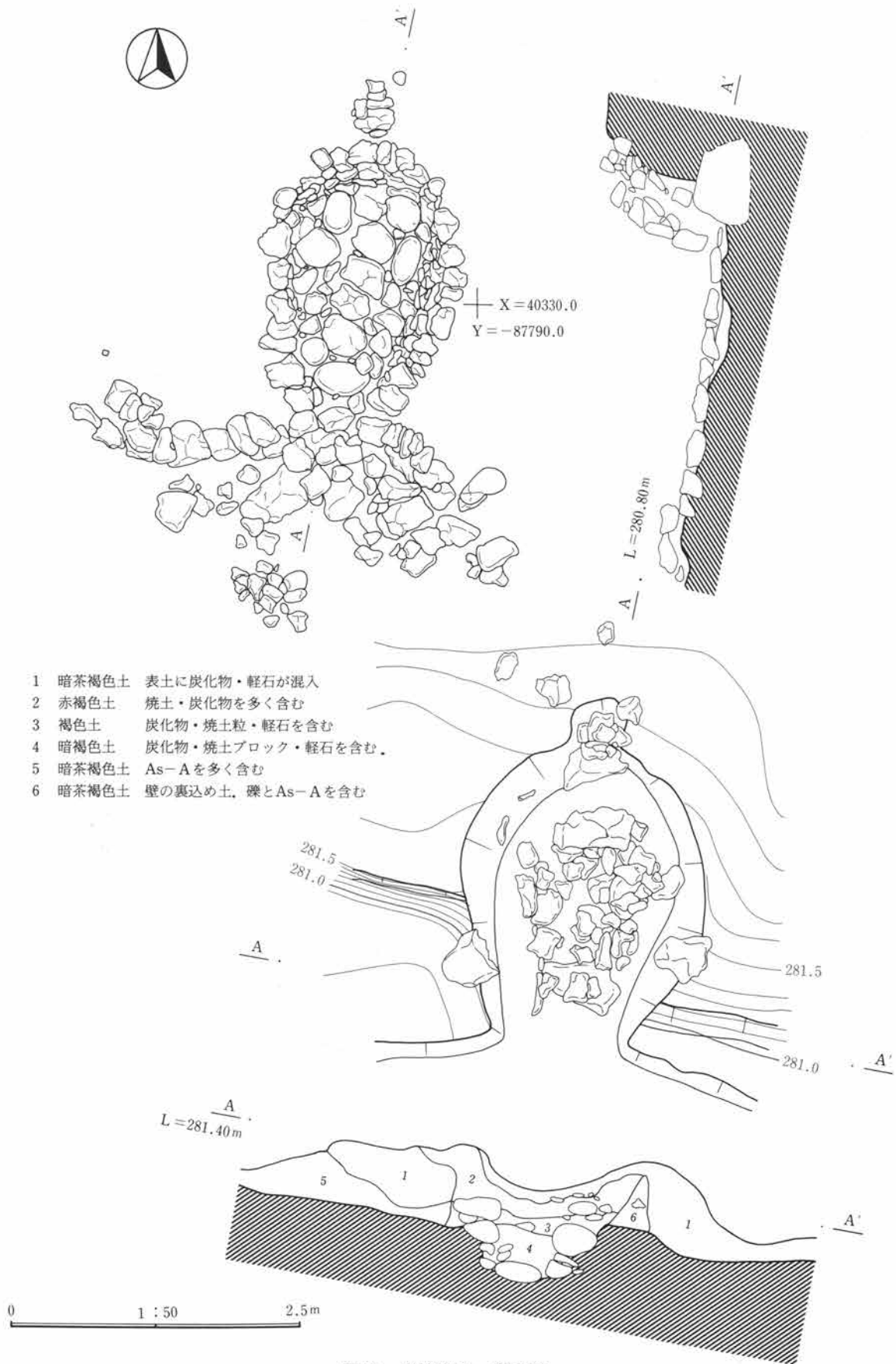


図38 炭焼窯平・断面図

(3) 畠 (図39・P L 8)

調査区西半の標高の最も高い尾根筋に位置する平坦面(標高295.5m付近)で検出された。

平坦面が狭いため、平面では明確に確認できなかった。しかし、土層断面の観察において畝間と想定できる小さな窪み(観察時で深さ5~20cm)をAs-A層が埋めているため、その状況からAs-A直下畠と想定した。

(4) 水田 (図40・P L 8)

調査区西半の東面する斜面において検出された。調査区が狭いため、1枚あたりの面積は明確ではないものの、棚田状に形成された小規模な水田は段差によって、7面確認できた。全てAs-A層で直接覆われた、As-A直下水田である。各水田面の比高差は次の通りである。

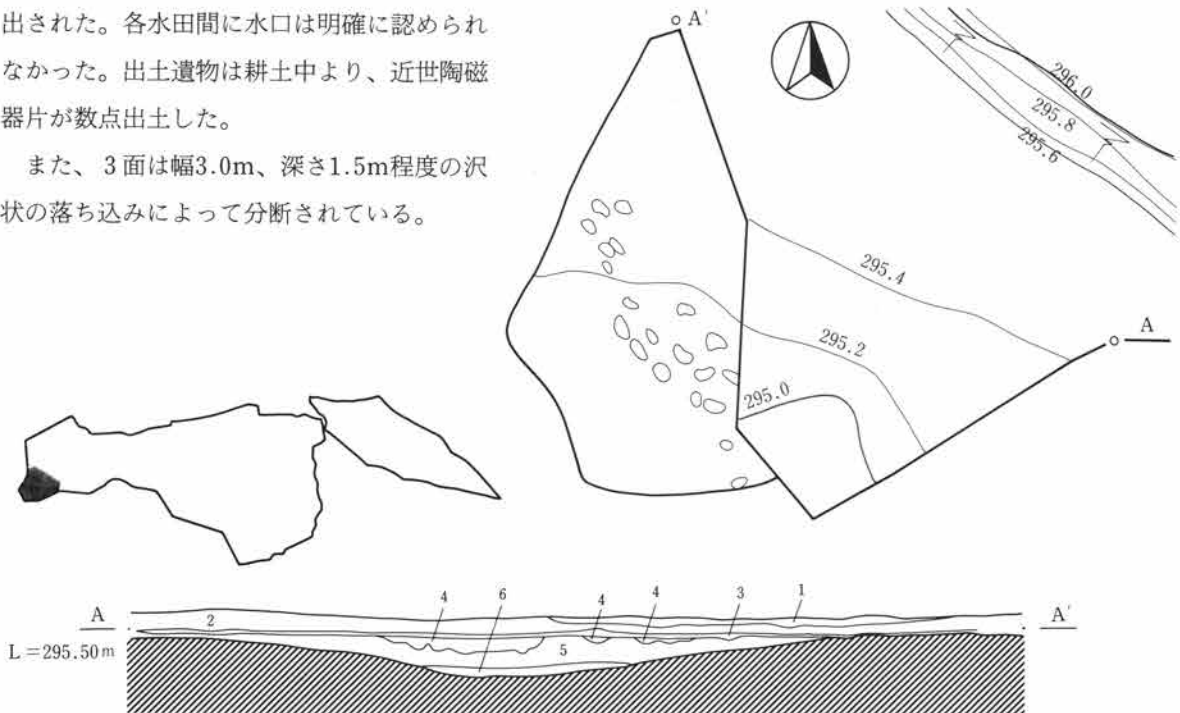
- 1面→2面 0.6m、1面→3面 1.7m、
- 2面→3面 1.1m、4面→2面 0.6m、
- 4面→3面 1.5m、3面→5面 1.8m、
- 4面→5面 3.4m、5面→6面 1.2m、
- 4面→6面 4.6m、6面→7面 1.8m、
- 1面→7面 6.6m (例: 1面→2面…1面が高く、2面が低いことを示す)



As-A下畠 (北東から)

各水田面には人と考えられる足跡が多数検出された。各水田間に水口は明確に認められなかった。出土遺物は耕土中より、近世陶磁器片が数点出土した。

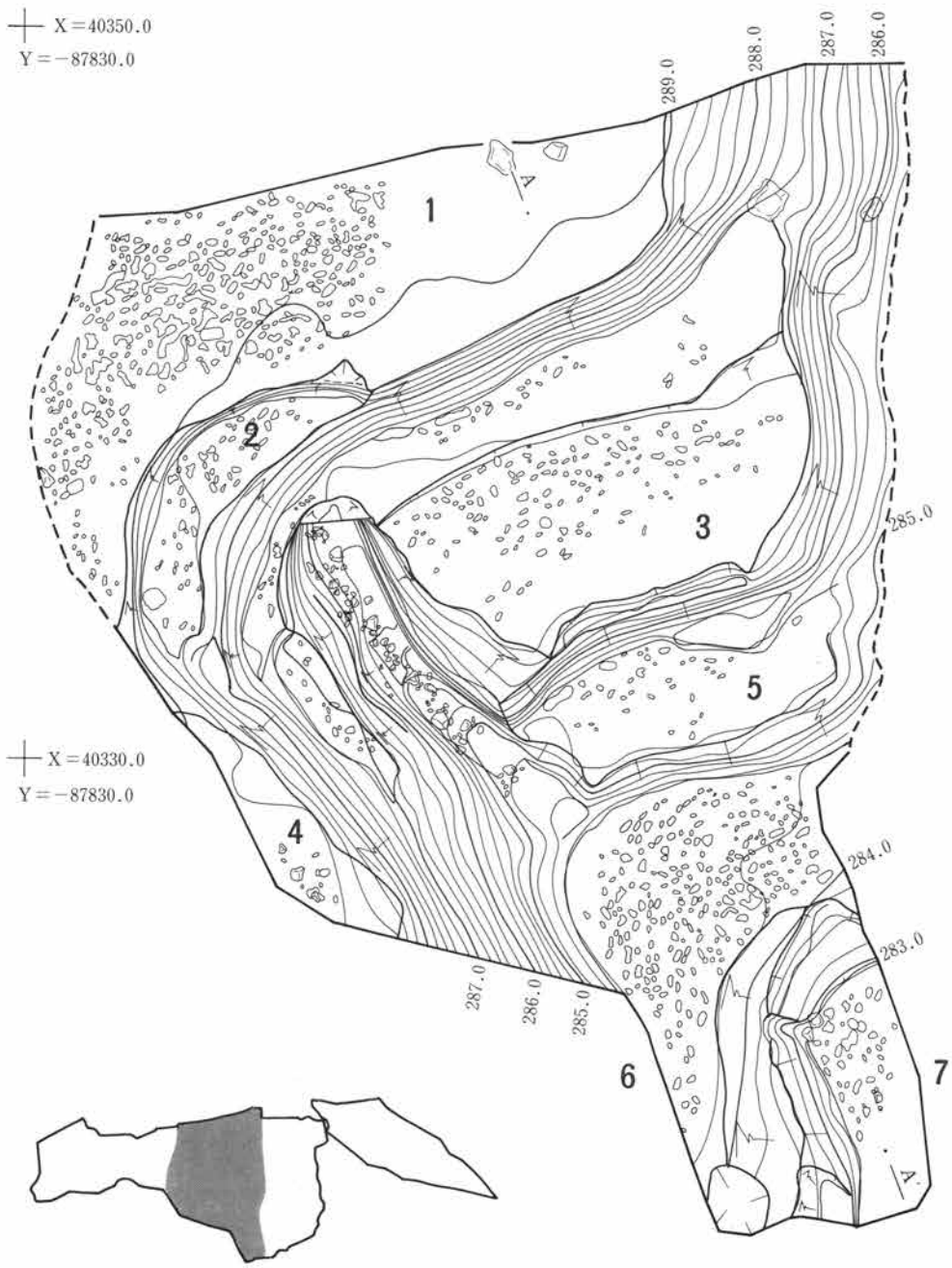
また、3面は幅3.0m、深さ1.5m程度の沢状の落ち込みによって分断されている。



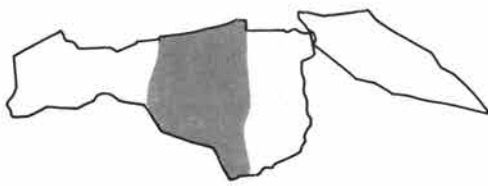
- 1 黒褐色土 表土 2 暗褐色土 As-A・小礫やや多い
- 3 赤褐色土 床土 4 As-A軽石層
- 5 暗褐色土 黄褐色粒・小礫やや多い
- 6 黒褐色土 As-Cを含む

図39 As-A下畠平・断面図

X=40350.0
Y=-87830.0



X=40330.0
Y=-87830.0



A

L = 290.00 m

A'



图40 As-A下水田平・断面图

0 1 : 200 10m

(5) 沢 (図41)

調査区西半の東面する斜面において検出されたAs-A直下水田の水田耕土を除去すると、自然地形と考えられる沢が検出された。この沢を埋める砂礫層の中には自然流木が多く含まれていた。

この沢がいつ埋没し、As-A直下水田となる棚田状の平坦面が形成されたかについては不明である。



写真右上 沢 (東から、A)
写真右下 沢 (南から、B)

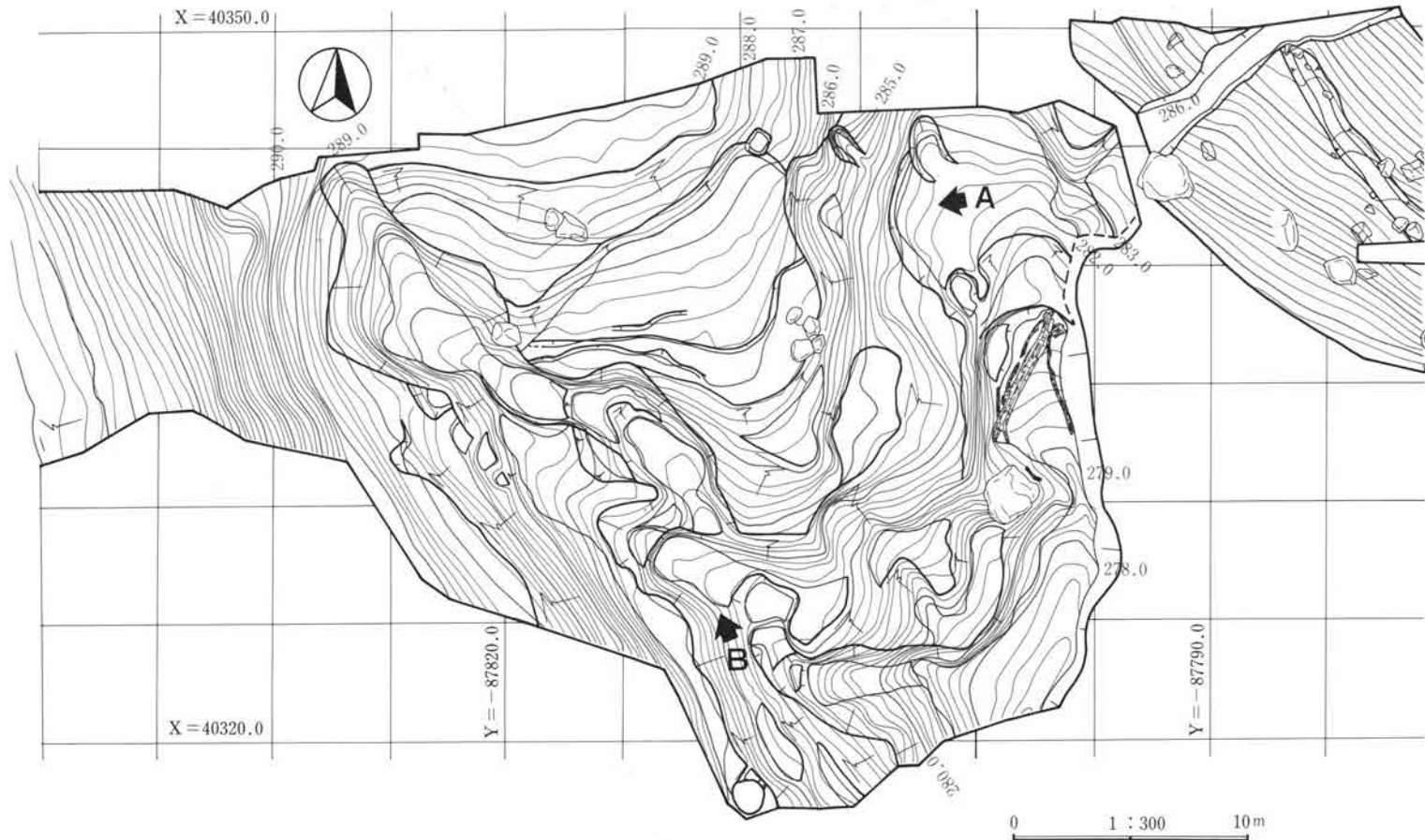


図41 沢平面図

VII 東上秋間神水遺跡

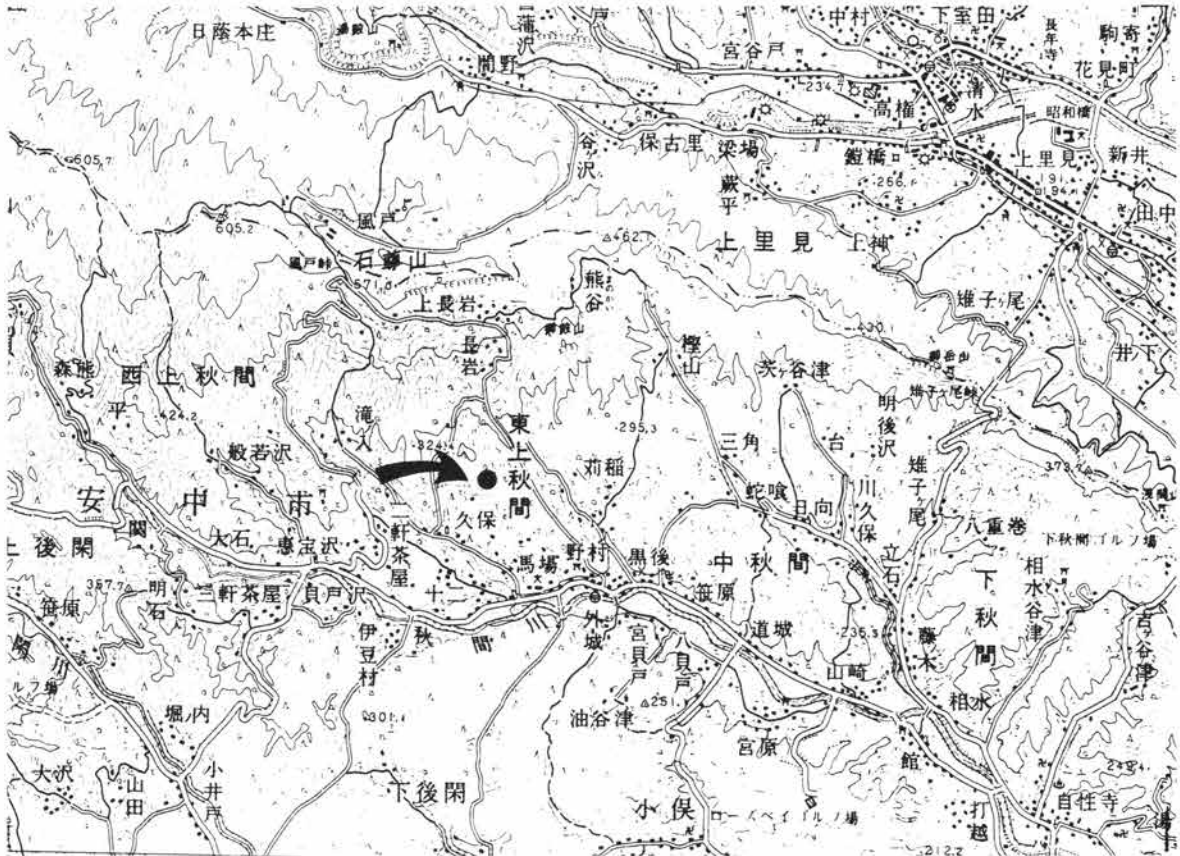


図42 東上秋間神水遺跡位置図

1 立地と環境

本遺跡は、安中市街地の北方、安中市と榛名町との分水嶺である石尊山（標高571.6m）の南東方向にあり、この分水嶺をなす山稜から南東方向に発達し小支谷を形成する神水川の上流部に位置する。

遺跡付近の標高は260～280mで、調査前には棚田状に水田があり、調査区の東側を神水川に、また、西側はその支流である小支谷によって区切られていた。

東上秋間笹田遺跡は、尾根を東側に一つこえたところに位置している。

2 調査経過

平成3年

- 8月上旬 発掘調査準備・表土掘削
 中旬 表土掘削・遺構確認調査
 下旬 遺構精査・写真撮影・As-A下遺構確認
- 9月上旬 As-A下遺構トレンチ調査
 中旬 As-A下遺構トレンチ調査
 下旬 As-A下遺構トレンチ調査
- 10月上旬 As-A下水田・溝調査
 中旬 溝調査
 下旬 調査区（斜面部）遺構確認調査・溝調査
- 11月上旬 須恵器窯調査・溝調査
 中旬 須恵器窯調査・沢部分調査
 下旬 須恵器窯調査・沢部分調査
- 12月上旬 トレンチ調査・遺跡空撮・埋め戻し
 中旬 トレンチ調査・埋め戻し
 下旬 埋め戻し



発掘調査風景（西から）

3 基本層序

I	黒褐色土	現耕作土
II	灰褐色土	As-Aを含む
III	褐灰色土	As-Bを含む
IV	にぶい赤褐色土	As-Bを含む
V	赤灰色土	As-Bを含む
VI	灰褐色砂	As-Bの二次堆積層
VII	黒色土	粘性強い
VIII	にぶい黄褐色土	砂質
IX	にぶい黄褐色土	粘性あり
X	褐色土	礫を含む 地山

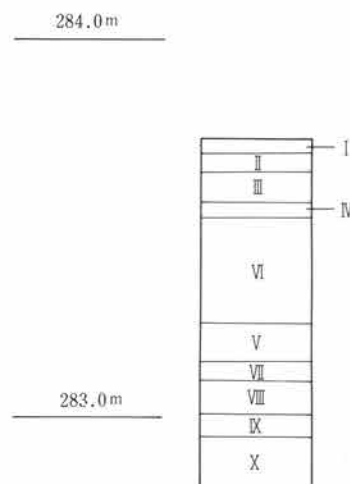


図43 基本層序図

4 調査概要

本調査は、着手当初、遺構確認のためのトレンチ調査を実施し、As-A層が散見されることからAs-A層直下の水田跡の検出を予想した。だが、As-A層の良好な堆積は調査区南半のみであり、かつ、後の水流の影響を大きく受けているため、良好なAs-A直下水田を検出するにはいたらなかった。また、溝を検出したが、性格は不明である。調査区北半では、水田を開くために棚田状に地形改変を行ったことを示す石列・石

垣・溝などが検出された。

また、近世以前の地形は、調査区中央部にやや東に彎曲して南流する沢があり、この沢の覆土にはAs-B層の二次的堆積と見られる砂質土層があり、中世に埋もれた沢であると考えられ、開田の時期は近世以降であると思われる。この沢の上流部分では登窯1基を検出した。

また、調査区西側でも沢が検出され、ここでは須恵器片が出土した。なお、調査区の東と西で検出された沢には多くの流木が含まれていた。

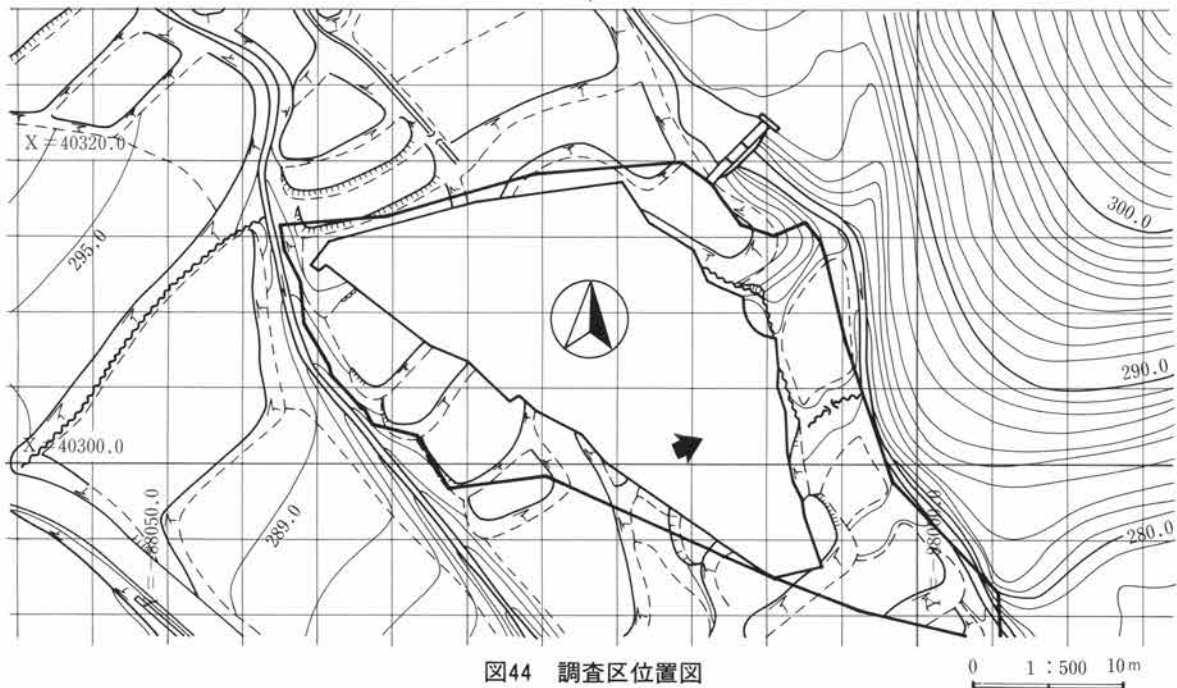


図44 調査区位置図

5 検出遺構

(1) 溝

1号溝 (図46・P L11)

【確認長】5.1m 【確認幅】(上幅)1.0m(下幅)0.9m 【走行方向・傾斜】ほぼ南北方向・北から南への下り勾配 【覆土】As-Bを含む暗褐色砂質土 【出土遺物】なし 【他遺構との新旧関係】3号溝→1号溝

2号溝 (図46・P L11)

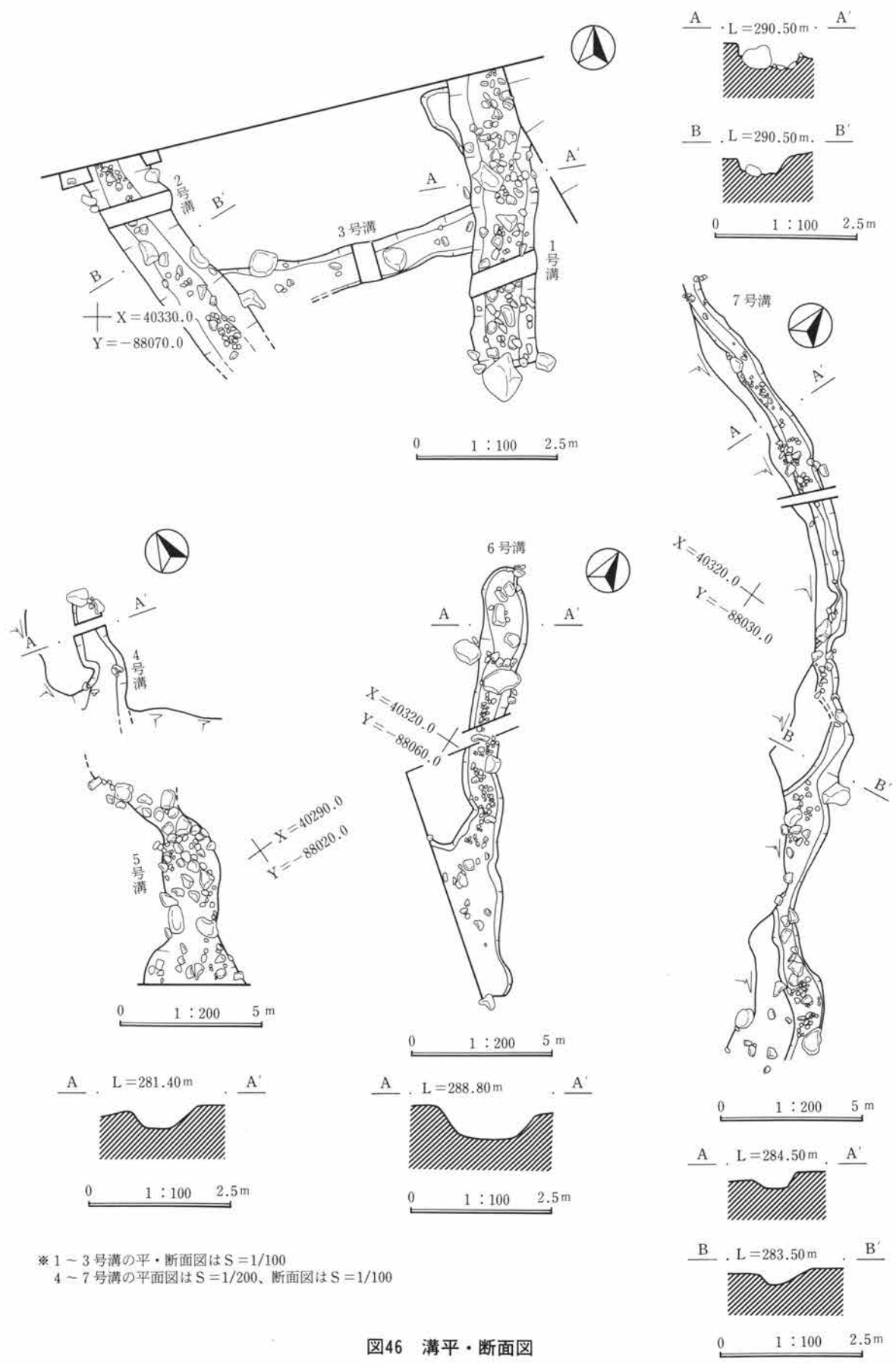
【確認長】4.2m 【確認幅】(上幅)0.9m(下幅)0.6m 【走行方向・傾斜】ほぼ南北方向・北から南への下り勾配 【覆土】As-Bを含む暗褐色砂質土が主体 【出土遺物】なし 【他遺構との新旧関係】3号溝→2号溝

3号溝 (図46・P L11)

【確認長】4.4m 【確認幅】(上幅)0.7m(下幅)0.6m 【走行方向・傾斜】ほぼ東西方向・ほぼ平坦 【覆土】As-Bを含む暗褐色砂質土 【出土遺物】なし 【他遺構との新旧関係】3号溝→1・2号溝



図45 調査区全体図



※ 1～3号溝の平・断面図はS=1/100
 4～7号溝の平面図はS=1/200、断面図はS=1/100

図46 溝平・断面図

4号溝 (図46・P L11)

【確認長】4.3m 【確認幅】(上幅)1.0m (下幅)0.4m 【走行方向・傾斜】ほぼ南北方向・北から南への下り勾配 【覆土】As-A・As-Bを含む茶褐色砂質土 【出土遺物】なし 【他遺構との新旧関係】5号溝と連続する可能性高い

5号溝 (図46・P L11)

【確認長】7.5m 【確認幅】(上幅)1.1~2.0m (下幅)0.4~1.2m 【走行方向・傾斜】ほぼ南北方向・北から南への下り勾配 【覆土】As-A・As-Bを含む暗褐色砂質土 【出土遺物】なし 【他遺構との新旧関係】4号溝と連続する可能性高い

6号溝 (図46・P L11)

【確認長】15.0m 【確認幅】(上幅)1.3~2.4m (下幅)0.5~1.1m 【走行方向・傾斜】北西~南東方向・北西から南東への下り勾配 【覆土】As-Bを含む暗褐色砂質土が主体 【出土遺物】なし 【他遺構との新旧関係】1号溝と連続する可能性がある

7号溝 (図46・P L11)

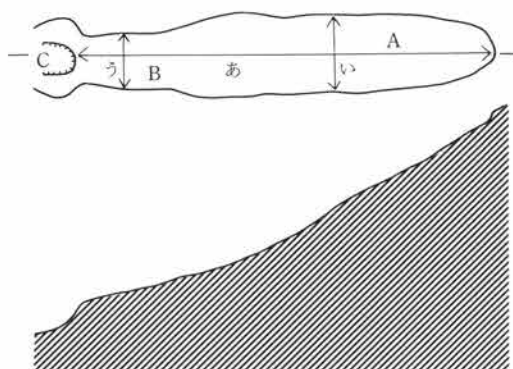
【確認長】28.2m 【確認幅】(上幅)0.6~1.2m (下幅)0.1~0.8m 【走行方向・傾斜】北西~南東方向に弧状に走行・北西から南東への下り勾配 【覆土】As-A・As-Bを含む暗褐色砂質土が主体 【出土遺物】なし

(2) 水田(?) (図48・P L10)

調査区内でのAs-A層の堆積状況が良くなく、その直下の水田遺構は明確には検出されなかった。しかし、調査区北半では、水田を開くために棚田状に地形改変を行ったことを示す石列・石垣・溝などが検出された。さらに、プラント・オパール分析・花粉分析・火山灰同定の自然科学分析によって水田の存在とその時期についての成果が得られたことから、As-A下水田が存在した可能性は高く、検出された棚田状の地形は水田造成に起因するものと考えられる。

(3) 登窯 (図49・P L12)

調査区北東部、沢筋から尾根にかかる部分で検出された。南西斜面を利用して構築されたものと考えられる。平面形状は隅丸長方形である。規模は窯体確認全長 5.75m、焼成部幅 1.10m、焼成部(推定)0.72mである。焼成部の側壁や奥壁は強く焼土化、硬化している。焼成部内では炭化物が埋土中に見られるほかは出土遺物は皆無である。近接する沢に削平されており、前庭部、灰原は確認できなかった。窯跡周辺の沢埋土より須恵器片が出土しているが、登窯との関係は不明確である。帰属時期はAs-B降下以前であり、周辺からの出土須恵器が関連するとなれば、平安時代須恵窯跡の可能性も推測できる。



A. 焼成部 B. 燃焼部 C. 灰原
あ. 窯体全長 い. 焼成部幅 う. 燃焼部幅

図47 登窯計測ポイント図

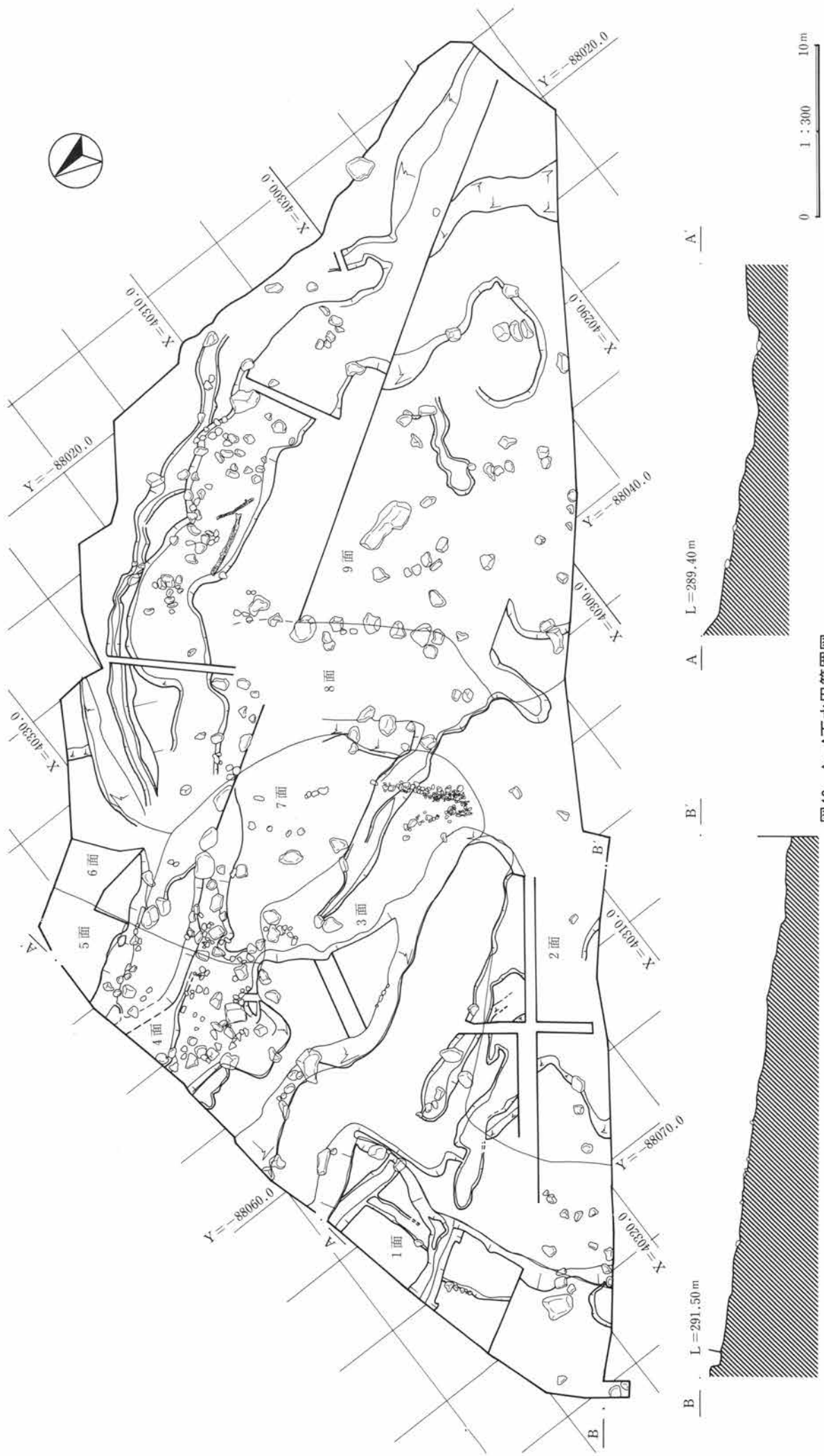
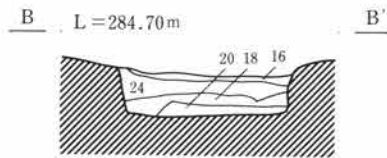
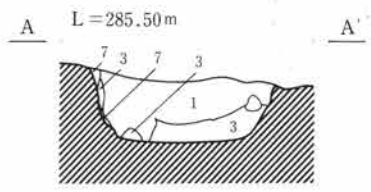
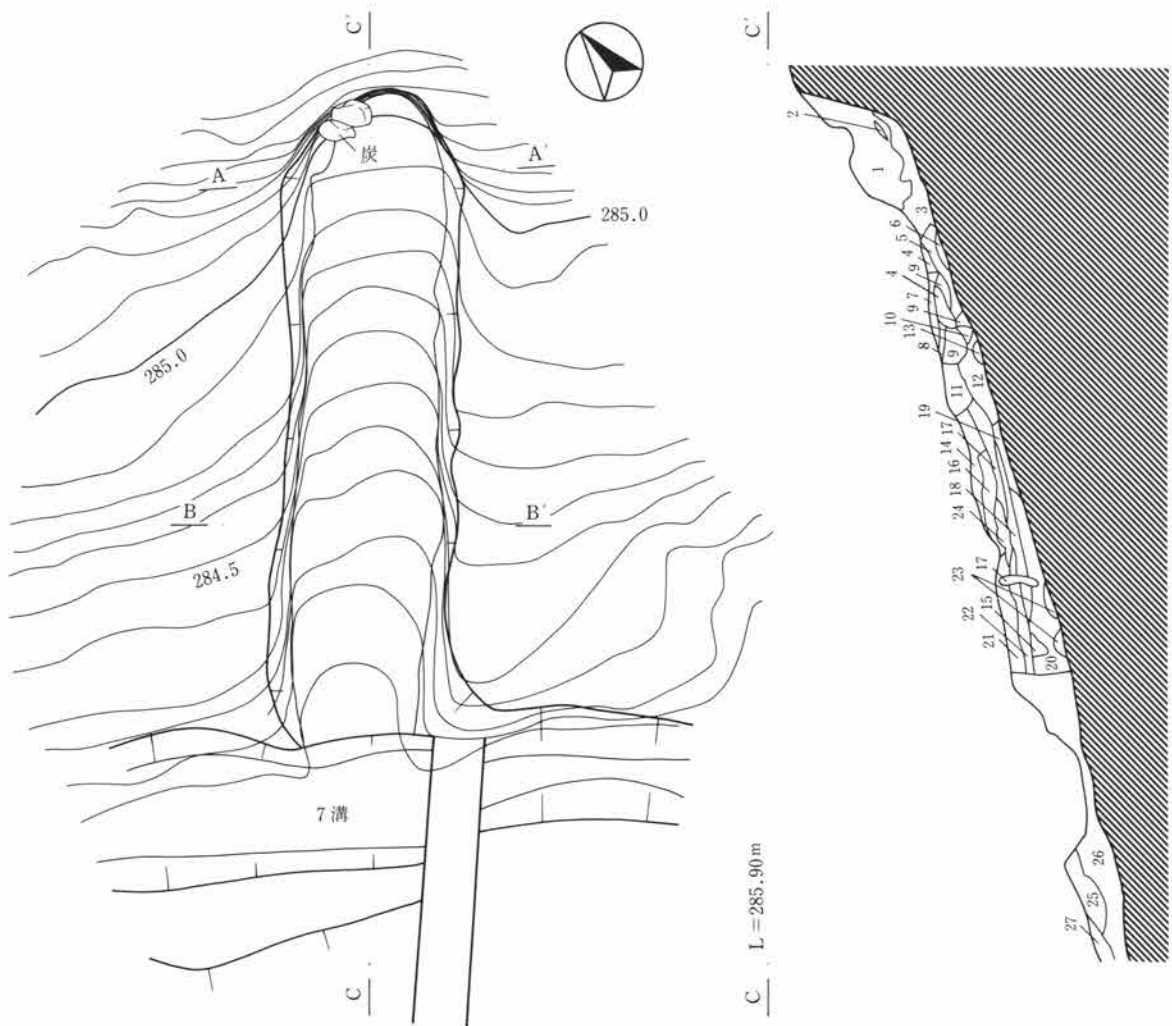


図48 AS-A下水田範囲図



- 1 黄褐色土 小礫を少し含む。焼土・炭化材を含む
- 2 黄橙色粘土ブロック
- 3 黒褐色土 焼土・炭化材を僅かに含む
- 4 明黄橙色土 炭化材を多く含む
- 5 赤褐色土 焼土を多く含む。炭化材を僅かに含む
- 6 黒褐色土 粘性あり。焼土・炭化材を僅かに含む
- 7 明黄褐色土 しまり強い。粘質ブロックが主体
- 8 黄橙色粘土ブロック 焼土含む
- 9 暗褐色土 炭化材多く含む
- 10 黒褐色土 焼土・炭化材多く含む
- 11 明褐色土 焼土・炭化材を僅かに含む
- 12 黒褐色土 灰色粘土を含む
- 13 暗茶褐色粘土
- 14 明褐色土 しまり強い。焼土・炭化材多く含む
- 15 明赤褐色土 硬い焼土ブロック
- 16 黒褐色土 焼土・灰色粘土を含む
- 17 暗褐色土 焼土・炭化材・黄橙色ブロックを含む
- 18 暗赤褐色土 焼土多く含む
- 19 暗褐色土 炭化材・黄橙色粘土ブロックを僅かに含む
- 20 暗赤褐色土 焼土・炭化材多く含む
- 21 灰黄褐色土 しまり強い。炭化材・焼土多く含む
- 22 黒褐色土 炭化材・焼土ブロック含む
- 23 黄橙色土 粘性あり。焼土・炭化物を僅かに含む
- 24 黒褐色土 しまり強い。焼土・炭化物を含む
- 25 黒褐色土 鉄分を多く含む。白色軽石細粒 (As-AかBかは不明) を含む
- 26 褐色土 炭化物を含む。白色軽石細粒 (As-AかBかは不明) を多く含む
- 27 暗褐色土 拳大の礫を含む。砂礫層

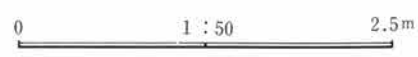


図49 登窯平・断面図

図版No P L No	器種 種別	出土 位置	①残存 ②法量 ③形態の特徴 ④手法の特徴 ⑤胎土 ⑥色調 ⑦備考
50-1 P L 13	坏 須恵器	基本 第VII層	①口縁～体部：50% 底部：40% ②口縁部径：13.4cm (推定) 底部径：6.5cm (推定) 器高：3.9cm ③口縁～体部：直線的外斜 底部：平底・やや造りだし ④口縁～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り後ナデ ⑤やや粗・径1～3mmの砂粒を含む ⑥灰白色
50-2 P L 無	坏 須恵器	基本 第VII層	①体部：5% 底部：50% ②底部径：8.0cm ③底部：平底・中央部分やや上げ底 ④体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤やや粗・径1～3mmの黒色の夾雑物を多く含む ⑥暗青灰色
50-3 P L 無	坏 須恵器	基本 第VII層	①体部：5% 底部：20% ②底部径：6.4cm ③底部：平底 ④体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤密・径1mmの砂粒を僅かに含む ⑥暗灰色
50-4 P L 無	坏 須恵器	基本 第VII層	①体部：5% 底部：20% ②底部径：9.4cm ③底部：平底 ④体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤密・径1mmの砂粒・白色粒子を僅かに含む ⑥暗灰色
50-5 P L 13	高台坏 須恵器	基本 第VII層	①口縁～体部：20% 底部：40% 台部：60% ②口縁部径：15.0cm(推定) 底部径：11.0cm 台部径：10.2cm 器高：3.7cm ③口縁～体部：短く、直線的外斜 底部：高台付 台部：短く、断面箱形 ④口縁～体部：轆轤成形 底部：回転篋切り 高台：貼り付け⑤密・径1mmの砂粒を僅かに含む ⑥暗灰色
50-6 P L 13	高台坏 須恵器	基本 第VII層	①体部：5%以下 底部：100% 台部：100% ②底部径：8.0cm 台部径：8.7cm ③底部：平底 台部：短く、僅かに外斜 ④体部：轆轤成形 底部：回転篋切り 台部：貼り付け⑤密・径1mmの砂粒・白色粒子を含む ⑥暗青灰色
50-7 P L 無	坏 蓋 須恵器	基本 第VII層	①つまみ：50% 天井部：10% ②つまみ径：6.6cm つまみ高：0.3cm ③つまみ：大きく、偏平 ④つまみ：貼り付け 天井部：轆轤成形 ⑤やや密・径1mmの砂粒・白色粒子を僅かに含む ⑥暗青灰色
50-8 P L 13	坏 蓋 須恵器	基本 第VII層	①つまみ：30% 天井～口縁部：30% ②つまみ径：6.6cm (推定) 口縁部径：16.8cm (推定) つまみ高：0.4cm 器高：2.1cm ③つまみ：大きく、偏平 天井部：偏平 かえり：短く、断面三角形 ④つまみ：貼り付け 天井～口縁部：轆轤成形 ⑤やや密・径1mmの砂粒・白色粒子を僅かに含む ⑥暗灰色
50-9 P L 13	壺 須恵器	基本 第VII層	①口縁～頸部：20% 体部：10% ②不明 ③口縁部：短く、やや外斜 体部：上位に最大径 ④口縁～体部：轆轤成形 ⑤やや密・径1mmの砂粒を僅かに含む ⑥黄灰色

図版No P L No	種類	出土 位置	①釉/焼成 ②器形 ③備考
50-10 P L 13	磁器	7号溝 覆土	①染付 ②皿 ③形紙摺、17世紀～18世紀前、肥前
50-11 P L 13	磁器	沢覆土	①染付 ②碗 ③雪輪草花文?、18世紀中～末、肥前
50-12 P L 13	磁器	表探	①染付 ②碗 ③雪輪草花文?、18世紀中～末、肥前
50-13 P L 13	磁器	沢覆土	①染付 ②碗 ③18世紀後～19世紀初、肥前?
50-14 P L 13	陶器	表探	①灰釉 ②片口 ③19世紀前半、瀬戸・美濃
50-15 P L 13	陶器	7号溝 覆土	①陶胎染付 ②碗 ③18世紀前、肥前
50-16 P L 13	陶器	表探	①灰釉 ②練鉢 ③18世紀、瀬戸・美濃
50-17 P L 13	陶器	表探	①陶胎染付 ②碗 ③18世紀前、肥前
50-18 P L 13	陶器	表探	①焼締 ②摺鉢 ③18世紀末～19世紀前、堺か明石
50-19 P L 13	磁器	沢覆土	①染付 ②広東碗 ③18世紀後～19世紀前、波佐見

表13 東上秋間神水遺跡遺物観察表

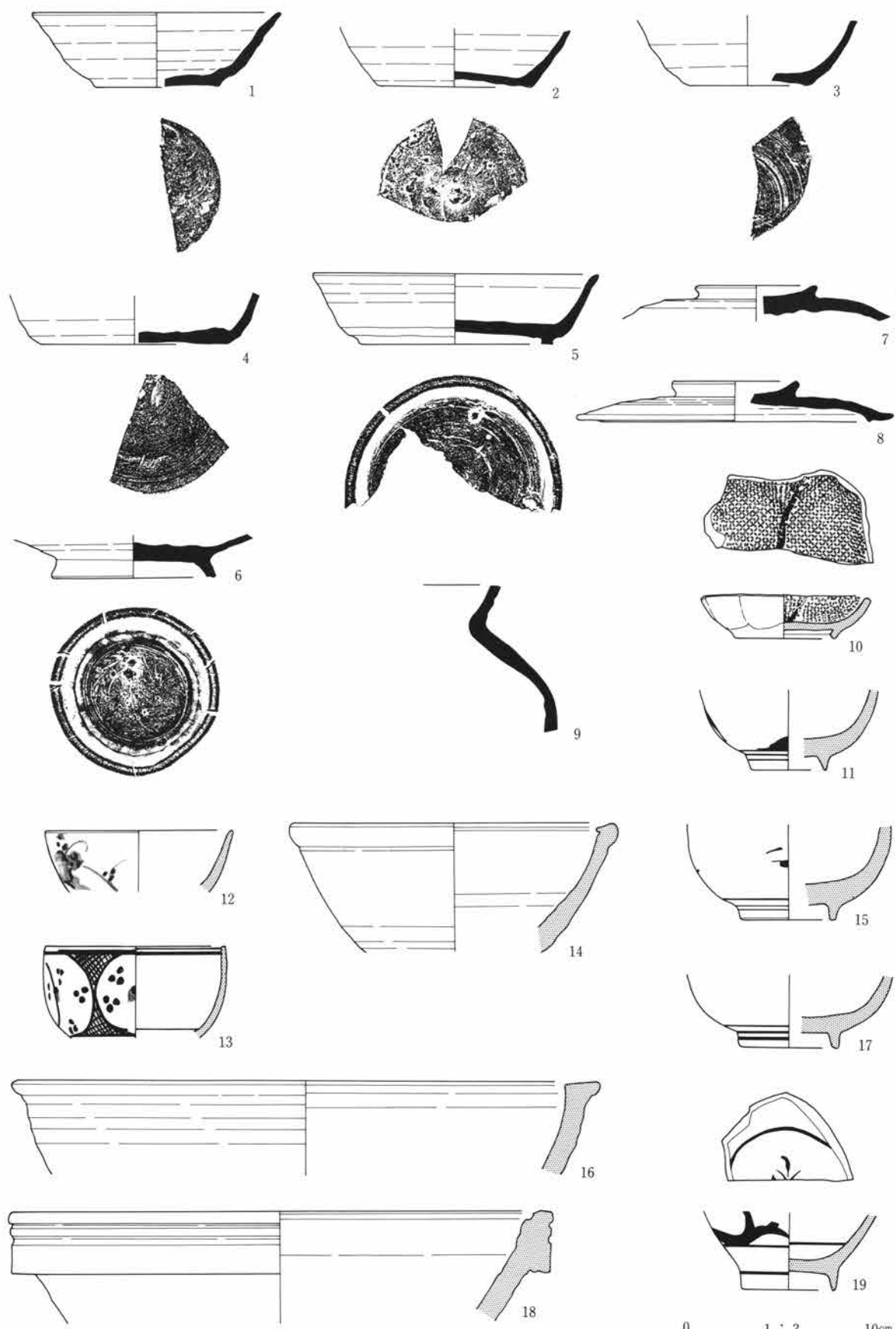


图50 出土遗物实测图

6 自然科学分析

古環境研究所

(I) 野外地質調査およびテフラ検出分析

1. 分析の目的

東上秋間神水遺跡の発掘調査では、多くのテフラが検出された。ここでは、野外地質調査の結果明らかになったテフラの層位を述べるとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラとの同定を行う。

調査の対象とした地点は、第1～3地点の3地点である。

2. 層序

(1) 第1地点

地質層序を、柱状図にして図51に示す。ここでは、黒灰色の腐植質シルト層の上位に、砂層および土壌の堆積が認められた。砂層の中に2層準、土壌の中に1層準の合計3層準にテフラが認められた。これらのうち、上位のテフラ(試料番号1)は、土壌中に濃集する黄白色軽石である。また中位のテフラ(試料番号2)は、層厚2cmの青灰色細粒火山灰層である。最下位のテフラ(試料番号3)は、砂層中に混在する淡褐色軽石である。

(2) 第2地点

地質層序を、柱状図にして図52に示す。ここでは、砂層を挟む黒灰色シルト層の上位に、層厚115cmの地すべり堆積物が認められた。この地すべり堆積物の直下で砂層の上位にある黒灰色シルト層(試料番号1)には、白色軽石が認められた。

(3) 第3地点

地質層序を、柱状図にして図53に示す。ここでは、砂質シルト層の上位に軽石を含む黒褐色腐植質シルト層(試料番号2)、そして層厚8cmの淡褐色軽石層(試料番号1)が認められた。

3. テフラ検出分析

(1) 分析方法

3地点で検出されたテフラ試料6点について、示標テフラとの同定を行うためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は、以下の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により、泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡により、テフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

分析結果を、表14に示す。第1地点の試料番号1には、最大径7.2mmの白色軽石が多く含まれている。軽石

の発泡はよい。この軽石は、その特徴から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、新井、1979）に同定される。試料番号2には、淡褐色軽石が含まれている。軽石の最大径は4.9mmで、発泡は比較的よい。このテフラは、層相および含まれる軽石の特徴から、浅間火山起源の浅間-粕川テフラ（As-Kk、早田、1991）に同定される。As-Kkの噴出年代はまだ明らかにされていないものの、後述する浅間Bテフラに層位的にごく近いことから、1108（天仁元）年にかなり近い年代と推定される。試料番号3には、最大径6.8mmの淡褐色軽石が多く認められる。軽石の発泡は、比較的よい。この軽石は、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に由来するものと考えられる。

第2地点の試料番号1には、最大径5.9mmの白色軽石が含まれている。軽石は、よく発泡している。この軽石は、その特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（新井、1979、石川ほか、1979）に由来するものと考えられる。As-Bに由来する軽石は認められないことから、第2地点で認められる地すべりの発生年代は、4世紀中葉以降で1108（天仁元）年以前と推定される。

第3地点の試料番号1には、最大径4.7mmの淡褐色軽石が多く認められる。淡褐色軽石は、よく発泡している。このテフラは、その特徴からAs-Bに同定される。試料番号2には、最大径5.9mmの白色軽石が認められる。軽石はよく発泡している。この軽石は、その特徴からAs-Cに由来するものと考えられる。

4. 小結

東上秋間神水遺跡において野外地質調査とテフラ検出分析を行ったところ、下位より浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間-粕川テフラ（As-Kk、噴出年代不明）、浅間A軽石（As-A、1783年）の4層のテフラが検出された。また第2地点では、4世紀中葉以降、1108（天仁元）年以前に発生したと考えられる地すべり堆積物が検出された。

参考文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、No157、p.41-52。
 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一（1979）火山堆積物と遺跡Ⅰ。考古学ジャーナル、No157、p.3-40。
 早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち。佐久考古通信、No53、p.2-7。

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径(mm)	テフラ
1	1	+++	白	7.2	As-A
1	2	++	淡褐	4.9	As-Kk
1	3	+++	淡褐	6.8	As-B
2	1	++	白	5.9	As-C
3	1	+++	淡褐	4.7	As-B
3	2	++	白	5.9	As-C

++++：とくに多い、+++：多い、++：中程度、+：少ない、-：認められない。

表14 東上秋間神水遺跡のテフラ検出分析結果

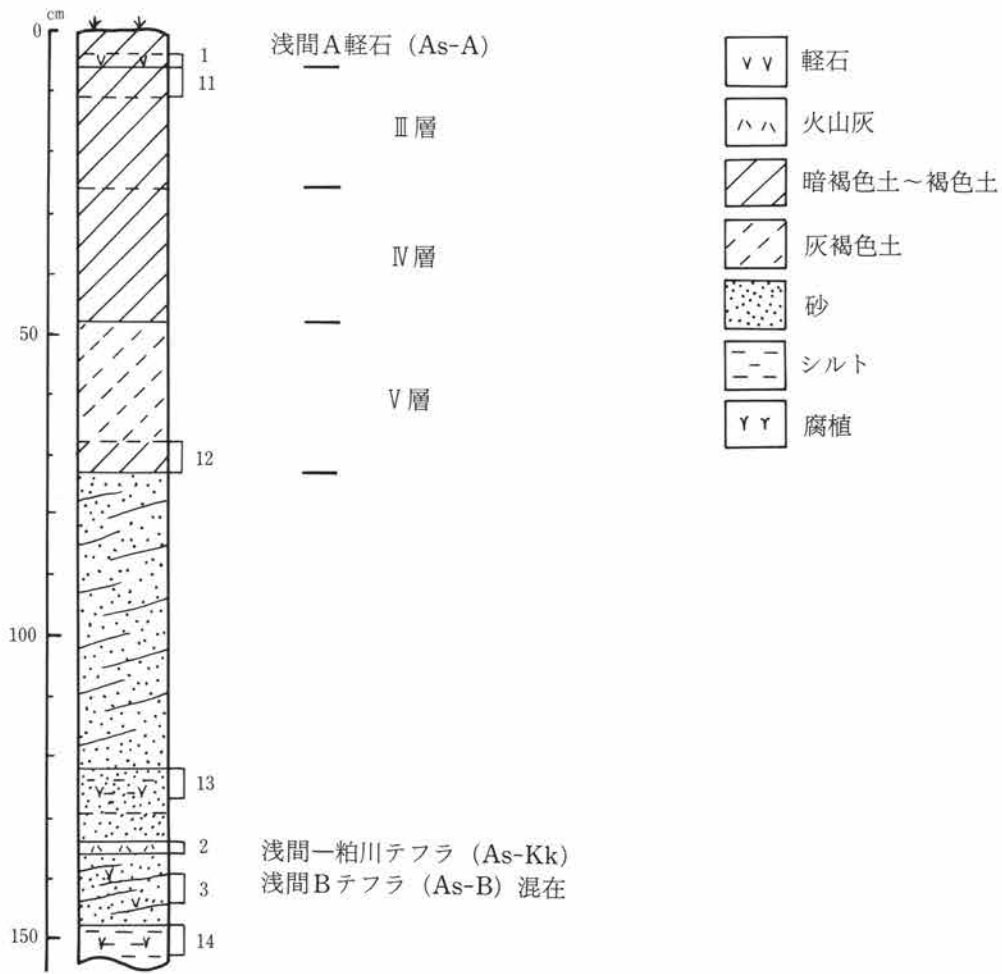


図51 東上秋間神水遺跡第1地点の地質柱状図

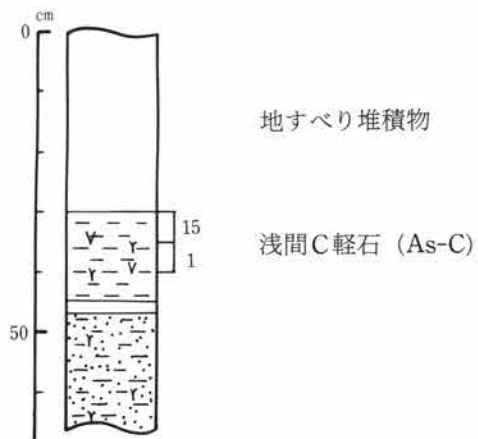


図52 東上秋間神水遺跡
第2地点の地質柱状図

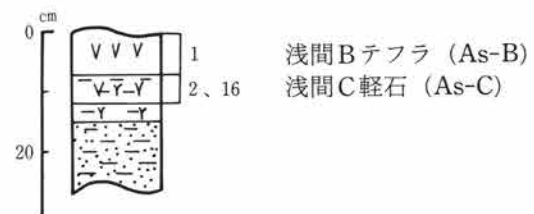


図53 東上秋間神水遺跡
第3地点の地質柱状図

(II) プラント・オパール分析

1. 試料および方法

第1地点から試料No11～No14、第2地点からNo15、第3地点からNo16の計6試料が採取された。採取層準についてはテフラ分析の項を参照されたい。

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μ m、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

2. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表15、表16および図54に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

3. 考察

(1) 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

第1地点では、試料No11～No14について分析を行った。その結果、No11（As-A層直下）からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は5,500個/gと高い値である。したがって、同層準で

稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の試料からはイネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。

なお、試料No14 (As-B直下) ではキビ族が検出された。同族にはヒエやアワ、キビなどが含まれるが、現時点ではプラント・オパールの形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も900個/gと低い値であることから、ここでヒエやアワなどが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

第2地点では試料No15、第3地点では試料No16について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) 古環境の推定

タケ亜科(ネザサ節)やウシクサ族(ススキ属など)は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシ属は比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

As-B直下層およびAs-C混層では、おおむねヨシ属が卓越しており、タケ亜科やウシクサ族は比較的少量である(表16)。このことから、これらの層準の堆積当時はヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったものと推定される。

4. まとめ

以上のことから、本遺跡ではAs-A直下層で稲作が行われていたものと判断された。なお、それよりも下層では稲作の可能性は認められなかった。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志, 1987, 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析, 赤山-古環境編一, 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志, 1988, 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追究のための基礎資料として-, 考古学と自然科学, 20: 81-92.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志, 1979, プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定-, 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田鴨の探査-, 考古学と自然科学, 17: 73-85.

分類群	(単位: ×100個/g)					
	11	12	13	14	15	16
イネ	55					
ヨシ属	9			57	208	8
ウシクサ族(ススキ属など)	82	89	25	76	45	34
キビ族(ヒエ属など)				9		
タケ亜科	202	65	16	105	72	43

表15 東上秋間神水遺跡におけるプラント・オパール分析結果

(単位: kg/m²・cm)

分類群	11	12	13	14	15	16
イネ	1.97					
ヨシ属	0.76			4.30	10.90	0.60
ウシクサ族 (ススキ属など)	1.24	1.39	0.36	1.03	0.42	0.46
キビ族 (ヒエ属など)						
タケ亜科	1.19	0.39	0.09	0.55	0.26	0.22

表16 東上秋間神水遺跡におけるおもな植物の推定生産量

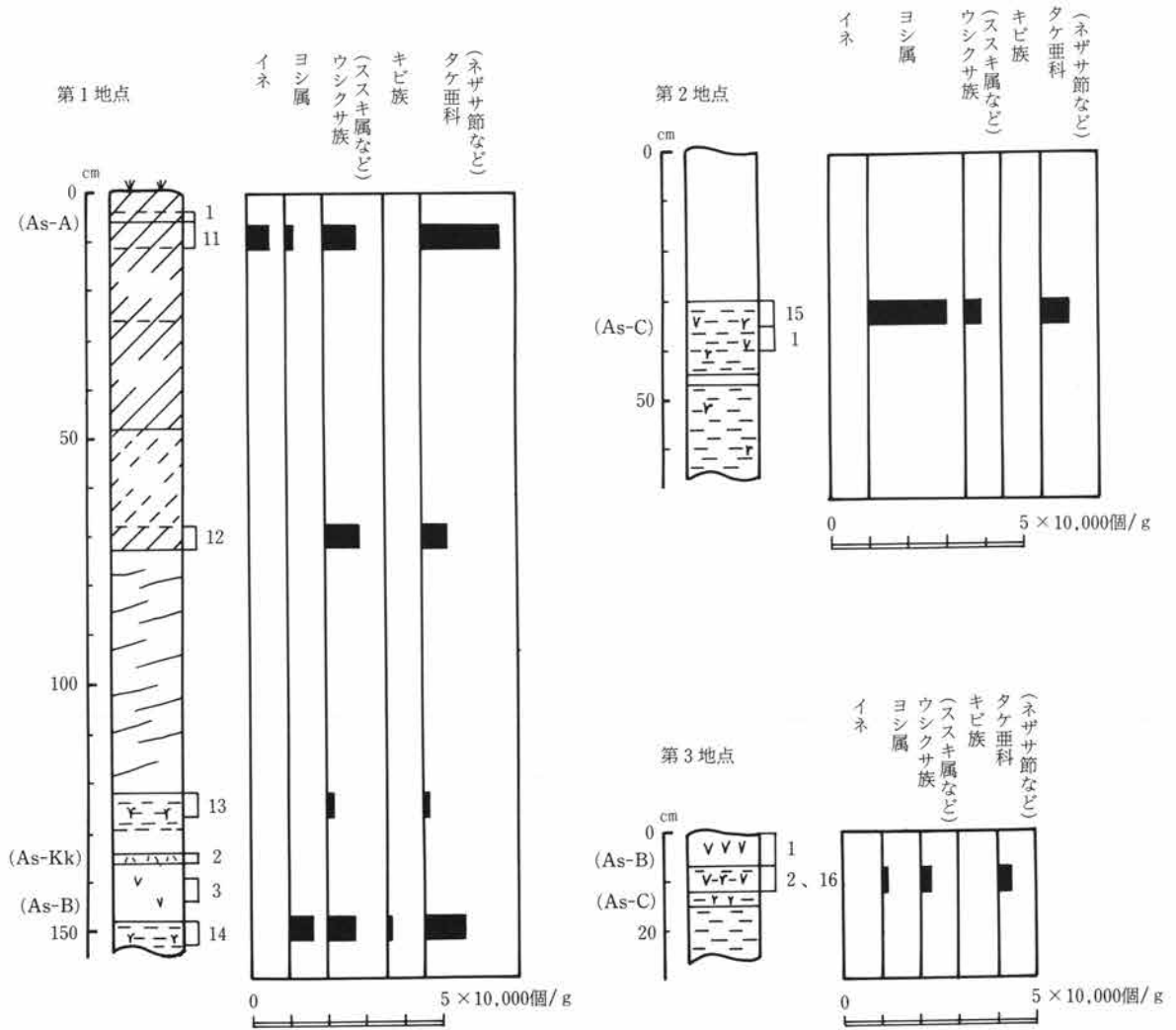


図54 東上秋間神水遺跡におけるプラント・オパール分析結果

VIII ま と め

5遺跡からなる「東上秋間遺跡群」がある秋間地区は古代窯業跡を中心として、遺跡数・遺物量はかなり多いと考えられるが、発掘調査事例はそれに比して少ない。そうした点では、本遺跡群の調査報告は遺跡としては小規模ではあるものの、当該地域の歴史的様相を窺う上での一資料となり得るものと考えても差し支えないと言えよう。

以下、調査結果に基づき、いくつかの点についてまとめる。

《窯業関連遺構について》

本遺跡群は秋間遺跡群内に位置することから、調査以前より、須恵器および瓦の窯跡が検出されることが予想された。しかし、調査結果では、良好な窯跡は検出されなかった。僅かに、東上秋間神水遺跡で登窯跡の残骸の一部が検出されたのみであった。この帰属時期は、出土遺物が皆無であるため特定できないが、As-B以前であり、周辺の窯跡の状況を含めると、平安時代の可能性も考えられる。

《炭焼窯遺構について》

中秋間甲木ノ巣谷津 I 遺跡と東上秋間笹田遺跡で各 1 基、計 2 基が検出された。

中秋間甲木ノ巣谷津 I 遺跡のものは、土窯である。後世の削平によって、残存状況は必ずしも良好とは言えないが、構造的には天井と焚口前庭が未検出である以外は概ね把握できる。帰属時期は遺物が皆無であるものの、As-A 以前であることから、近世前半～中頃と考えておきたい。

東上秋間笹田遺跡のものは、石窯である。残存状況はかなり良好である。天井は未検出であった。平面無花果形で、炭化室から前庭部に至るまで、底面には石敷が良好に残存していた。煙道は奥壁部に 1 カ所存在が確認された。石窯には煙道が複数個つくものもあるが、この残存状況から考えれば、複数個つくものとは考えがたい。帰属時期は遺物が皆無であるものの、掘り方側壁での As-A の堆積層の存在から As-A 降下以降、さらに窯の形態的特徴から、近世後半～近代と考えておきたい。

《生産遺構について》

中秋間中島遺跡では As-A、As-B の良好な堆積層が残り、その除去により、特に As-B 直下の旧地表面が検出された。この旧地表面からは畦畔や水路等の水田遺構と認識できる明確な遺構や、畝等の畝遺構と認識できる明確な遺構は検出されなかった。しかし、土層断面において、各テフラ直下の土壌のプラント・オパール分析を実施した結果、As-A 下ではその密度が 10,000 個/g 以上であり、上層からの混入がないことを前提とすれば、水田である可能性が極めて高い。また、As-B 下ではその密度が 3,400～4,700 個/g あり、水田の可能性が考えられる。調査面積が約 1,000m² と狭いため、生産遺構としての認識は不明確であったが、プラント・オパール分析によって、水田遺構としての性格を推し量ることができる。

東上秋間神水遺跡では、周辺状況や調査対象地域の地形的特徴において棚田状の水田が想定できた。テフラの残存は、部分的には残存するものの、全域に堆積している状況ではないため、旧地表面の面的な検出はなされなかった。しかし、プラント・オパール分析によって、As-A 下ではその密度が約 5,500 個/g あり、上層からの混入がないことを前提とすれば、水田である可能性が高い。As-B 下ではプラント・オパールは

検出されず、水田の可能性は極めて低い。

上記2遺跡の場合、いずれも遺構として認定材料が未検出であるものの、自然科学分析によって、その性格を判断するに至った。こうした手続きによる、遺構の性格認定がどの程度有効かについては意見が分かれるであろう。しかし、こうした狭い調査面積の遺跡の場合は、面的な認識が困難なことが多いため、自然科学分析のデータを積極的に活用することも、有効かつ必要であるといえよう。

付編 東上秋間遺跡群周辺の表採遺物

東上秋間遺跡群は秋間丘陵に位置し、この丘陵内には「秋間古窯跡群」が存在している。この古窯跡は面積では群馬県内最大であり、確認及び確実視されている窯体は約50支群になる。また、これらの窯の操業期間は7世紀後半から9世紀と考えられており、群馬県内でも古段階に位置づけられる。

こうした環境にあるものの、「東上秋間遺跡群」の調査範囲内では、東上秋間神水遺跡で小規模の残骸の一部を1基調査したのみであった。

しかし、東上秋間遺跡群周辺において、多数の遺物が表採されたので、ここではその遺物について一部実測掲載する。

表採地区は、大字中秋間字甲蛇喰・乙蛇喰、大字中秋間字三角谷津、大字下秋間字日向の3カ所に分かれた(図55)。いずれも隣接しており、日向川の流域にある。「蛇喰」は右岸、「日向」「三角谷津」は左岸の斜面にある。周辺の状況を窺うと、窯業遺跡として、苧稻遺跡(安中市遺跡番号129、以下数字のみ表示)、八重巻遺跡(252・253)が存在するほか、下秋間では川久保・万福・立石(220)、熊野谷津(231)、覚院坊(232・234・235)、明後沢(240)、七曲り・台(241)、東谷津(255)、道ノ入(257・258)、一台堂・広田(264)で須恵窯跡、瓦窯跡が確認されており、この古窯跡群の中でも特に窯跡の集中している一角と考えられる。

遺物は、須恵器が中心であるが、縄文土器片、石器片等も含まれており、この地域の歴史的環境を知る上でも参考になる資料となり得るものといえる。

参考文献 安中市教育委員会 1992 「安中市の遺跡—市内遺跡詳細分布調査報告書—」
群馬県史編纂委員会 1993 「群馬県史 通史編2」



図55 東上秋間遺跡群周辺遺物表面採集地点

(1) 蛇喰地区表面採集遺物について

ここで掲載した遺物は、安中市大字中秋間字甲蛇喰および字乙蛇喰で表面採集された遺物である。

表面採集遺物はコンテナにして3箱であり、その95%以上が須恵器(22,620g)であった。須恵器はその多くが小片であり、実測可能な遺物を選定し、実測掲載をした。器種は坏・甕が主体である。帰属時期は9世紀前～中頃を主体としている。

その他、陶器片・瓦片を表面採集した。陶器の器種は鉢・碗類である。帰属時期は18世紀後半から19世紀前半にかけてのものである。実測図の掲載はしなかった。

図版No P L No	器種 種別	①残存 ②法量 ③形態の特徴 ④手法の特徴 ⑤色調 ⑥備考
56-1 P L 14	坏 須恵器	①口～体部：40% 底部：40% ②口縁部径：11.9cm(推定) 底径：8.0cm(推定) 器高：3.7cm ③口～体部：やや内彎気味に外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤灰色 断面セピア色
56-2 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：20% 底部：10% ②口縁部径：13.2cm(推定) 底径：8.0cm(推定) 器高：3.7cm ③口～体部：外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤灰白色
56-3 P L 14	坏 須恵器	①口～体部：30% 底部20% ②口縁部径：12.2cm(推定) 底径：7.8cm(推定) 器高：3.8cm ③口～体部：外斜、中に稜をもち、口唇部で強く外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤暗灰色
56-4 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：20% 底部：5% ②口縁部径：12.8cm(推定) 底径：7.3cm(推定) 器高：3.1cm ③口～体部：外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤灰白色 断面セピア色 ⑥焼成時の歪みあり
56-5 P L 14	坏 須恵器	①口～体部：20% 底部：50% ②口縁部径：12.0cm(推定) 底径：8.0cm 器高：3.1cm ③口～体部：外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤黄灰色 ⑥外面に自然釉付着
56-6 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：10% 底部：20% ②口縁部径：12.7cm(推定) 底径：7.2cm(推定) 器高：3.3cm ③口～体部：やや内彎気味に外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤灰白色
56-7 P L 無	高台坏 須恵器	①口～体部：5% 底部15% ②口縁部径：13.4cm(推定) 底径：8.4cm(推定) 器高：3.3cm ③口～体部：外斜 底部：平底、やや作り出し ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り後、ナデ ⑤灰色 ⑥内外面に自然釉
56-8 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：10% 底部：0% ②口縁部径：17.4cm(推定) ③口～体部：やや内彎気味に外斜 ④口～体部：轆轤成形 ⑤灰白色
56-9 P L 無	高台坏 須恵器	①口～体部：20% 底部：～5% ②口縁部径：16.2cm(推定) ③口～体部：外斜 底部：高台付き ④口～体部：轆轤成形 底部：貼り付け高台 ⑤灰白色
56-10 P L 無	高台坏 須恵器	①口～体部：～5% 底部：40% ②底径：7.2cm(推定) ③底部：平底、高台は短くやや外斜 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り後、高台貼り付け ⑤暗灰色 ⑥内外面に自然釉付着
56-11 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：～5% 底部80% ③口～体部：外斜? 底部：高台付き ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤灰色 ⑥内外面に自然釉付着
56-12 P L 14	高台坏 須恵器	①口～体部：5% 底部：15% ②底径：8.0cm(推定) ③口～体部：外斜? 底部：高台付き、高台は断面三角形、やや外斜 ④口～体部：轆轤成形 底部：高台貼り付け後、ナデ ⑤灰白色
56-13 P L 無	皿 須恵器	①口～体部：5% 底部：～5% ②底径：10.2cm(推定) ③口～体部：浅く、大きく外斜 底部：高台付き、高台は僅かに外斜気味に直立 断面三角形 ④口～体部：轆轤成形 底部：高台貼り付け ⑤灰白色
56-14 P L 14	皿 須恵器	①口～体部：15% 底部：5% ②口縁部径：16.2cm(推定) 底径：9.0cm(推定) 器高：3.7cm ③口～体部：外斜 底部：高台付き 高台は僅かに外斜 断面三角形 ④口～体部：轆轤成形 底部：高台貼り付け ⑤灰白色
56-15 P L 14	坏 蓋 須恵器	①つまみ：100% 天井部15% ②つまみ径：3.8cm つまみ高：0.7cm ③つまみ：大きく、やや扁平 天井部：扁平 ④つまみ：貼り付け 天井部：轆轤成形 ⑤灰白色
56-16 P L 無	坏 蓋 須恵器	①つまみ：0% 天井～口縁部：20% ②口縁部径：17.5cm(推定) ③天井部：扁平 かえり：短く、やや内斜 ④天井～口縁部：轆轤成形 ⑤灰白色
56-17 P L 14	甕 須恵器	①口縁部：10% 体～底部：0% ②口縁部径：27.2cm(推定) ③口縁部：やや直立気味に外斜 口唇部は折り返し ④口縁部：輪積み成形後、ヨコナデ 外面に波状文を施す 口唇部外面はヨコナデ、面取り ⑤暗青灰色 ⑥自然釉付着
56-18 P L 無	瓶 須恵器	①口縁部：15% 体～底部：0% ②口縁部径：13.2cm(推定) ③口縁部：外彎気味に外斜 口唇部は折り返し ④口縁部：輪積み成形後、ヨコナデ 口唇部外面はヨコナデ、面取り ⑤暗灰色
56-19 P L 無	甕 須恵器	①口縁部：0% 体部：～5% 底部：0% ④輪積み成形後、タタキ(外面は平行文、内面は青海波文の当て具を使用) ⑤灰色
56-20 P L 無	甕 須恵器	①口縁部：0% 体部：～5% 底部：0% ④輪積み成形後、タタキ 内面のみタタキ後、ナデ(外面は平行文のタタキ具を使用 内面は不明) ⑤灰色

表17 蛇喰地区表面採集遺物観察表

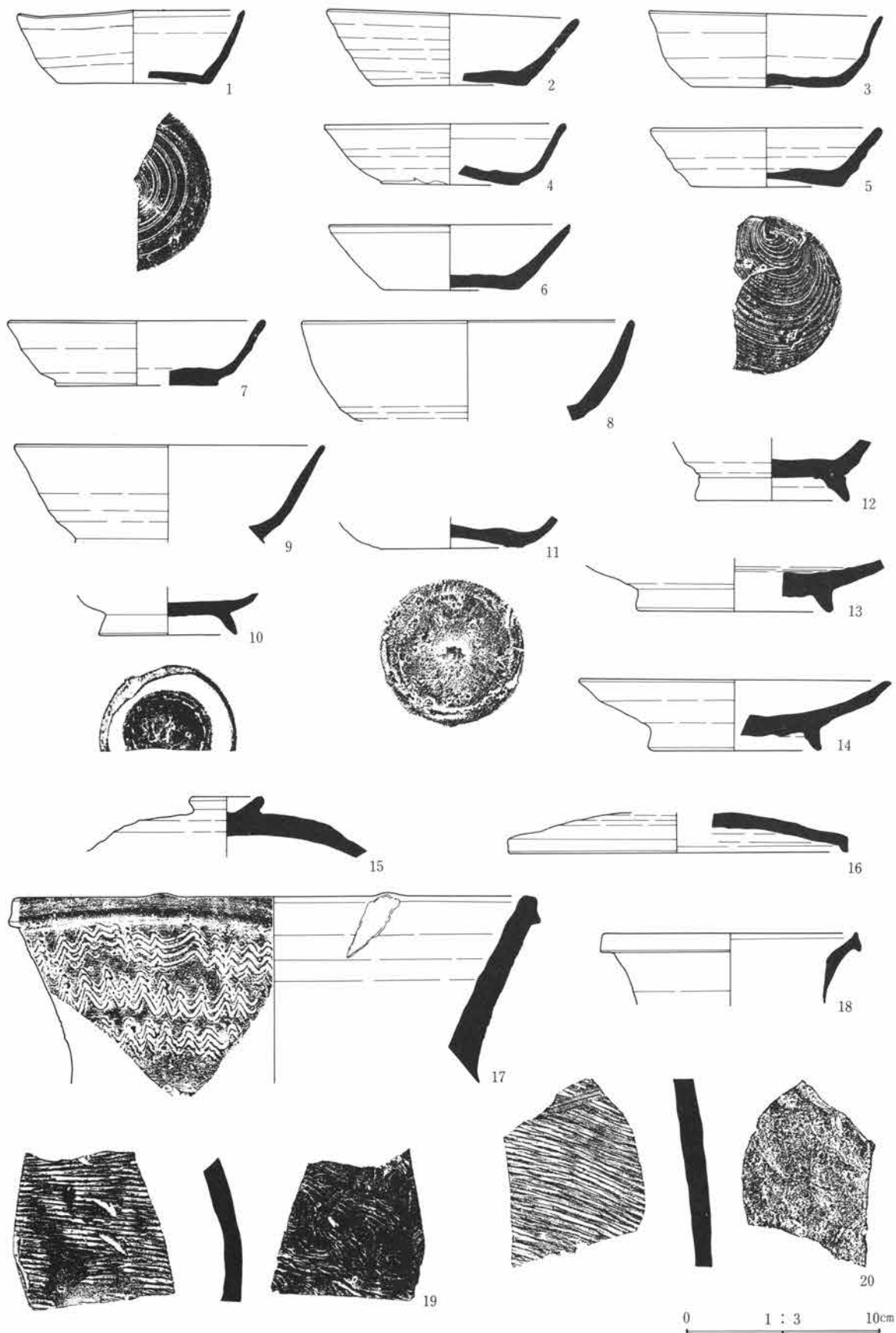


图56 蛇喰地区表面采集遗物实测图

(2) 日向地区表採遺物について

ここで掲載した遺物は、安中市大字下秋間字日向で表面採集された遺物である。

表採遺物はコンテナにして1箱の3分の2であり、その30% (570 g) が須恵器であった。須恵器はいずれも小片または細片であるため、実測図は掲載しなかった。須恵器の時期は9世紀前～中頃のを主体としている。

縄文土器は小片が数点表面採集された。帰属時期は前期から中期にかけてのものである。石器類は製品及び破片で10数点表採された。打製石斧、多孔石、叩石の製品と剥片がある。帰属時期は縄文土器の時期と大きな開きはないと思われる。周辺の縄文時代遺物の分布をみると、古くは早期となり、前期・中期を主体としている。ここでの遺物はそうした状況に従うものとおもわれる。

図版No P L No	色 調	遺 物 の 特 徴
57-1 P L 15	明赤褐色	胎土に径1mm前後の砂粒を含む。縦位のLr右巻きの然糸で施文された胴部破片。中期勝坂式期のものと思われる。
57-2 P L 15	褐色	胎土に径1mm程の細かい砂粒を多く含む破片。やや太く明瞭な沈線により曲線的な区画を描き、区画内には、単節もしくは複節のLR縄文が施される。中期加曾利E3式期のものと思われる。
57-3 P L 15	黒褐色	胎土に径1mm前後の細かい砂粒を多く含む胴部破片。縄文（RL単節斜行）が見られるが、押圧が弱く不明瞭である。前期諸磯a式期のものと思われる。
57-4 P L 15	明褐色	胎土に径1～3mmの粗い砂粒・小石・黄白色の雲母片が多く見られる。波状口縁部破片。2条の角押文が破片端部にみられる。口唇部には、輪積痕が僅かに残り、やや厚くなる。阿玉台II式期か。

図版No P L No	器 種	石 質	計測値 (カッコ内は現存値) ①全長②最大幅③最大厚④重量	遺 物 の 特 徴
57-5 P L 15	砥石	砥沢石	①7.0cm ②3.1cm ③1.4cm ④58g	完形。形状は短冊形。表裏面及び両側面が磨減している。
57-6 P L 無	剥片	硬質泥岩	①(4.6)cm ②(3.8)cm ③(1.6)cm ④30g	剥片の側辺には加工痕がある。
57-7 P L 無	剥片	灰色安山岩?	①(8.8)cm ②(7.5)cm ③(0.9)cm ④84g	剥片の側片には加工痕がある。
57-8 P L 15	打製石斧	珪質頁岩	①(7.8)cm ②5.2cm ③2.1cm ④96g	一部が欠損。やや扁平で短冊形。両側辺はほぼ直線的だが、僅かに抉られている。
57-9 P L 15	打製石斧	硬質泥岩	①(5.7)cm ②3.4cm ③2.3cm ④59g	一部が欠損。肉厚で短冊形。両側辺がほぼ直線的である。
57-10 P L 無	打製石斧	細粒安山岩	①(5.2)cm ②4.5cm ③1.2cm ④41g	一部が欠損。扁平で短冊形? 両側辺はほぼ直線的である。
57-11 P L 15	叩き石	粗粒安山岩	①10.2cm ②7.0cm ③(4.0)cm ④374g	一部が欠損。やや肉厚で楕円形。3側面に叩き痕がある。
57-12 P L 15	多孔石	粗粒安山岩	①20.2cm ②(15.4)cm ③4.0cm ④1,350g	一部が欠損。扁平で楕円形。器面に敲打による凹みがある。

表18 日向地区表面採集遺物観察表

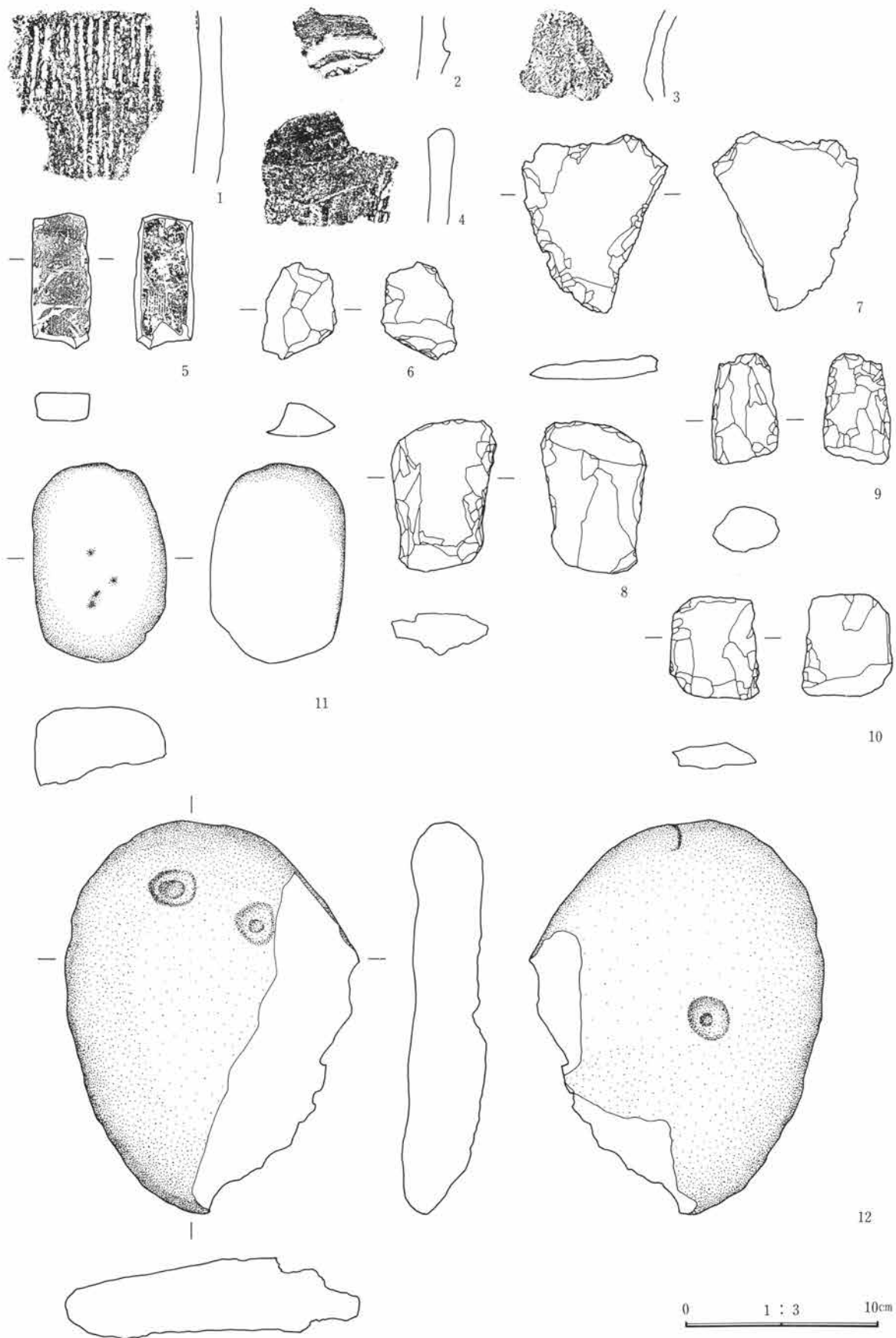


图57 日向地区表面采集遗物实测图

(3) 三角谷津地区表面採集遺物について

ここで掲載した遺物は、安中市大字中秋間字三角谷津で表面採集された遺物である。

表面採集遺物はコンテナにして1箱であり、全て須恵器（9,300g）であった。須恵器の多くが小片であり、実測可能な遺物を選定し、掲載した。器種は坏・高坏・壺・甕が主体である。帰属時期は8世紀中頃を主体としている。

図版No P L No	器種 種別	①残存 ②法量 ③形態の特徴 ④手法の特徴 ⑤色調 ⑥備考
58-1 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：25% 底部：20% ②口縁径：13.1cm（推定） 底径：9.8cm（推定） 器高：3.1cm ③口～体部：直線の 外斜 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤灰白色
58-2 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：15% 底部：30% ②口縁径：16.8cm（推定） 底径：11.0cm（推定） 器高：3.2cm ③口～体部：口唇 部で外彎 底部：平底 やや上げ底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤暗灰色 ⑥外面に自然釉
58-3 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：10% 底部：80% ②口縁径：13.1cm（推定） 底径：7.7cm 器高：3.0cm ③口～体部：口唇部で外彎 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤暗灰色
58-4 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：5% 底部：80% ②口縁径：11.2cm ③口～体部：外斜？ 底部：平底 やや上げ底 ④口～体部：轆轤 成形 底部：回転篋切り ⑤暗灰色
58-5 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：5% 底部：30% ②底径：9.8cm（推定） ③口～体部：外斜？ 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤暗灰色
58-6 P L 無	坏 須恵器	①口～体部：～5% 底部：30% ②底径：9.0cm（推定） ③口～体部：外斜？ 底部：平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転篋切り ⑤暗灰色
58-7 P L 無	高台坏 須恵器	①口～体部：30% 底部：～5% ②口縁径：13.4cm（推定） ③口～体部：外斜 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転 糸切り 高台部：不明 ⑤暗灰色 ⑥高台貼り付け痕あり
58-8 P L 無	坏 蓋 須恵器	①口縁部：20% 天井部：～5% ②口縁径：14.0cm（推定） 天井径：11.8cm（推定） 器高：3.2cm ③口縁部：直 線的に立ち上がる 口唇部は面取り 天井部：平坦 ④口～天井部：轆轤成形 ⑤暗灰色
58-9 P L 無	盤 須恵器	①口～体部：20% 底部：5% ②口縁径：20.6cm（推定） 底径：17.2cm（推定） 器高：4.0cm ③口～体部：直線 的外斜 底部：平底 付け高台 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り 高台部：ヨコナデ ⑤暗灰色
58-10 P L 無	皿 須恵器	①口～体部：20% 底部：10% ②底径：10.3cm（推定） 器高：2.6cm？ ③口～体部：やや外彎気味に外斜 底部： 平底 ④口～体部：轆轤成形 底部：回転糸切り ⑤黒灰色 ⑥焼成時の変形品 外面に自然釉
58-11 P L 16	坏 蓋 須恵器	①つまみ：100% 天井～口縁部：70% ②つまみ径：3.8cm 口縁部径：14.8cm（推定） つまみ高：0.5cm 器高：1.8 cm ③つまみ：大きく偏平 天井部：偏平 かえり：短く断面三角 ④つまみ：貼り付け 天井～口縁：轆轤成形 ⑤ 暗灰色
58-12 P L 16	坏 蓋 須恵器	①つまみ：100% 天井～口縁部：50% ②つまみ径：4.0cm 口縁部径：15.2cm（推定） つまみ高：0.6cm 器高：1.4 cm ③つまみ：大きく偏平 天井部：偏平 かえり：短く断面三角 ④つまみ：貼り付け 天井～口縁：轆轤成形 ⑤ 暗灰色
58-13 P L 16	脚付盤 須恵器	①坏部：0% 脚部：95% ②底部径：12.6cm 脚部高：7.4cm ③脚部：やや短脚 外彎して裾開く 裾部：短く僅 かに外斜 ④脚部：轆轤成形 ⑤黒灰色 ⑥内外面に自然釉付着
58-14 P L 無	薬 壺 須恵器	①体部：10% ②肩部径：16.0cm（推定） ③体部：上位に最大径 肩部：明瞭な稜をもつ ④体部：轆轤成形 肩部： 列点文あり ⑤暗灰色 断面はセピア色 ⑥外面に自然釉付着
58-15 P L 16	薬 壺 須恵器	①体部：10% ②肩部径：21.2cm（推定） ③体部：上位に最大径 肩部：明瞭な稜をもつ ④体部：轆轤成形 肩部： 列点文あり ⑤暗灰色 断面はセピア色
58-16 P L 16	甕 須恵器	①口縁部：0% 体部：10% 底部：5% ②底部径17.4cm（推定） ③体部：僅かに内彎気味に外斜 底部：平底 ④ 体部：輪積み成形後、タタキ（外面は平行文 内面はナデ） 底部：ナデ調整 ⑤黄灰色
59-17 P L 16	鉢 須恵器	①口縁部：10% 体部：0% 底部：0% ②口縁部径：17.4cm（推定） ③口縁部：僅かに外斜気味に直立 口唇部は 折り返し ④口縁部：輪積み成形後、ヨコナデ ⑤灰白色
59-18 P L 16	長頸壺 須恵器	①口～体部：0% 底部：10% ②底部径：12.8cm（推定） ③高台：断面三角形で体部との境に明確な沈線をもつ ④ 底部：貼り付け高台 貼り付け後、丁寧なヨコナデ ⑤灰白色
59-19 P L 無	盤 須恵器	①口～体部：～5% 底部：20% ②底部径：12.2cm（推定） ③高台：断面三角形で体部との境に明確な沈線をもつ ④底部：回転篋切り 貼り付け高台 貼り付け後、丁寧なヨコナデ ⑤暗灰色
59-20 P L 16	長頸壺 須恵器	①体部：5% ②肩部径：27.0cm（推定） ③体部：上位に最大径 肩部：明瞭な稜をもつ ④体部：轆轤成形 ⑤暗 灰色 断面はセピア色
59-21 P L 16	薬 壺 須恵器	①口縁部：15% 体部：～5% ②口縁部径：11.8cm（推定） ③口縁部：短く直立 体部：上位に最大径 ④口縁部： ヨコナデ 口唇部は面取り 体部：輪積み成形後、ヨコナデ ⑤灰色 ⑥外面に自然釉付着
59-22 P L 16	甕 須恵器	①口縁部：0% 体部：～5% 底部：0% ④体部：輪積み成形後、タタキ（外面は平行文 内面は貝殻状の当て具 を使用） ⑤黄灰色 ⑥内外面に自然釉付着
59-23 P L 無	甕 須恵器	①口縁部：0% 体部：～5% 底部：0% ④体部：輪積み成形後、タタキ（外面は平行文 内面は青海波文の当て 具を使用） ⑤黄灰色 ⑥内外面に自然釉付着

表19 三角谷津地区表面採集遺物観察表

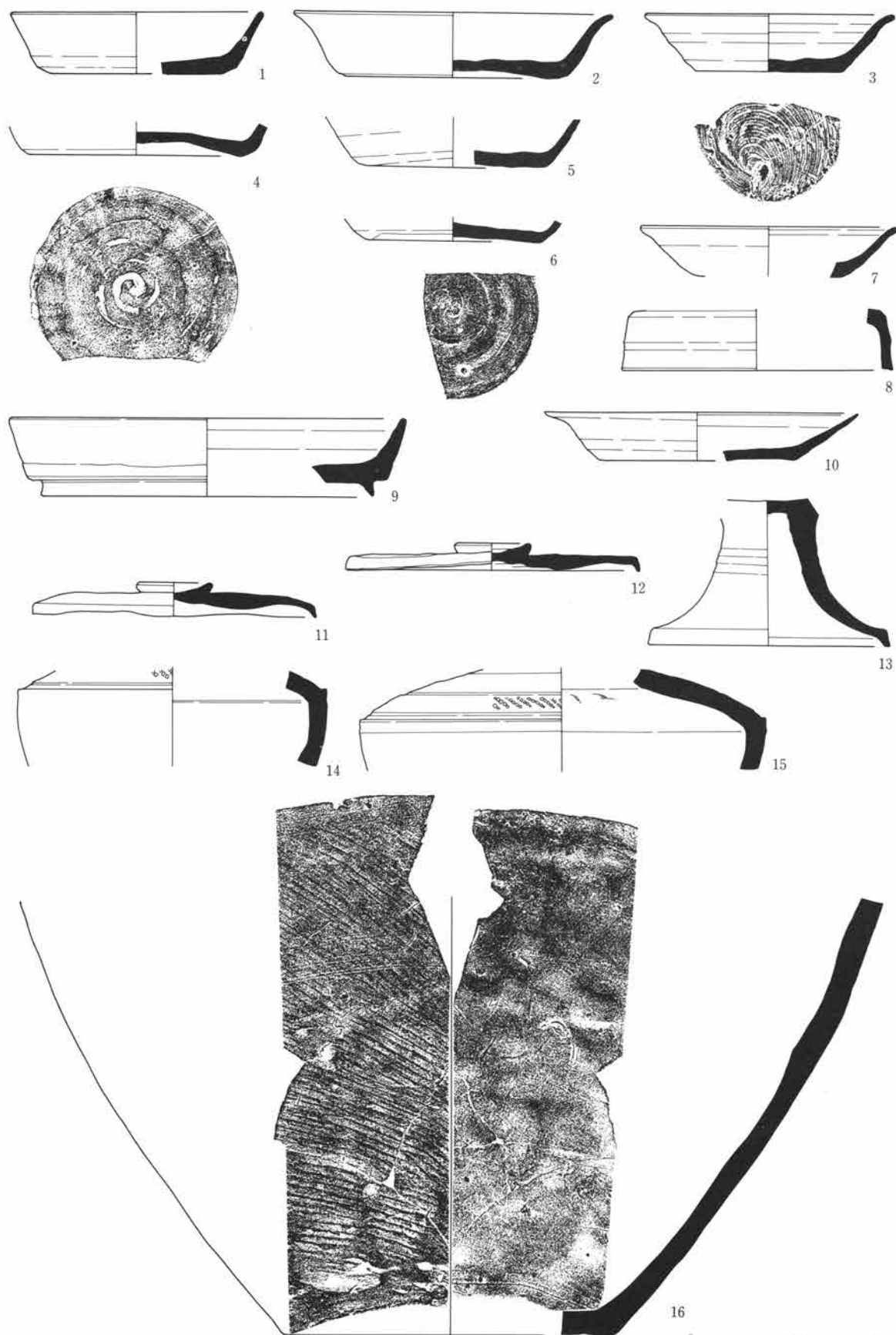
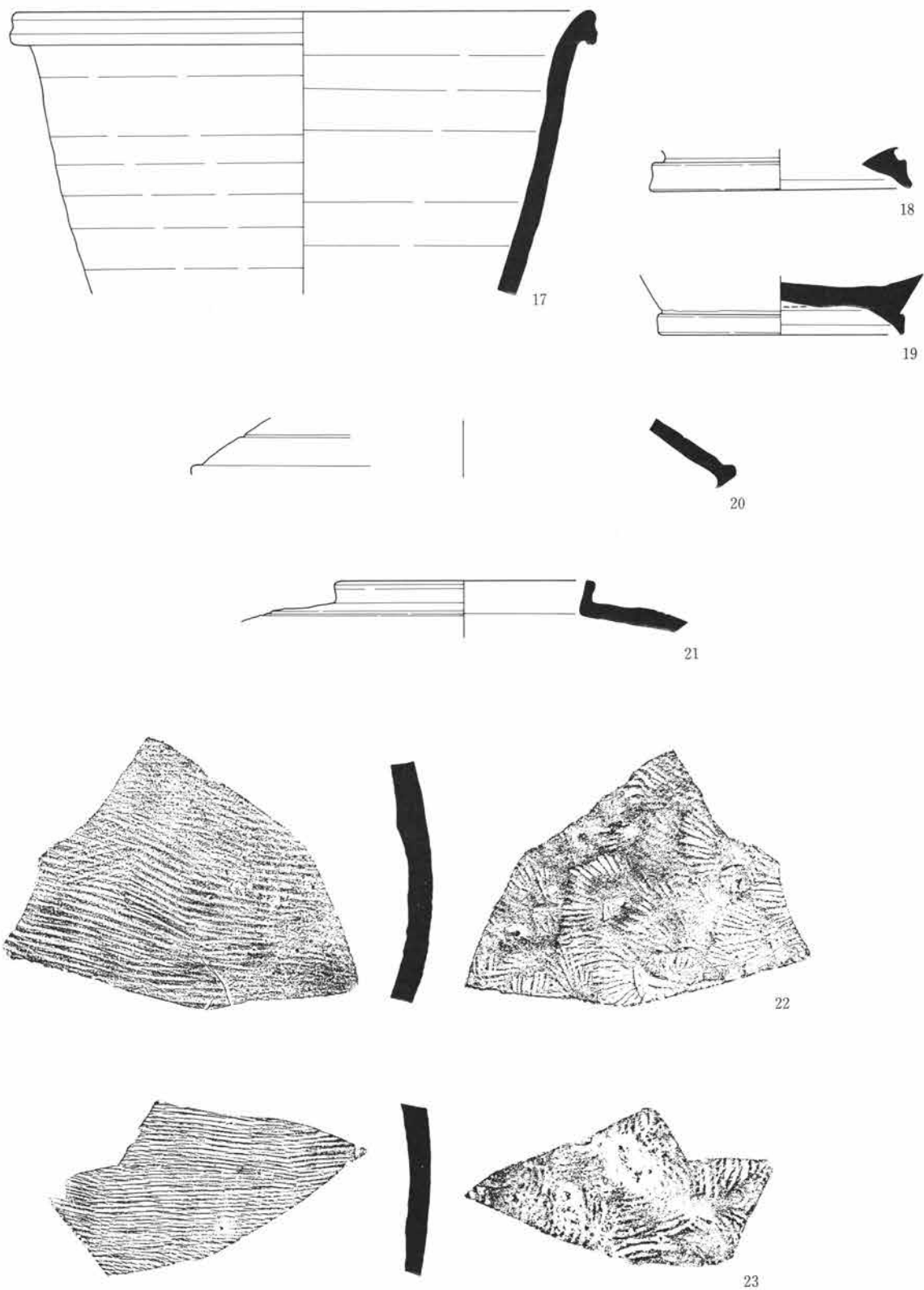


图58 三角谷津地区表面采集遗物实测图(1)



0 1 : 3 10cm

图59 三角谷津地区表面采集遗物实测图(2)

写 真 图 版



1 調査区風景 (南から)



2 炭焼窯 (東から)



3 炭焼窯 (東から)



4 炭焼窯 (東から)



5 炭焼窯 (南から)



1 As-B下水田全景 (空撮)



2 調査風景 (西から)



3 北トレンチ全景 (西から)



4 調査風景 (西から)



5 下段トレンチ全景 (西から)



1 調査区遠景（北から）



2 調査区全景（空撮）

PL 4 : 東上秋間稲貝戸遺跡



1 調査前風景 (北から)



2 試掘トレンチ全景 (西から)



3 西側調査区全景 (西から)



4 1号土坑 (東から)



5 2号土坑 (西から)



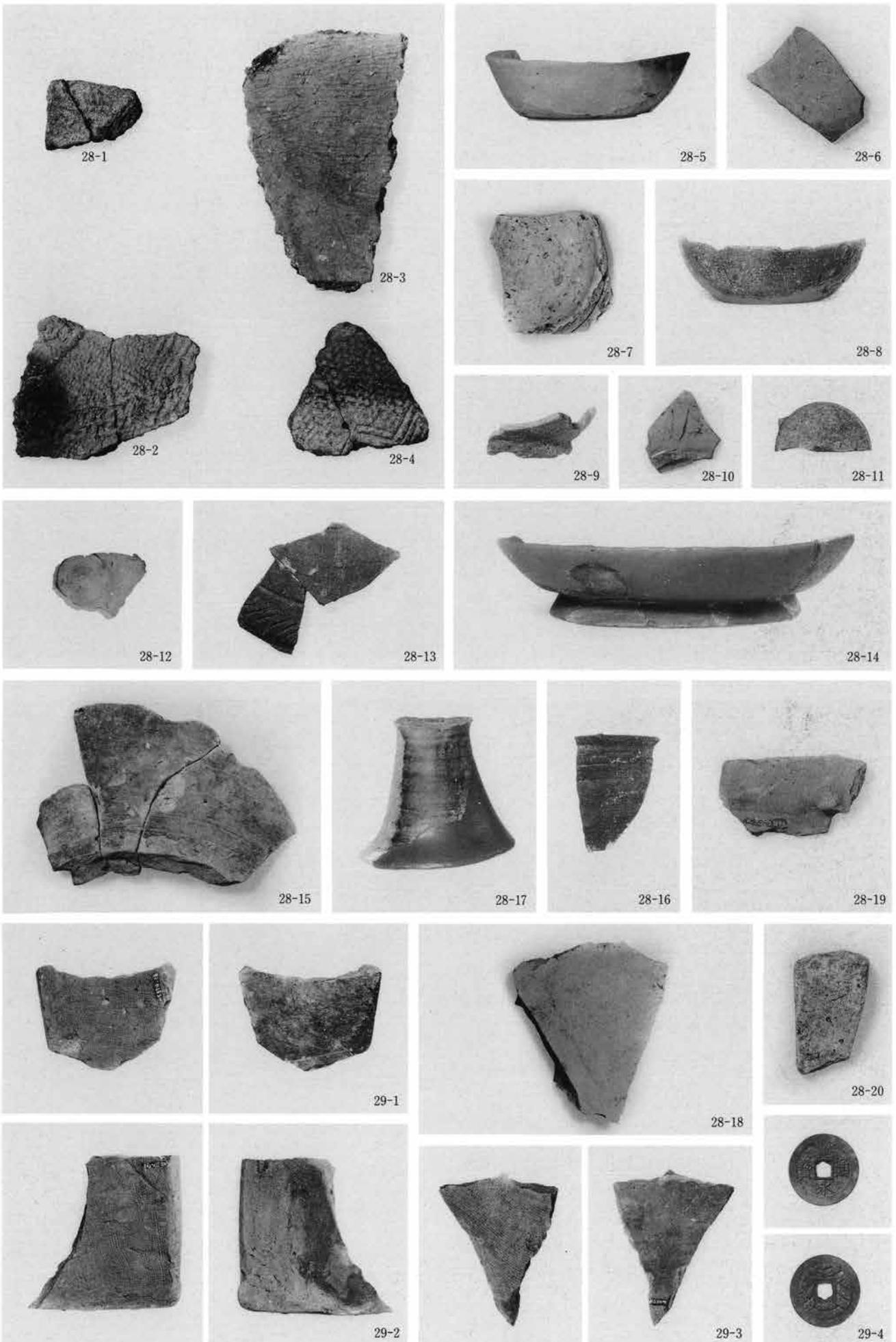
6 3・4号土坑 (東から)



7 5号土坑 (西から)



8 6号土坑 (東から)





1 調査区遠景（南から）



2 調査区全景（空撮）



1 東斜面試験掘 (西から)



2 As-A下水田セクション (東から)



3 西斜面試験掘 (西から)



4 東斜面試験掘 (南から)



5 西斜面試験掘 (西から)



1 As-A下水田足跡群 (南西から)



2 As-A下水田足跡 (西から)



3 As-A下水田足跡 (西から)



4 As-A下畠 (北東から)



5 As-A下水田足跡 (西から)



1 炭焼窯（南から）



2 炭焼窯（南から）



3 炭焼窯（南から）



4 炭焼窯（南から）



5 炭焼窯（南西から）



1 調査区全景（空撮）



2 水田？（南西から）



3 水田？内礫出土状況（西から）



4 水田？（西から）



5 沢内流木出土状況（南東から）



1 1号溝 (西から)



2 2号溝 (東から)



3 3号溝 (北から)



4 4号溝 (北から)



5 5号溝 (南から)



6 6号溝 (北から)



7 7号溝 (南から)



1 登窯（西から）



2 登窯セクション（西から）



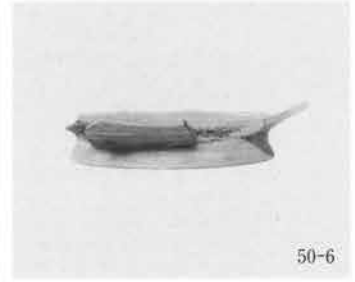
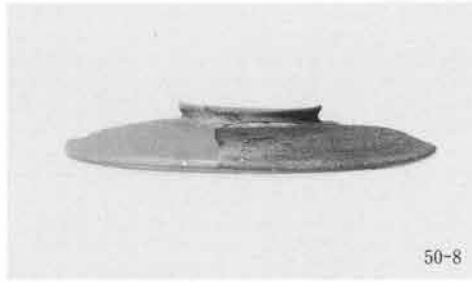
3 登窯（北西から）



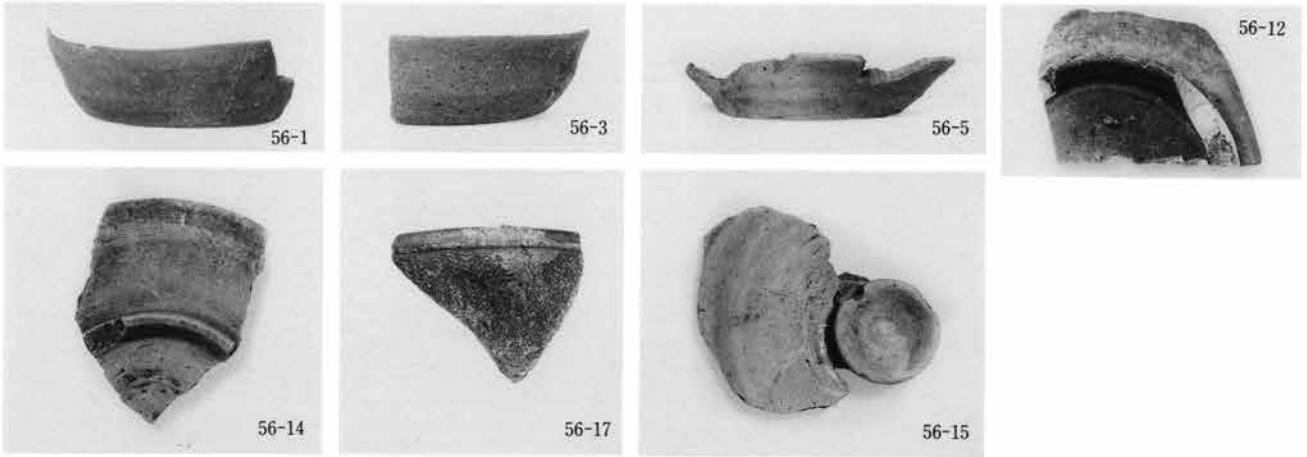
4 灰原付近近接（西から）



5 登窯奥部焼石炭化材出土状況（西から）



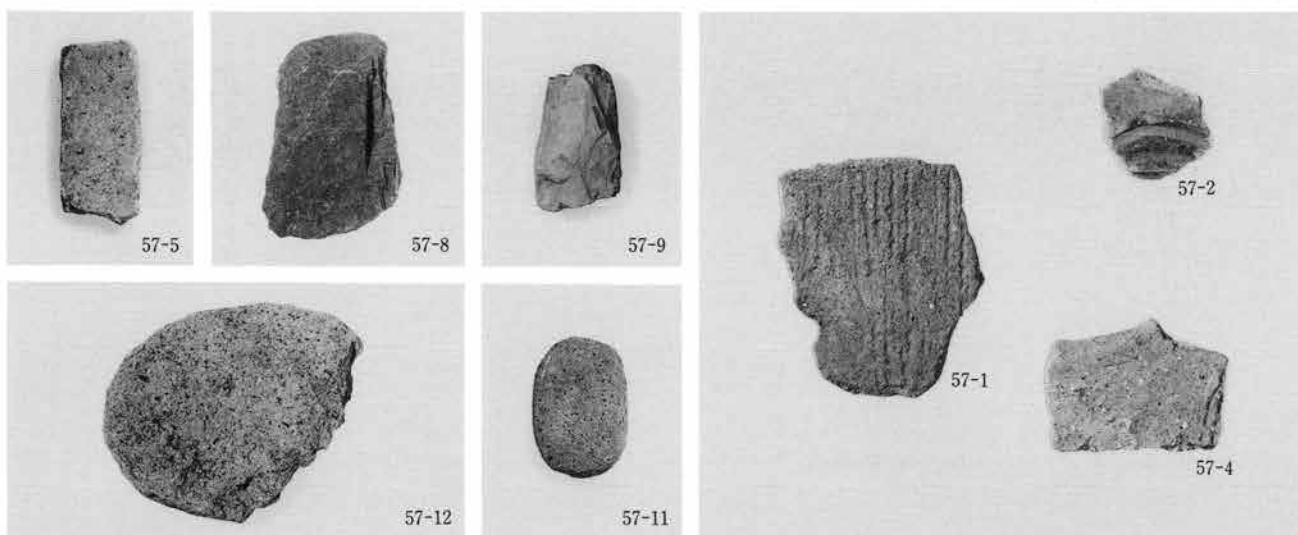
PL14：蛇喰地区表面採集遺物



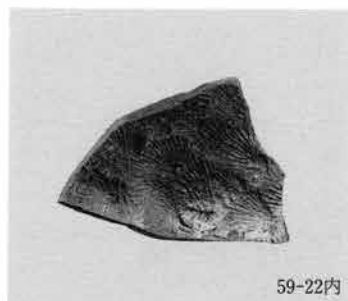
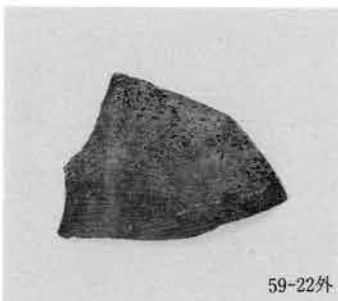
表面採集須恵器片集合 1



表面採集須恵器片集合 2



PL16：三角谷津地区表面採集遺物



財群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第195集

東上秋間遺跡群

北陸新幹線地域埋蔵文化
財発掘調査報告書第2集

平成7年10月24日 印刷

平成7年10月31日 発行

編集・発行／財群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村下箱田784-2

電話(0279) 52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社